宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 148 集

八幡（はちまん）第２遺跡

Hatiman　2　Site

東九州自動車道 (都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 43

２００７

宮崎県埋蔵文化財センター

八幡第 2 遺跡遠景（手前：名貫川　奥：尾鈴山方面）

巻頭図版２

Ａ－２区調査区

ＳＡ８　炭化材検出状況

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

本書に掲載した八幡第 2 遺跡は、平成 16 年度から 17 年度に発掘調査を行ったものです。川南町に所在し、縄文時代草創期の集石遺構や隆帯文土器、弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されました。特に検出した竪穴住居跡 9 軒のうち 5 軒で、多くの炭化材や焼土を伴う焼失住居が見つかりました。また、竪穴住居跡からは多くの土器が出土し、その中には 7 号住居出土の長頸壺のように高知県との交流をうかがい知ることができるものもあり、貴重な資料です。

ここに報告する内容が学術資料となるだけでなく学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・御協力を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　清　野　勉

例言

1. 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、平成 16 年度から 17 年度にかけて、宮崎県教育委員会が 実施した児湯郡川南町所在の八幡第２遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。

3. 現地での実測等の記録は、安部直人・大山博志・向江修一・森本征明・山下健一が行い、発掘作業員が補助した。

4. 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、実測図の作成及び浄書は森本が行った他整理作業員が補助した。

5. 本書中の遺構写真及び遺物写真は安部・森本が撮影したものを使用した。

6. 測量・空中写真撮影・自然科学分析は、次の機関に委託した。

   基準杭設置：（有）久保田測量設計

   空中写真：（有）スカイサーベイ九州

   年代測定・植物珪酸体分析・樹種同定・種実同定：（株）古環境研究所

7. 本書に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

   ＳＡ・・竪穴住居跡　ＳＣ・・土坑　ＳＥ・・溝状遺構　ＳＩ・・集石遺構

8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の１/25,000 地形図をもとに、遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所から提供の１/1000 測量図をもとに作成した。

9. 本書で用いた標高は海抜高であり、方位は座標北（G.N.) を基本とし、遺構実測図等の一部に磁北を（M.N.) を用いた。

10. 国土座標は、旧国土座標第Ⅱ系を基に設定している。

11. 土層及び土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準拠した。

12. 本書の執筆・編集は森本が担当した。

13. 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

1.　挿図の縮尺

　遺構分布図＝１：200，１：250，１：300，１：400

　遺構実測図＝１：20，１：60，１：80

　土器＝１：４　石器＝１：２，１：３を基本とし、以外のものを含めて挿図中にその縮尺を明示した。

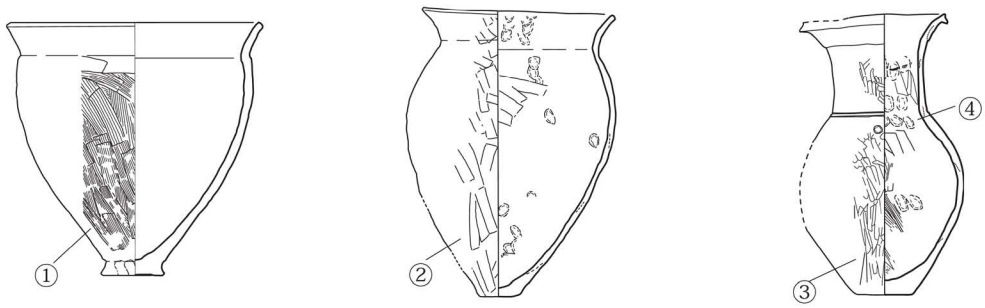
2.　図版の縮尺

　遺構・遺物写真などの縮尺については任意であり、統一していない。

3.　土器観察表の計測値は、単位はｃｍである。

4.　土器の実測図中の記号・表示は下記に示す。

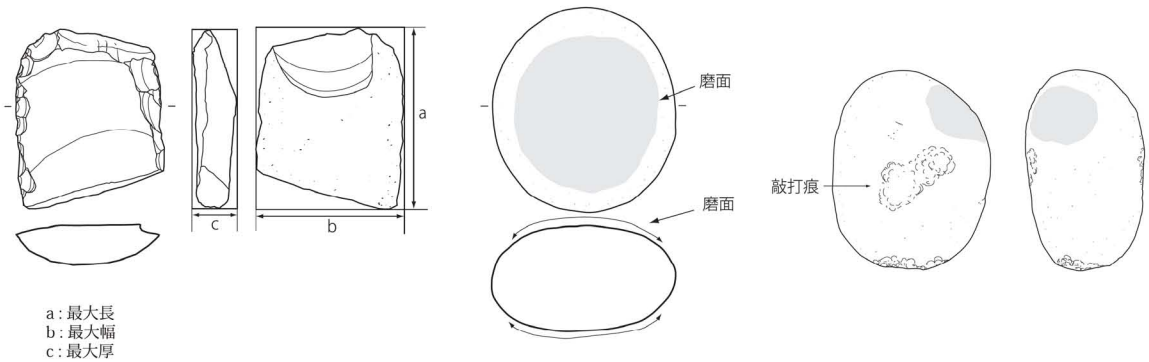
弥生土器の調整



①はハケ目、②は板状工具によるナデ、③はヘラミガキ、④指頭痕

5.　石器計測表の計測値は、下記の計測方法によるものである。単位はｃｍ、ｇである。

6.　石器実測図中の記号や表示は以下のものに示す。



7.　本書に記載する層序について

　層（テフラ・ローム層）の呼称は、『平成 16 年度東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』第Ⅰ章第３節の記載に準じる。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第Ⅱ章　遺跡の環境
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅲ章　調査の経過
第１節　確認調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第２節　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３節　整理作業及び報告書作成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第Ⅳ章　調査の記録
第１節　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第２節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３節　縄文時代草創期の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第４節　縄文時代早期の遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第５節　弥生時代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第６節　時期不明の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第Ⅴ章　自然科学分析
第１節　目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第２節　放射性炭素年代測定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第３節　樹種同定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第４節　植物珪酸体分析（灰像分析）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第５節　炭化種実同定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第Ⅵ章　まとめ
第１節　縄文時代草創期 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第２節　弥生時代後期 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・3
第２図　周辺地形図及び確認調査トレンチ配置図5
第３図　グリッド配置図・・・・・・・・・・・・6
第４図　Ｂ区土層断面図・・・・・・・・・・・・7
第５図　ＳＩ１実測図・・・・・・・・・・・・・8
第６図　Ⅵ層遺物分布図・・・・・・・・・・・・8
第７図　Ⅵ層出土土器実測図・・・・・・・・・・9
第８図　Ⅵ層出土石器実測図・・・・・・・・　10
第９図　自然流路実測図・土層断面図・・・・　11
第10図　赤化礫の集まり実測図 ・・・・・・　12
第11図　Ⅴ層出土石器実測図 ・・・・・・・　13
第12図　A-1区遺構分布図・・・・・・・・・　14
第13図　ＳＡ１・ＳＡ３出土遺物実測図 ・・　14
第14図　ＳＡ１・ＳＡ３実測図 ・・・・・・　15
第15図　ＳＡ２出土遺物実測図 ・・・・・・　15
第16図　ＳＡ２実測図 ・・・・・・・・・・　16
第17図　A-2区遺構分布図・・・・・・・・・　16
第18図　ＳＡ４実測図 ・・・・・・・・・・　17
第19図　ＳＡ４フローテーション区割図 ・・　17
第20図　ＳＡ４出土遺物実測図１ ・・・・・　18
第21図　ＳＡ４出土遺物実測図２ ・・・・・　19
第22図　ＳＡ５実測図 ・・・・・・・・・・　20

第23図　ＳＡ５出土遺物実測図１　・・・・・　21
第24図　ＳＡ５出土遺物実測図２　・・・・・　22
第25図　ＳＡ５フローテーション区割図　・・　22
第26図　ＳＡ７実測図　・・・・・・・・・・　23
第27図　ＳＡ７フローテーション区割図　・・　23
第28図　ＳＡ７貼床除去後実測図　・・・・・　24
第29図　ＳＡ７床面出土遺物実測図１　・・・　25
第30図　ＳＡ７床面出土遺物実測図２　・・・　26
第31図　ＳＡ７覆土出土遺物実測図１　・・・　27
第32図　ＳＡ７覆土出土遺物実測図２　・・・　28
第33図　ＳＡ８実測図　・・・・・・・・・・　28
第34図　ＳＡ８出土遺物実測図　・・・・・・　29
第35図　ＳＡ８焼土検出状況図　・・・・・・　30
第36図　ＳＡ８フローテーション区割図　・・　30
第37図　ＳＡ９実測図　・・・・・・・・・・　31
第38図　ＳＡ９出土遺物実測図　・・・・・・　31
第39図　ＳＡ９フローテーション区割図　・・　32
第40図　ＳＡ10実測図　・・・・・・・・・・　33
第41図　ＳＡ10出土遺物実測図　・・・・・・　33
第42図　ＳＣ１実測図　・・・・・・・・・・　34
第43図　ＳＣ１出土遺物実測図　・・・・・・　34
第44図　包含層出土遺物実測図　・・・・・・　35
第45図　撹乱土坑出土遺物実測図１　・・・・　36
第46図　撹乱土坑出土遺物実測図２　・・・・　37
第47図　撹乱土坑出土遺物実測図３　・・・・　38
第48図　A-1区ＳＥ１～７分布図・・・・・・　52
第49図　A-1区ＳＥ１～７土層断面図・・・・　52
第50図　Ｂ区ＳＥ８～14分布図　・・・・・・　53
第51図　Ｂ区ＳＥ８～14土層断面図　・・・・　53

表　目　次

第１表　Ⅵ層出土土器観察表・・・・・・・・　9
第２表　Ⅴ・Ⅵ層出土石器計測表・・・・・・　13
第３表　ＳＡ４出土種実同定表・・・・・・・　17
第４表　ＳＡ５出土種実同定表・・・・・・・　22
第５表　ＳＡ７出土種実同定表・・・・・・・　24
第６表　ＳＡ８出土種実同定表・・・・・・・　30
第７表　ＳＡ９出土種実同定表・・・・・・・　32
第８表　弥生土器観察表１・・・・・・・・・　39
第９表　弥生土器観察表２・・・・・・・・・　40
第10表　弥生土器観察表３　・・・・・・・・　41
第11表　弥生土器観察表４　・・・・・・・・　42
第12表　弥生土器観察表５　・・・・・・・・　43
第13表　弥生土器観察表６　・・・・・・・・　44
第14表　弥生土器観察表７　・・・・・・・・　45
第15表　弥生土器観察表８　・・・・・・・・　46
第16表　弥生土器観察表９　・・・・・・・・　47
第17表　弥生土器観察表10・・・・・・・・・　48
第18表　弥生土器観察表11・・・・・・・・・　49
第19表　弥生時代石器計測表　・・・・・・・　50

図　版　目　次

巻頭図版１　八幡第2遺跡遠景（手前：名貫川
　　奥：尾鈴山方面）
巻頭図版２　A-２区調査区
　　ＳＡ８炭化材検出状況
図版１　A-2区・B区調査区全景　・・・・・・　63
　　縄文時代調査区（Ｂ区）・・・・・・　63
図版２　縄文時代草創期調査区・・・・・・・　64
　　自然流路検出状況・・・・・・・・・・　64
　　ＳＩ１検出状況・・・・・・・・・・・　64
　　ＳＩ１半截状況・・・・・・・・・・・　64
　　赤化礫の集まり１・・・・・・・・・・　64
　　赤化礫の集まり１半截状況・・・・・　64
　　赤化礫の集まり２・３検出状況・・・　64
　　隆帯文土器出土状況・・・・・・・・・　64
図版３　A-１区調査区全景(北より)　・・・・　65
　　A-１区調査区全景(東より)　・・・・　65
　　ＳＡ１・ＳＡ３貼床面状況・・・・・　65
　　ＳＡ２貼床面状況・・・・・・・・・・　65
　　ＳＡ４貼床面状況・・・・・・・・・・　65
　　ＳＡ５貼床面状況・・・・・・・・・・　65
　　ＳＡ５壺（52）出土状況　・・・・・　65
　　ＳＡ４・ＳＡ５貼床除去後・・・・・　65
図版４　ＳＡ７貼床面状況・・・・・・・・・　66
　　ＳＡ７遺物出土状況・・・・・・・・・　66
　　ＳＡ８焼土検出状況・・・・・・・・・　66
　　ＳＡ８貼床面状況・・・・・・・・・・　66

ＳＡ９貼床面状況・・・・・・・・・・ 66
ＳＡ９炭化材検出状況・・・・・・・ 66
ＳＡ10貼床面状況 ・・・・・・・・・ 66
ＳＡ９・ＳＡ10貼床除去後 ・・・・ 66
図版５ ＳＡ７・ＳＡ９・ＳＡ10貼床除去後 ・67
ＳＡ８貼床除去後・・・・・・・・・・ 67
図版６ ＳＣ１遺物出土状況・・・・・・・・ 68
A‐１区 ＳＥ１ ・・・・・・・・・・ 68
A‐１区 ＳＥ４・ＳＥ５ ・・・・・ 68
B区 ＳＥ８検出状況 ・・・・・・・ 68
B区 ＳＥ８・ＳＥ10～14 ・・・・ 68
B区 ＳＥ８・ＳＥ９ ・・・・・・・・ 68
B区 ＳＥ８・ＳＥ11～14 ・・・・ 68
B区 ＳＥ12～14 ・・・・・・・・・ 68
図版７ 第Ⅵ層出土土器・・・・・・・・・・ 69
第Ⅵ層出土石器・・・・・・・・・・ 69
第Ⅴ層出土石器・・・・・・・・・・ 69
ＳＡ１～３出土遺物・・・・・・・・ 69
ＳＡ４出土遺物・・・・・・・・・・ 69
図版８ ＳＡ５出土遺物・・・・・・・・・・ 70
ＳＡ８出土遺物・・・・・・・・・・ 70
図版９ ＳＡ７出土土器・・・・・・・・・・ 71
ＳＡ７出土石器・・・・・・・・・・ 71
図版10 ＳＡ９出土遺物 ・・・・・・・・・・ 72
ＳＡ10出土遺物 ・・・・・・・・・・ 72
ＳＣ１出土遺物・・・・・・・・・・ 72
撹乱土坑出土土器１・・・・・・・・ 72
撹乱土坑出土土器２・・・・・・・・ 72

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年２月に基本計画が決定し、平成９年３月には整備計画路線となった。さらに平成９年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の２月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成６年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

本遺跡では、平成15年11月13日～16年２月20日に確認調査を実施した。確認調査は調査区内に町道が通っていることから、Ａ区とＢ区とに分けて行われた。Ａ－１区では弥生時代の遺物のほか竪穴住居跡が検出され、Ｂ区は溝状遺構や縄文時代の遺構・遺物が確認された。A-１区は、今回の調査部分以外に遺構が検出される部分はないと判断され、確認調査で記録をとった。本調査については遺構・遺物が確認されたＢ区北東部を対象として実施された。また、Ａ区南側に未調査部分があり、本調査と並行して確認調査を行うこととなった。本調査は平成16年12月１日～平成17年７月１日まで行われた。Ａ区南側の未調査部分（Ａ－２区）についてはトレンチ調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、本調査の対象となった。整理作業は平成17年９月から実施し、平成18年度に終了した。

第２節　調査の組織

八幡第２遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体　宮崎県埋蔵文化財センター

所長　米良　弘康（平成15年度）
　宮園　淳一（平成16・17年度）
　清野　勉　（平成18年度）

副所長兼総務課長
　大薗　和博（平成15・16年度）

副所長兼調査第二課長
　岩永　哲夫（平成15～18度）

副所長　加藤　悟郎（平成18年度）

総務課長
　宮越　尊　（平成17・18年度）

主幹兼総務係長
　石川　恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー
　高山　正信（平成18年度）

調査第一課長
　児玉　章則（平成15年度）
　髙山　富雄（平成16～18年度）

調査第一係長
　谷口　武範（平成15・16年度）

主幹兼調査第一係長
　長津　宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー
　長津　宗重（平成18年度）

主幹兼調査第二係長
　長津　宗重（平成15・16年度）
　菅付　和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー
　菅付　和樹（平成18年度）

（確認調査担当）
　主査　阿部　直人（平成15年度）
　主査　山下　健一（平成15年度）

（本調査担当）
　主査　大山　博志（平成16・17年度）
　主査　向江　修一（平成17年度）

（本調査・報告書担当）
　主事　森本　征明(平成16～18年度)

調査指導（敬称略）
　小畑　弘己〔熊本大学〕
　泉　拓良　〔京都大学〕
　本田　道輝〔鹿児島大学〕
　田崎　博之〔愛媛大学〕
　柳沢　一男〔宮崎大学〕
　広瀬　和雄〔国立歴史民俗博物館〕
　大塚　昌彦〔渋川市教育委員会〕
　赤塚　次郎〔愛知県埋蔵文化財センター〕

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

八幡第２遺跡（第１図１）は宮崎県川南町大字川南字八幡山に所在する。川南町は日向灘に面した宮崎県中部にあり、北に名貫川、南に小丸川に接している。町域の大部分は西部に位置する上面木山（標高 1,040 m）から派生した洪積層段丘面からなり、沖積地は町内中央部を流れる平田川河口部付近に僅かにみられるのみである。川南町の段丘面は 14 面に区分され、南から高城・川南・国光原・唐瀬原に大別される。本遺跡は川南町の北側を東流する名貫川右岸に位置し、川から２段目の河岸段丘に立地する。南側には川南町北部に広がる唐瀬原段丘面があり、その比高差は約 20 mである。

第２節　歴史的環境

本遺跡の周辺では、川南町教育委員会及び都農町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査などによって、多くの遺跡が周知されている。近年、東九州自動車道関連の発掘調査によって発掘調査数は増大している。ここでは発掘調査の行われた遺跡を中心に、時代ごとに紹介する。

旧石器時代は、川南町後牟田遺跡（第１図２）中ノ迫第１遺跡（３）、前ノ田村上第２遺跡（４）、都農町では朝倉遺跡（５）、尾立第３遺跡（６）、立野第５遺跡（７）がある。数十基の礫群やナイフ形石器、角錐状石器等の石器が確認されている。

縄文時代は、前述の後牟田遺跡、川南町中ノ迫第２遺跡（８）、上ノ原遺跡（９）、国光原遺跡（10）、西ノ別府遺跡（11）、尾花坂上遺跡（12）、都農町立野第２遺跡（13）などが挙げられる。周辺で確認されている多くの遺跡は早期の集石遺構や炉穴が検出され、押型文土器や条痕文土器が出土している。しかし近年の調査では、草創期の隆帯文土器が出土した川南町赤石・天神本遺跡（14）、前ノ田村上第２遺跡や後・晩期の竪穴住居跡が検出された赤石・天神本遺跡など早期以外の調査例も増えつつある。

弥生時代の遺跡は、前期の調査例はないが、中期以降では中期末の竪穴住居跡が検出された川南町藏座村遺跡（15）、中期末～後期の竪穴住居跡が検出された川南町湯牟田遺跡（16）がある。後期以降になると、遺跡数は増大し、それに伴い調査例も増加している。川南町東平下遺跡（17）、市納上第１遺跡（18）、赤石・天神本遺跡、大内原遺跡（19）、中の迫Ａ遺跡（20）、中ノ迫第２遺跡、前ノ田村上第１遺跡（21）、前ノ田村上第２遺跡、赤坂遺跡（22）、把言田遺跡（23）、野稲尾遺跡（24）、国光原遺跡、湯牟田遺跡、尾花Ａ遺跡（25）、都農町新別府下原遺跡（26）などが挙げられる。湯牟田遺跡や赤坂遺跡では、20 軒以上の竪穴住居跡が検出されている。湯牟田遺跡や前ノ田村上第２遺跡では、多量の炭化材と焼土が遺存する焼失住居が検出されている。湯牟田遺跡の炭化材の多くは建築部材と考えられ、その中には垂木や桁（または梁）と推定できるものもある。また都農町域では新別府下原遺跡や境ヶ谷第１遺跡で発掘調査が行われ、新別府下原遺跡では竪穴住居跡や周溝状遺構が検出されている。

古墳時代になると大規模な古墳群が台地上に築造される。川南町川南古墳群（27）は前方後円墳 25 基、円墳 25 基で現存している。最大規模の 39 号墳は柄鏡式の前方後円墳で全長 112 mを測る。詳細な築造時期は不明であるが、墳形から４世紀後半に位置づけられる。集落遺跡では尾花Ａ遺跡で古墳時代初頭～前期にかけての竪穴住居跡群が検出されている。そのほか登り口第２遺跡 (28) で中期の竪穴住居跡が１軒検出されている。

古代以降としては、上垂門で奈良時代後半～平安時代前期の蔵骨器を伴う火葬墓が挙げられる。また『延喜式』に記載された日向の駅馬のうち、去飛駅は都農町に、児湯駅は木城町に比定されており、川南町は去飛と児湯駅を結ぶ古代幹線道路の存在が推測される。

発掘調査では、銀座第１遺跡（29）や前ノ田村上第１遺跡で中世から近世の区画溝に囲まれた掘立柱建物跡群が検出されている。そのほか湯牟田遺跡では 12 ～ 14 世紀代の掘立柱建物跡群、溝状遺構などが検出されている。

1 八幡第２遺跡　2 後牟田遺跡　3 中ノ迫第１遺跡　4 前ノ田村上第２遺跡　5 朝倉遺跡　6 尾立第３遺跡　7 立野第５遺跡　8 中ノ迫第２遺跡　9 上ノ原遺跡　10 国光原遺跡　11 西ノ別府遺跡　12 尾花坂上遺跡　13 立野第２遺跡　14 赤石・天神本遺跡　15 藏座村遺跡　16 湯牟田遺跡　17 東平下遺跡　18 市納上第１遺跡　19 大内原遺跡　20 中の迫Ａ遺跡　21 前ノ田村上第１遺跡　22 赤坂遺跡　23 把言田遺跡　24 野稲尾遺跡　25 尾花Ａ遺跡　26 新別府下原遺跡　27 川南古墳群　28 登り口第２遺跡　29 銀座第１遺跡（▲は東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査遺跡）

第１図　周辺遺跡分布図　（1/50,000）

第Ⅲ章　調査の経過

第１節　確認調査の概要

確認調査は、平成15年11月13日～平成16年2月20日に実施した。調査対象面積は15,490㎡で北側をＡ区、南側をＢ区として調査を行った。Ａ区の一部は住宅の基礎部分が残っており、本調査前に確認調査を行った。調査は、幅３ｍ、長さ５～80ｍのトレンチを23箇所設定し、K-Ah上面まで掘り下げ遺構の有無の確認を行った(第２図)。

Ａ区では、耕作等による削平でK-Ahは部分的な残存であった。K-Ahの残存域で住居と思われるプランと弥生土器が確認された。そこで遺構の確認された周辺を広げ、竪穴住居跡が３軒検出された。

Ｂ区では北東部（10T～15T）と南東部（16T～20T）と堆積状況が異なる。北東部では、K-Ahが良好に残存し、溝状遺構が検出された。また、遺構が検出されなかった部分を３ｍ四方のトレンチで深掘を行ったところ、15Tで集石遺構１基と縄文土器等の遺物を確認した。一方、南東部では、削平をうけ、砂礫層の露出している部分が多くみられた。土層が堆積している部分においても、堆積は薄く、遺構、遺物は確認されなかった。

以上のことからＡ区、Ｂ区(北東部)を本調査とし、Ｂ区南東部は本調査の必要がないと判断した。Ａ区については、遺構が確認された部分以外は削平が著しく、遺構の存在する可能性がなかったため、今回の調査で記録をとることとなった。

また、本調査に先立ってＡ区の一部の未調査部分について試掘調査を行ったところ、24T、25Tで弥生土器が多く出土した。26Tでは遺構・遺物は確認されなかった。26Tでは表土下すぐに礫が多く混じる撹乱層となり、その下は砂礫層となった。確認調査の結果、南側1,000㎡を本調査対象とし、北側は本調査の必要はないと判断した。

第２節　発掘調査の方法

１　調査の方法と調査区の設定

調査区は、確認調査で付した区分けで、北側Ａ区、南側をＢ区として平成16年12月１日から調査を実施した。Ａ区については、確認調査時に終了した部分があり、その部分をA-1区とし、今回調査分をA-2区とし、A-2区、Ｂ区を並行して実施した。

Ｂ区は確認調査ではK-Ah上面で遺構が検出され、その下層は部分的な調査であったため先行してトレンチによる遺溝・遺物の有無を確認した。

その結果、北側1,000㎡は遺構・遺物がなく、礫が流れ込んだ状況であったため調査終了部分とした。南側1,500㎡については、南端の500㎡はⅥ層まで掘り下げ、残り部分はⅤ層まで全面掘り下げ、Ⅵ層以下はトレンチでの掘り下げを実施した。調査区は国土座標に準じ南北に１～15、東西にＡ～Ｒの10×10ｍのグリッドを設定した（第３図)。

２　現地説明会

平成17年５月14日に現地説明会を実施した。現地説明会は、広く町内外の方々に遺跡発掘調査の状況を紹介することにより、郷土の歴史の一端に触れていただき、地域から出土した埋蔵文化財および埋蔵文化財保護行政に対する認識と理解を一層深めてもらうという趣旨に基づき実施した。主な内容としては、発掘状況や検出遺構の説明、出土遺物の展示・説明を行った。

73名の参加を得ることができ、説明会の趣旨は達したと考えている。

第３節　整理作業及び報告書作成

１　整理作業

整理作業は、埋蔵文化財センターにおいて以下の行程で行った。

平成17年8月～10月

・遺物(土器、石器)の水洗、注記

平成17年10月～平成18年3月

・遺物の接合

平成18年4月～6月

・報告書掲載遺物(石器、土器)の実測

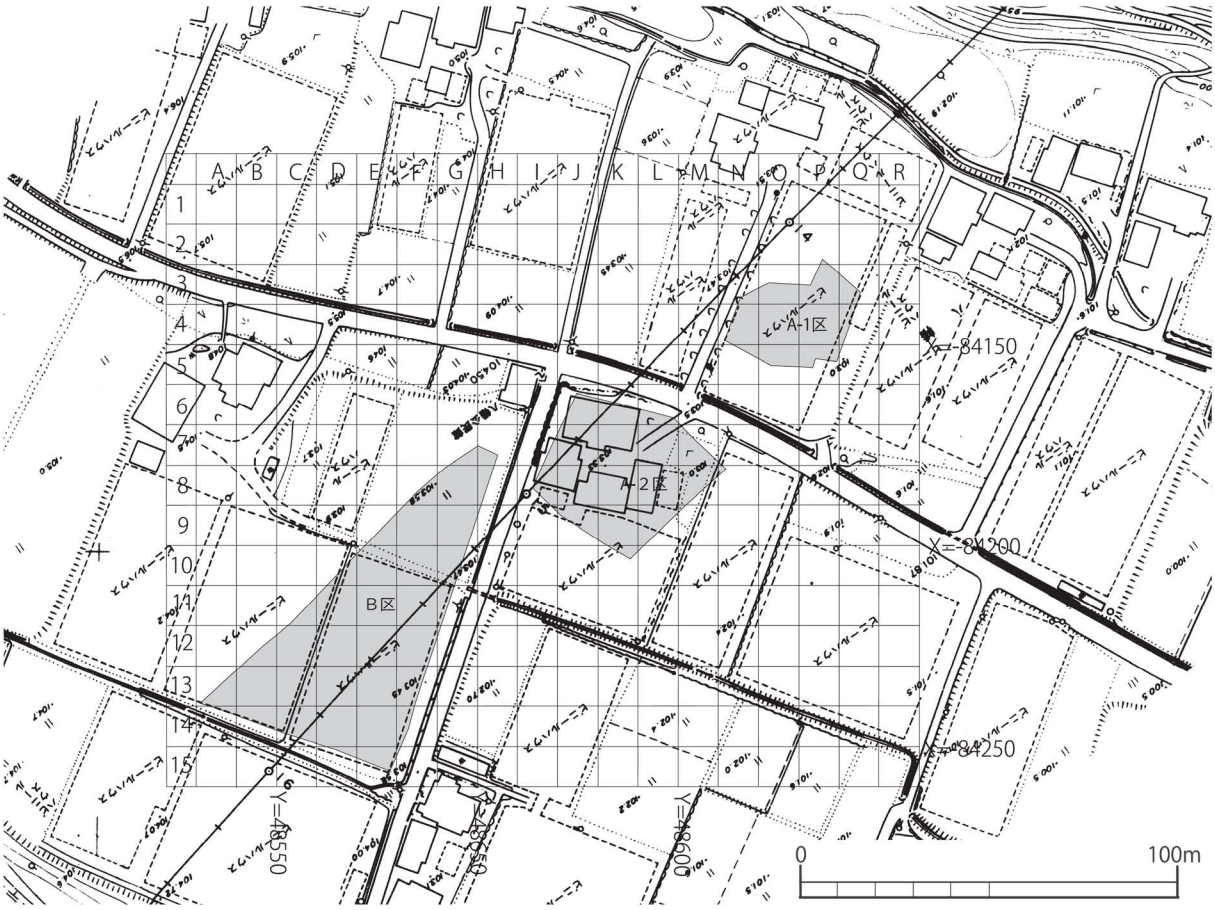
平成18年6月～7月

・報告書掲載遺物及び遺構図等のトレース

２　報告書作成

報告書作成は整理作業と並行して行い、平成18年11月に作成を完了した。

第２図　周辺地形図及び確認調査トレンチ配置図（S= 1 /2,000）



第３図　グリッド配置図 (S=1/2,000)

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　調査の概要

本遺跡の調査では、縄文時代草創期と弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。

縄文時代草創期については、Ｂ区Ⅵ層で集石遺構１基検出され、遺物としては隆帯文土器、打製石斧などが出土している。

Ｂ区Ⅴ層では、打製石鏃が４点出土している。

弥生時代後期は、A-1 区で竪穴住居跡３軒、A-2 区で竪穴住居跡６軒、土坑１基検出され、弥生土器、石庖丁、磨石、砥石などが出土している。

そのほかに時期不明の溝状遺構が A-1、Ｂ区で検出されている。

第２節　基本層序

本遺跡で確認された層序は、概ね以下のとおりであるが、Ｂ区の自然流路北側周辺では第Ⅴ層の下部ににぶい黄褐色砂質土が 0.3 ～ 0.5 m程堆積していた。またＢ区北半部では第Ⅵ層の下部に黒褐色土がみられる（第４図）。

①第Ⅰ層：表土（耕作土）で、層厚は平均0.2m。

②第Ⅱ層：黒色土　やや粘性があり、クロボクに相当し、弥生時代後期遺物包含層

③第Ⅲ層：K-Ah層

④第Ⅳa層：黒褐色土（ＭＢ０上部相当層）

⑤第Ⅳb層：黒褐色土（ＭＢ０下部相当層）④より白色砂粒を多く含む。

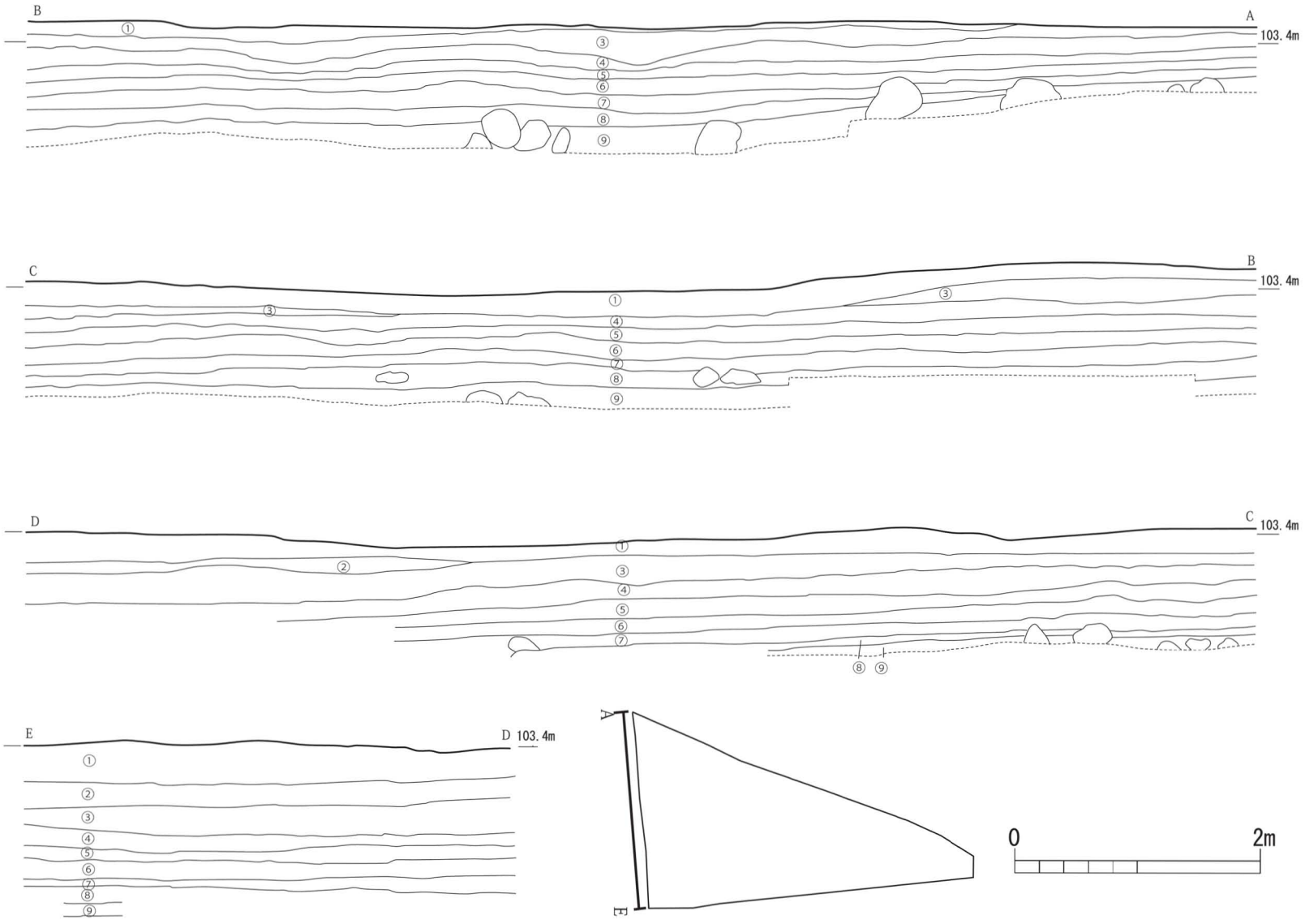
⑥第Ⅴ層：黒褐色土（ＭＬ１上部相当層）白色砂粒を含む。

⑦第Ⅴb層：暗灰黄褐色土（ＭＬ１下部相当層）白色砂粒を含む。

⑧第Ⅵa層：にぶい黄褐色土・褐色砂粒を含む。縄文時代草創期遺物包含層

⑨第Ⅵb層：にぶい黄褐色土・褐色砂粒を含む。⑧よりしまりがない。

第Ⅶ層：砂礫層



第４図　Ｂ区土層断面図　(1/50)

第３節　縄文時代草創期の遺構と遺物

B 区南端部で集石遺構が 1 基検出された。集石遺構の検出層位はⅥ層の中位であった。遺物は集石遺構の周辺で、土器片と石器、剥片がⅤ層下部～Ⅵ層中部で出土した。土器は、隆帯文土器と無文の胴部片が出土した。口縁部を中心に 6 点掲載した。石器は、打製石斧、石核、剥片が出土した。

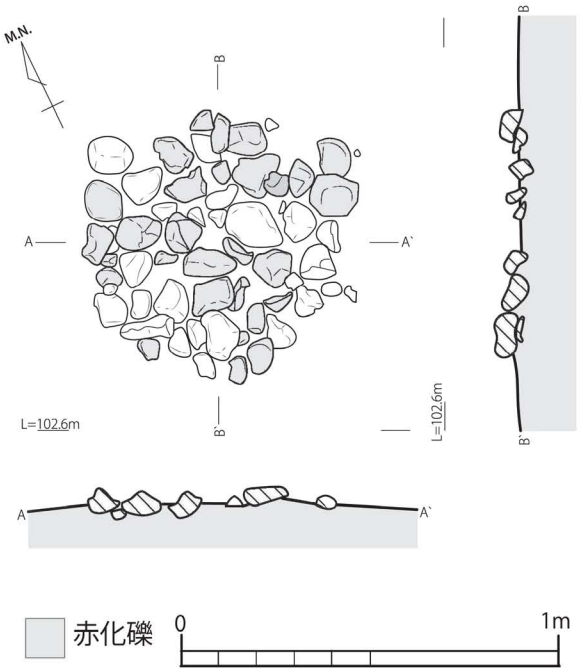
遺構内から土器の出土はなかったが、同層位から出土した土器から縄文時代草創期に属する遺構と考えられる。

〔遺構〕

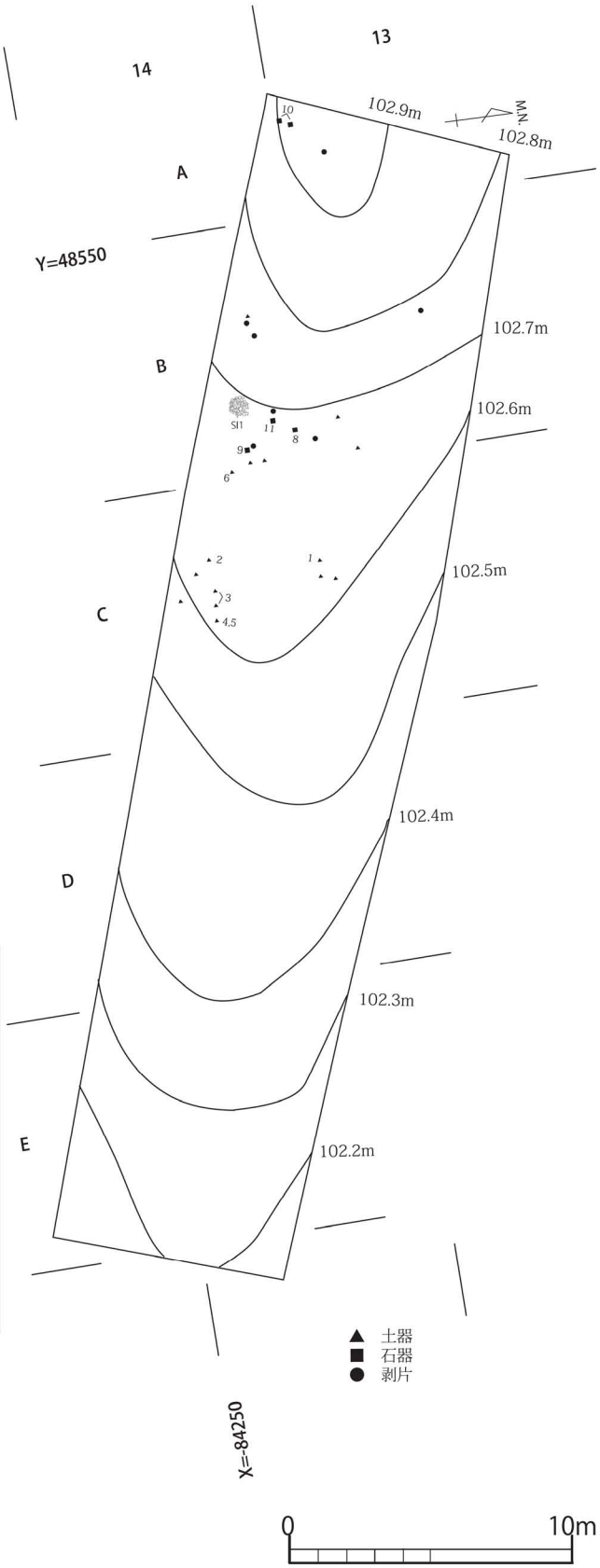
ＳＩ１(第５図)

72 × 67cm の楕円形に礫が分布する。60 個の礫で構成され、掘込みはない。構成礫の約 50％が赤化しており、石材は全て尾鈴山酸性岩類である。遺構内の礫のうち 4 個が接合した。

礫と礫の間や周辺で確認された炭化物を加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、遺構内の炭化物は、11,400 ± 60 年 BP（１σの暦年代で BC11,820 ～ 11,740，11,530 ～ 11,210 年）、周辺の炭化物では 11,310 ± 60 年 BP（同 BC11,500 ～ 11,200 年）の年代値が得られた。



第５図　ＳＩ１実測図　(1/20)



第６図　Ⅵ層遺物分布図　(1/250)

〔遺物〕

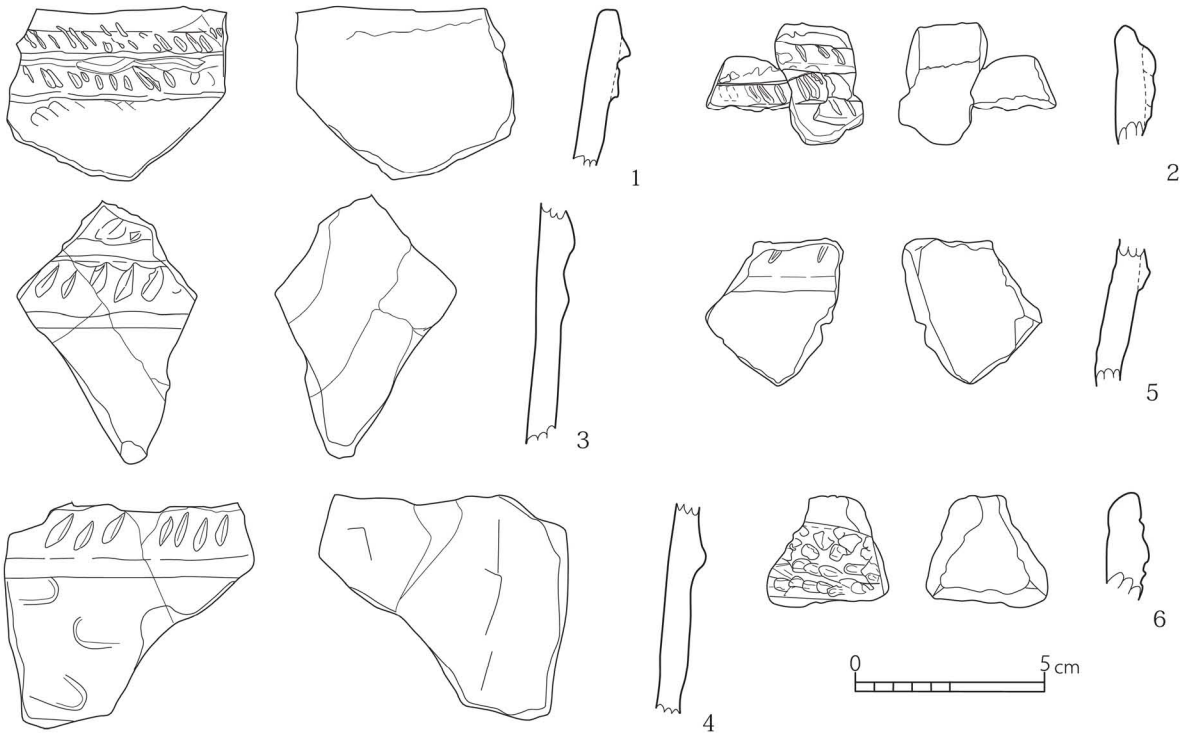
土器（第7図）

出土した隆帯文土器は、胎土、色調、隆帯の貼付け方、隆帯上の文様などから次のように分類できる。

第１類（１,２）やや赤みがかった褐色の胎土である。口唇部は丸く仕上げられ、隆帯文が口縁部から５mm程下に施文される。隆帯は指でつまみあげるように貼り付け、断面形は三角形である。隆帯上の文様は、爪形文が施されている。

第２類（３～５）にぶい黄橙色の胎土である。いずれも胴部片で、口唇部の形状は不明である。隆帯は、撫でつけるように貼り付け、隆帯上に爪形文を施す。胎土、調整、色調、隆帯文の形状などから同一個体と思われる。

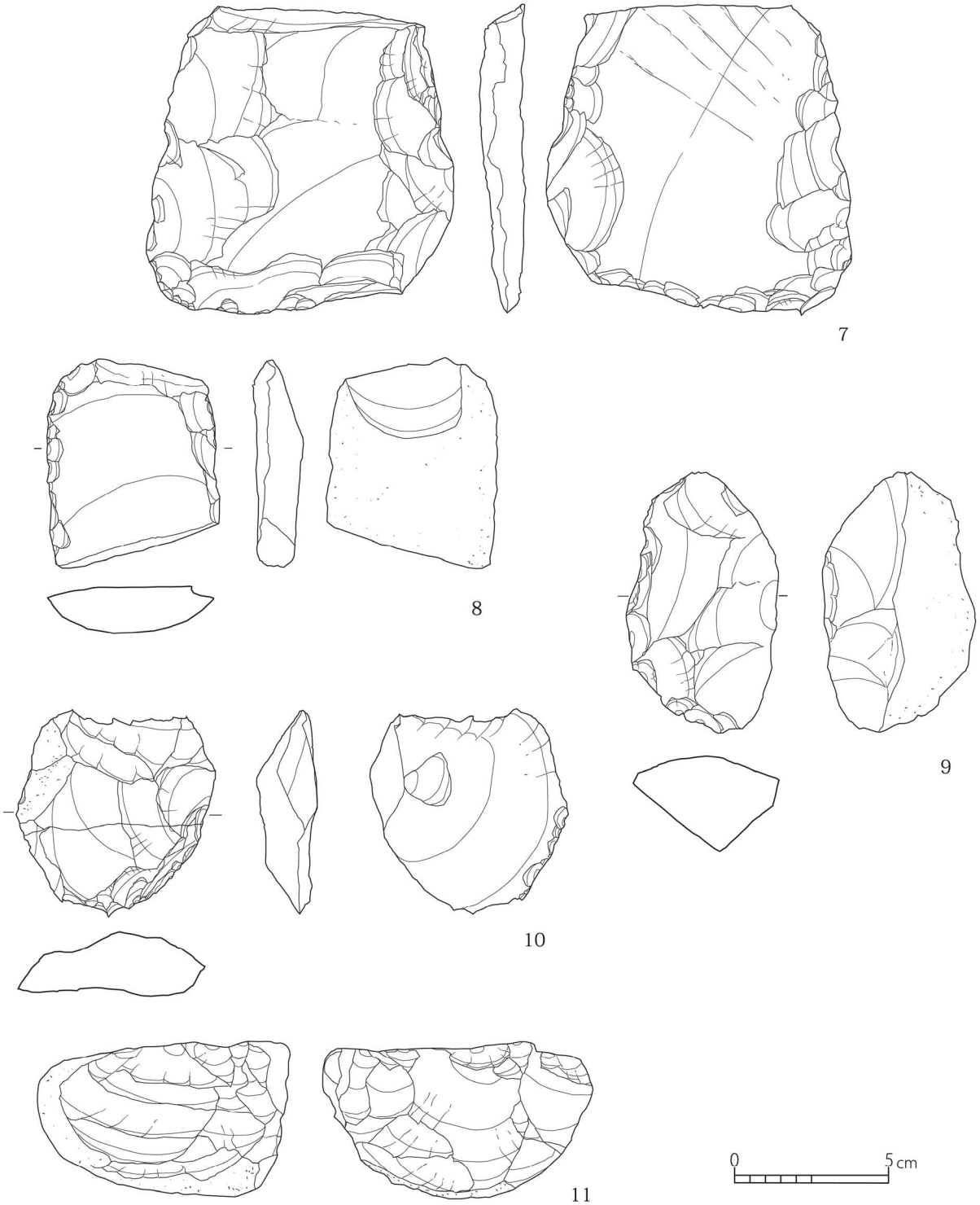
第３類（６）胎土、色調は第１類に似る。口唇部は丸く仕上げられ、隆帯文が口縁部から５mm程下に施文される。隆帯の上を貝殻腹縁で刺突している。



第７図　VI層出土土器実測図　(1/2)

第１表　VI層出土土器観察表

遺物番号	出土区	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1	C14	深鉢	口縁部				2条の隆帯文、ナデ	ナデ	にぶい赤褐色(5YR4/4)	灰黄褐色(10YR4/2)	4mm以下のにぶい黄橙色粒、2mm程の浅黄橙色粒を含む。	良好	
2	C14	深鉢	口縁部				2条の隆帯文、ナデ	ナデ	赤褐色(5YR4/6)	黒褐色(7.5YR3/2)	2～4mmの褐色粒、1mm以下の灰白、褐色粒を含む。	良好	
3	C14	深鉢	胴部				爪形文、ナデ	ナデ	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	1mm以下の灰白色粒を含む。	良好	
4	C14	深鉢	胴部				爪形文、ナデ、指押さえ	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	4mm以下の白色粒、3mm以下の灰色粒、2mm以下の赤灰色粒を含む。	良好	
5	C14	深鉢	胴部				爪形文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1～2mmの褐色、灰白、灰色、乳白色粒を含む。	良好	
6	C14	深鉢	口縁部				隆帯文	ナデ	にぶい褐色(7.5Y5/4)	灰黄褐色(10YR5/2)	1mm以下の灰白、乳白色粒を含む。	良好	



第８図　Ⅵ層出土石器実測図　(1/2)

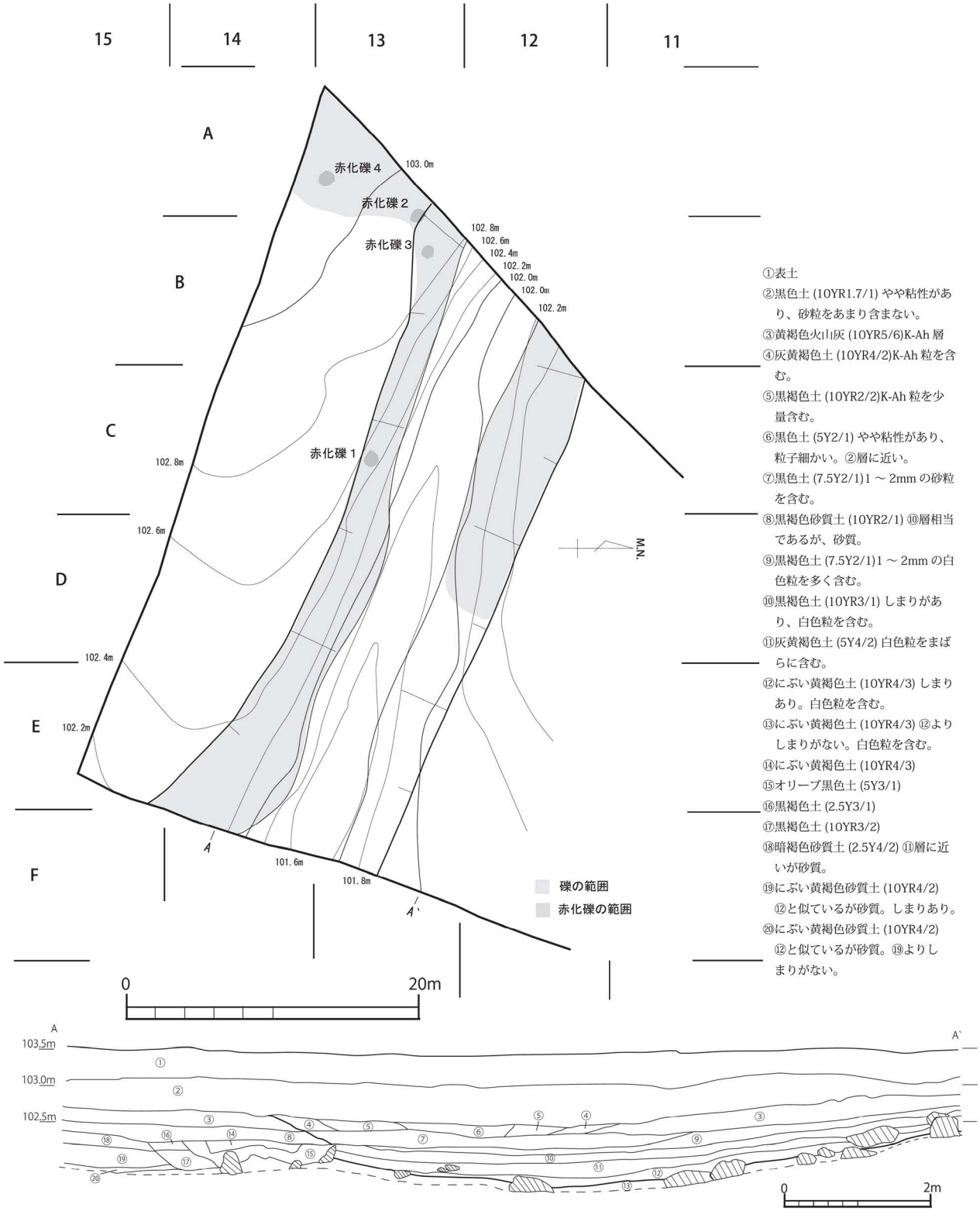
石器（第８図）

出土した石器はいずれもホルンフェルス製のものである。７は、確認調査の 21 Ｔで出土した。打製石斧で基部が欠損している。８～ 11 はＡ 13、Ｃ 14 グリッドで出土した。８は打製石斧で刃部が欠損している。10 は削器で片側縁には背面から、もう片側縁からは腹面から加工を施し、刃部を作出している。９・11 は石核である。

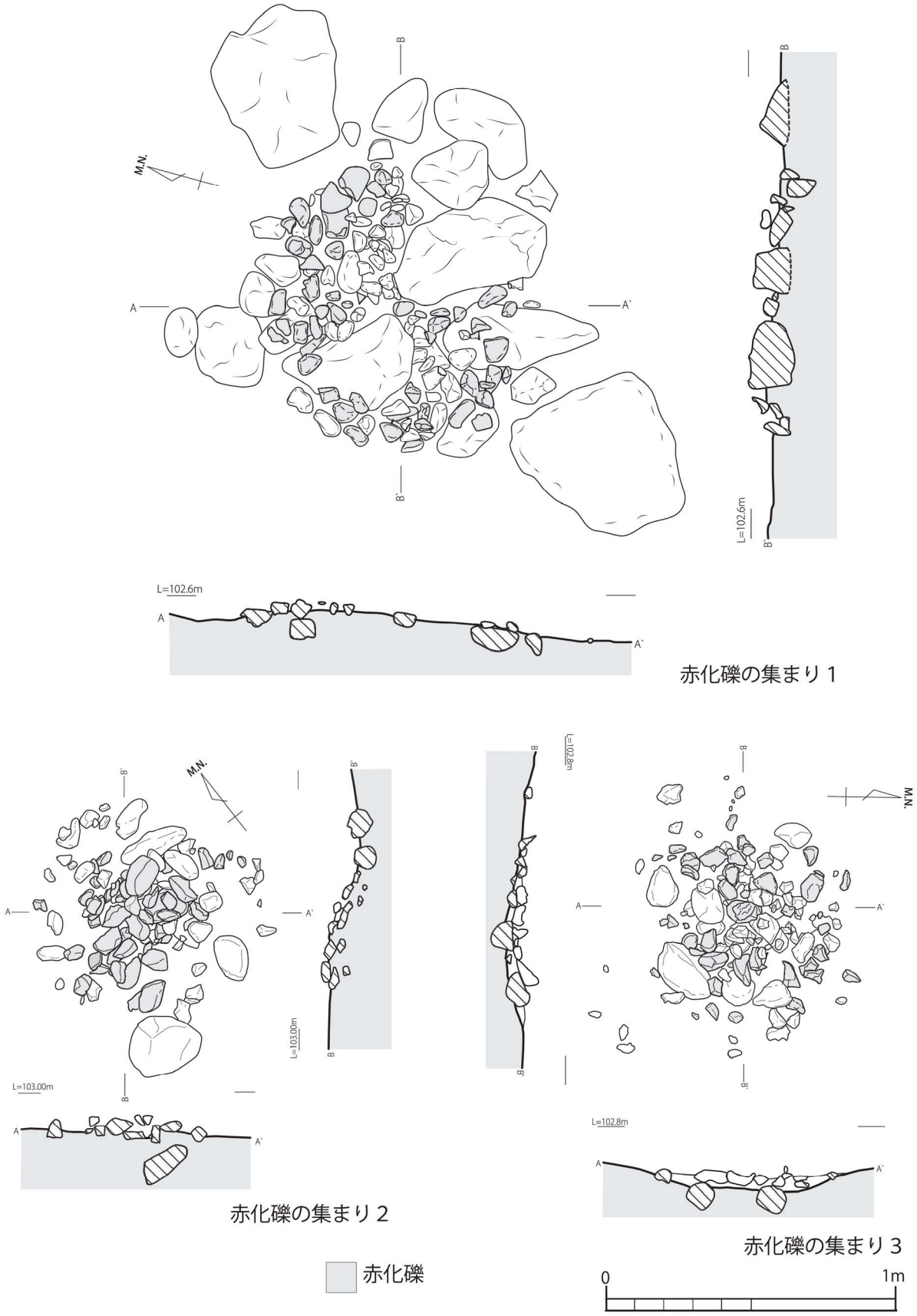
第４節　縄文時代早期の遺物

K-Ah 下層のＶ層では、B12 ～ F12 グリッドで東西方向の自然流路が１条検出された。幅 13 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mを測る。自然流路は、北側には 10 ～ 30cm の礫が密に堆積し、その間に 0.8 ～ 1 m の巨礫が点在する状態であった。南側では、５cm 程の礫が点在する状況であった。

自然流路の肩付近に赤化した礫が集まった部分が５箇所確認された。そのうち３箇所について図化した（第９図）。



第９図　自然流路実測図　(1/400)・土層断面図 (1/80)



第 10 図　赤化礫の集まり実測図　(1/20)

赤化礫の集まり１（第10図）

1m ほどの大きさの巨礫と巨礫との間に拳大の赤化した礫が集まる。87 個の礫で構成されており、礫の集まりを半截したところ巨礫と巨礫との間にできたくぼみに礫が入り込んだ状況であった。巨礫はいずれも赤化していなく、埋土中から炭化物は確認されていない。赤化礫の石材は全て尾鈴山酸性岩類であった。

赤化礫の集まり２（第10図）

0.5 ～ 0.6 mの範囲に 10 ～ 20cm の赤化した円礫、破砕礫が密集している状態であった。集中箇所の周囲には 20 ～ 30cm の円礫が堆積していた。石材は尾鈴山酸性岩類で、赤化礫の総数は 81 個である。

赤化礫の集まり３（第10図）

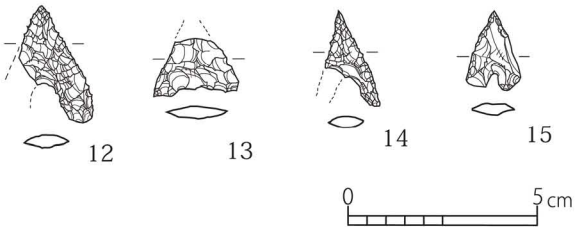
0.5 ～ 0.8 mの範囲に 10 ～ 20cm の赤化した円礫、破砕礫、10 ～ 30cm の赤化していない円礫が入り交じり密集していた。石材はいずれも尾鈴山酸性岩類で、赤化礫は 45 個あった。浅い皿状の窪地に礫が堆積したと思われる。

石器（第11図）

Ｖ層では、腰岳産黒曜石製・チャート製・サヌカイト製の打製石鏃が４点出土している。

いずれも包含層中の出土で、自然流路をはさんだ両岸で出土している。

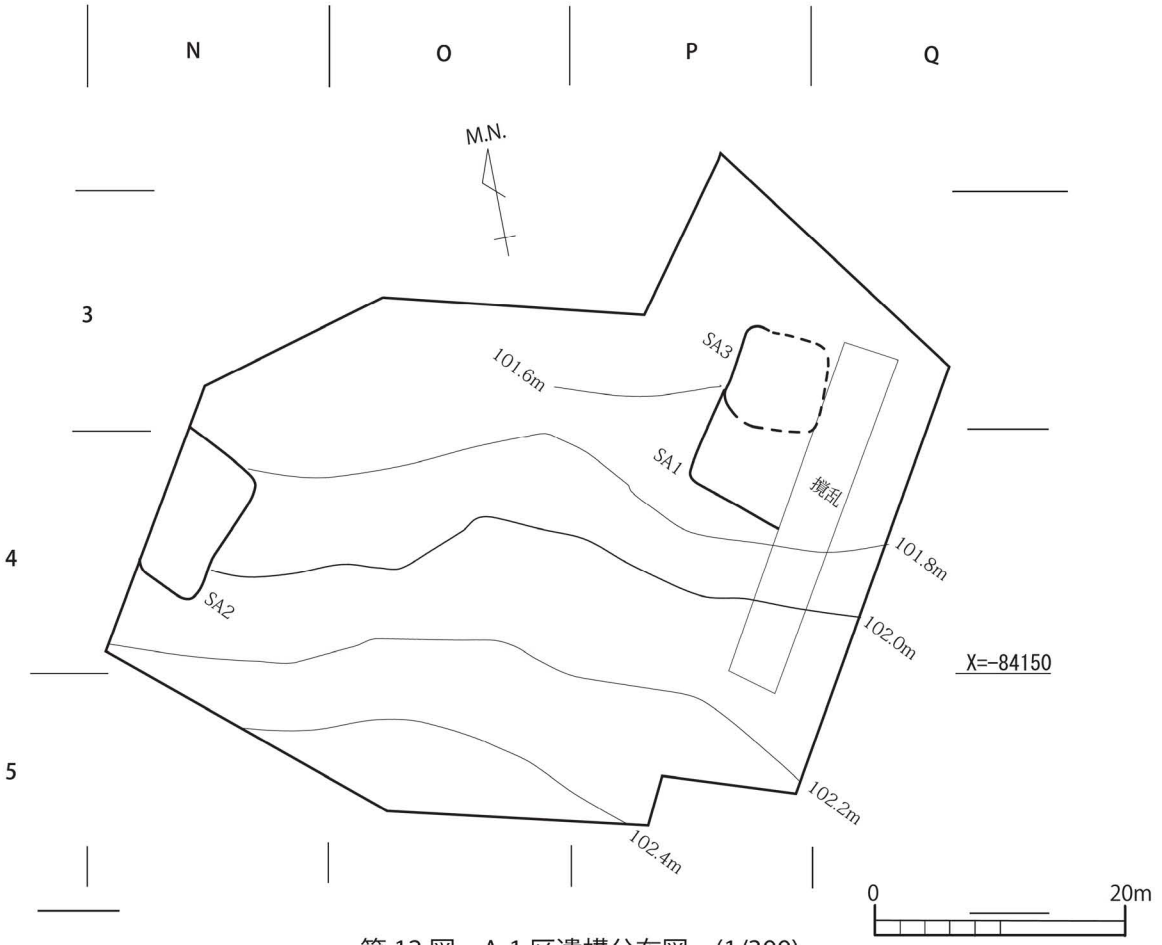
12 は抉りが深く平面形は二等辺三角形をしており、脚部が欠損している。側面には丁寧な鋸歯状の調整が施されている。13 は平面形が略正三角形を呈し、基部はわずかにへこむ。14 は平面形二等辺三角形を呈し、抉りが深い。脚部が欠損している。15 はサヌカイト製の石鏃で比較的抉りは浅い。



第 11 図　Ｖ層出土石器実測図 (1/2)

第２表　Ｖ・Ⅵ層出土石器計測表

遺物番号	出土位置	出土層位	器種	石材	最大長（ｃｍ）	最大幅（ｃｍ）	最大厚（ｃｍ）	重量（ｇ）	備考
7	21 T	Ⅵ	打製石斧	ホルンフェルス	10.0	10.0	1.9	208.6	
8	B 14	Ⅵ	打製石斧	ホルンフェルス	6.8	5.6	1.5	77.2	
9	B 14	Ⅵ	石核	ホルンフェルス	8.5	4.9	3.1	108.7	
10	A 13	Ⅵ	削器	ホルンフェルス	6.7	6.5	2.1	73.6	
11	B 14	Ⅵ	石核	ホルンフェルス	5.1	8.8	8.1	188.7	
12	C 11	Ⅴ	打製石鏃	腰岳産黒曜石	3.2	1.5	0.4	1.3	
13	D 14	Ⅴ	打製石鏃	チャート	1.5	2.3	0.4	1.1	
14	D 14	Ⅴ	打製石鏃	チャート	2.7	1.1	0.3	0.6	
15	C 12	Ⅴ	打製石鏃	サヌカイト	2.1	1.5	0.4	0.8	



第 12 図　A-1 区遺構分布図　(1/300)

第５節　弥生時代の遺構と遺物

A-1 区で３軒の竪穴住居跡（第 12 図）、A-2 区で６軒の竪穴住居跡と土坑１基（第 17 図）をⅢ層上面で検出した。A-1 区は耕作等による撹乱が著しく、削平されている部分が多く、住居の検出状況は非常に悪い。一方 A-2 区では部分的に耕作等の撹乱があったのみで良好な土層堆積であった。

（１）竪穴住居跡（SA）

ＳＡ１（第13図、第14図）

【位置】 A-1区Ｐ３・４グリッドに位置する。ＳＡ３に切られる。

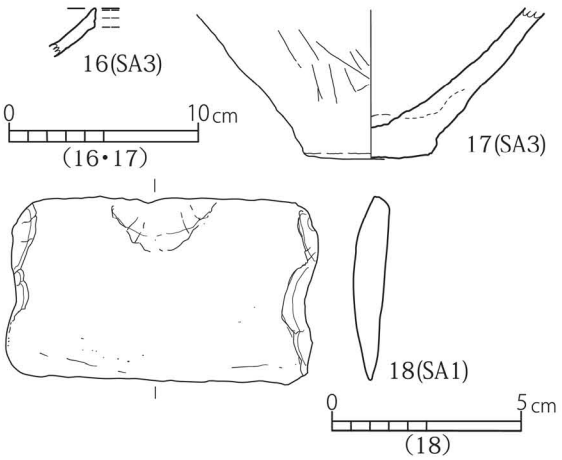
【規模】 西側を撹乱により削平されており、残存部分は3.5mを測る。

【柱穴】 Ｐ１はＳＡ１に伴うピットであり、主柱穴と考えられる。柱掘り方は0.3m、深さ0.5mを測る。

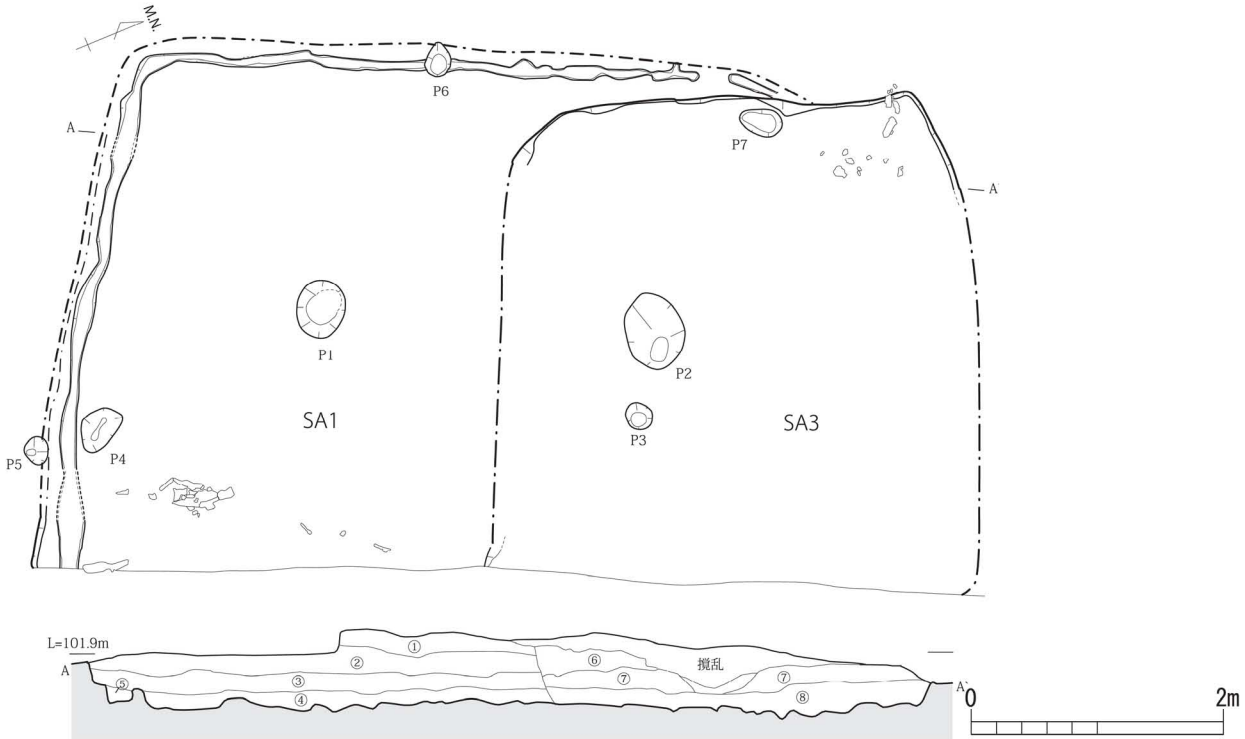
【床面】 床面は貼床が施される。貼床はK-Ahを含む黒色土で、しまっている。床面で炭化物が検出された。

【壁帯溝】 床面の壁沿いには壁帯溝がめぐっている。幅0.15m、深さ0.1mを測る。壁帯溝底面では杭列等は検出されなかった。

【出土遺物】 床面、覆土中から土器片が出土しているが、小片で図化していない。覆土中からホルンフェルス製の抉り入り石庖丁が1点出土している。



第 13 図　SA1・SA ３出土遺物実測図（1/2、1/4）



①黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性がある。②黒色土 (10YR2/1) ①層と似ているが、わずかに黒みが増す。③黒色土 (10YR2/1) ①②層と土質は似ている。1～5mm の K-Ah 粒を含み、炭化物、土器片が混じる。④黒色土 (10YR1.7/1)K-Ah ブロックと暗褐色土ブロックを２割程度含む。ＳＡ１貼床⑤黒色土 (10YR2/1) 壁帯溝埋土⑥黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく粘性がある。①に比べしまりがある。⑦黒色土 (10YR1.7/1) 暗褐色ブロックをわずかに含む。⑧黒色土 (10YR1.7/1) ④に比べ K-Ah ブロックと暗褐色土ブロックを多く含む。ＳＡ３貼床

第 14 図　ＳＡ１・ＳＡ３実測図　(1/60)

ＳＡ2（第15図、第16図）

【位置】 A-1区Ｎ４グリッドに位置する。

【規模】 北側は上部が削平されており、推定ラインである。また、東側も道路がかかり全体を調査できなかったため、規模については不明である。

【覆土の状況】 上部は黒色土が堆積し、床面直上に炭化物を多く含む黒色土がみられた。住居中央部に焼土層が確認された。

【柱穴】 2つのピットが検出され、柱掘り方は0.2～0.3m、深さ0.4mを測る。

【床面】 貼床が施され、貼床は1～2mmの砂粒を含む部分と含まない部分がある。中央に土坑を1基検出した。

【住居内土坑】 住居中央部に検出され、平面形は0.8×0.7mの楕円形で、深さ0.4mである。粘性のない黒褐色土が堆積し、土器片が出土している。

【出土遺物】 床面、覆土中から多くの土器片が出土している。住居の全体で出土しているが、床面では、中央部にやや密にみられる。

ＳＡ3（第13図、第14図）

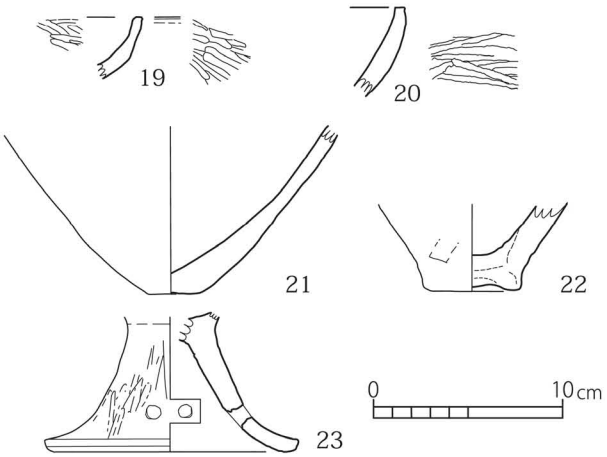
【位置】 A-1区Ｐ３グリッドに位置する。ＳＡ１を切っている。

【規模】 撹乱により削平されるが、一辺４mと推測される。

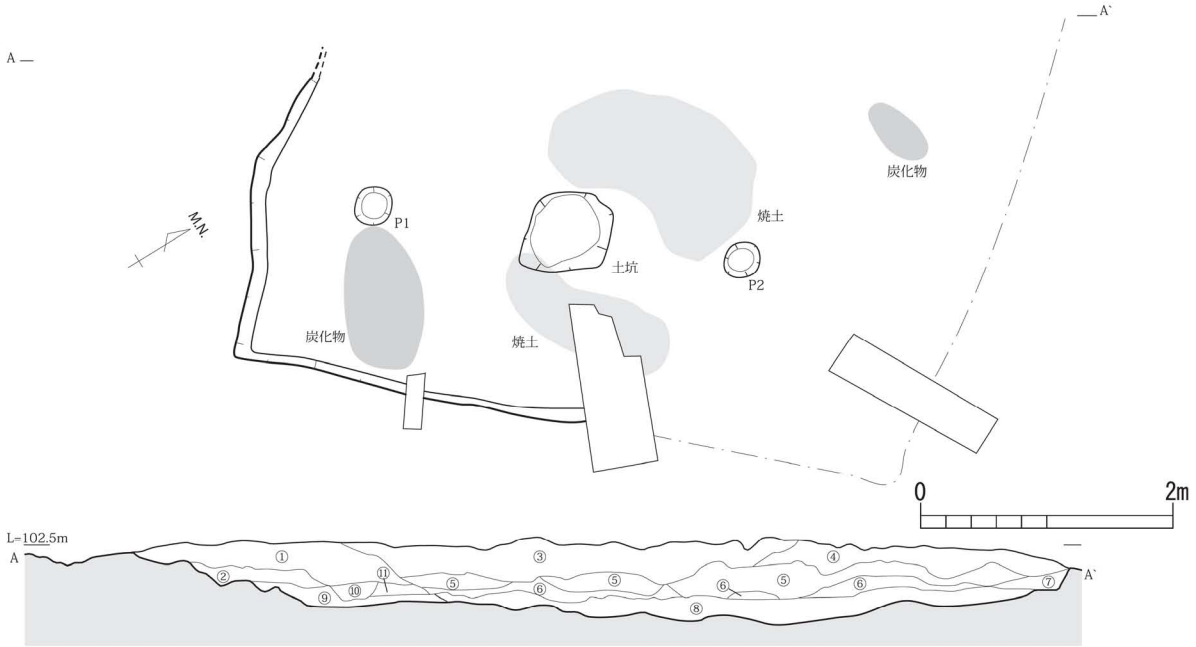
【柱穴】 Ｐ３は床面で検出され、ＳＡ３に伴い、主柱穴と考えられる。Ｐ２は、貼床除去後に検出され、ＳＡ１に伴う可能性が高いが不明である。

【床面】 床面は貼床が施され、硬くしまる。床面から炭化材が検出されている。

【出土遺物】 床面、覆土中から土器片が出土している。図化した２点は覆土中からの出土である。

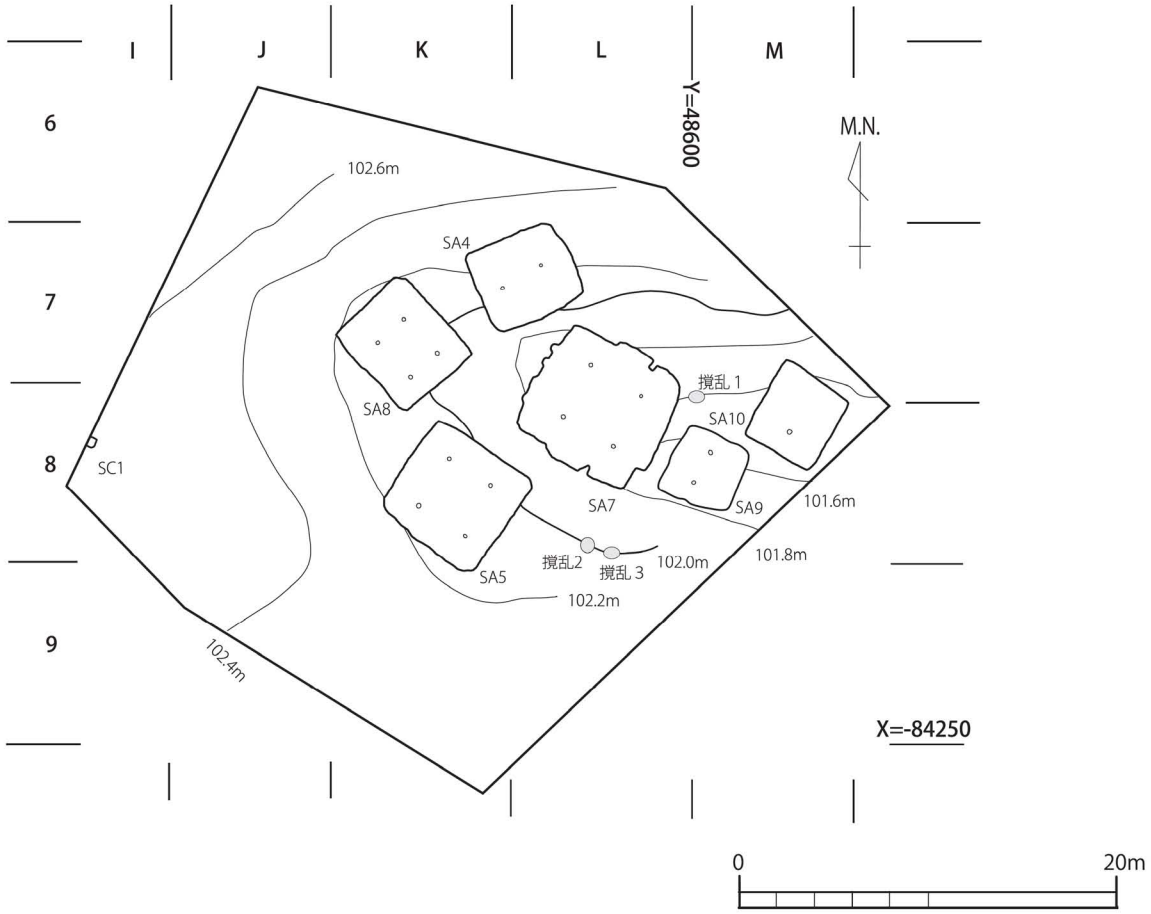


第 15 図　ＳＡ２出土遺物実測図　(1/4)

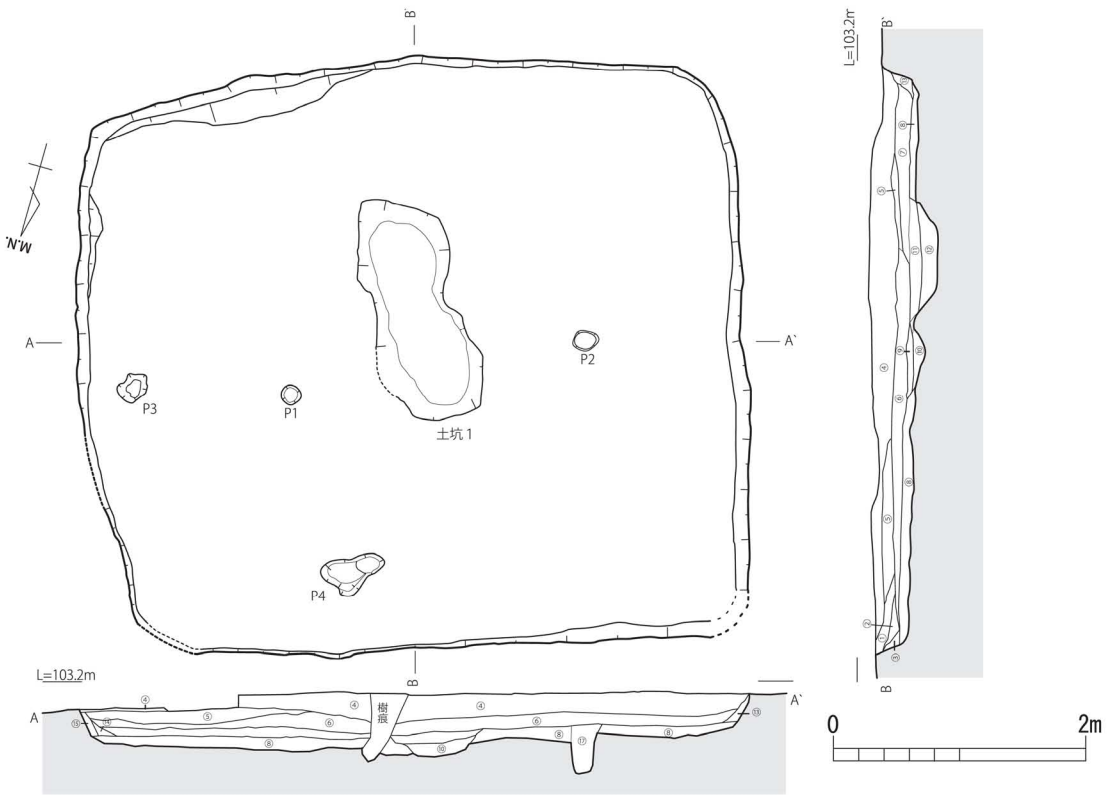


①黒色土 (7.5YR2/1)3 ～ 5mm の礫と褐色土ブロックを含む。②黒色土 (7.5YR1.7/1)2 ～ 3mm の白色粒と K-Ah 粒を含み、炭化物をわずかに含む。③黒色土 (7.5YR2/1) ややしまりがあり、わずかに粘性がある。④黒色土 (7.5YR2/1) ややしまりがある。⑤黒色土 (7.5YR2/1)1 ～ 2mm の褐色粒を粗に含み、炭化物をわずかに含む。⑥黒色土 (10YR1.7/1) 炭化物をブロック状に含む。やや柔らかい。⑦黒色土 (7.5YR1.7/1)2 ～ 3mm の K-Ah 粒をわずかに含む。⑧黒褐色土 (10YR3/1)1 ～ 5mm の礫を含む。貼床⑨黒褐色土 (10YR3/1) 礫を含まない。貼床⑩明褐色土 (7.5YR5/8) 黒色土が混じる。炭化物を含み、柔らかい。⑪黒色土 (10YR2/1) 橙色粒（焼土）と炭化物を多く含む。

第 16 図　ＳＡ２実測図　(1/60)

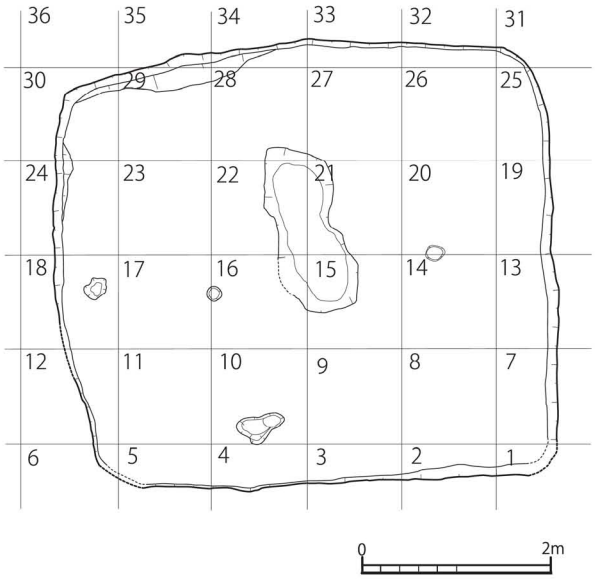


第 17 図　A-2 区遺構分布図　(1/400)



①黒色土 (2.5YR2/1)K-Ah 粒をわずかに含む。やや粘性がある。②黒色土 (2.5YR2/1)K-Ah 粒を少し含む。①よりややしまりがある。③黒色土 (5Y2/1) K-Ah 粒をわずかに含む。ややしまりがない。④黒褐色土 (2.5Y3/1) やや粘性がある。⑤オリーブ黒色 (5Y2/2) やや粘性がある。K-Ah のブロックをわずかに含む。⑥黒色土 (10YR2/1) K-Ah 粒を全体的にまばらに含む。炭化物をわずかに含む。⑦黒色土 (7.5Y2/1))K-Ah ブロックをわずかに含む。ややしまりがある。⑨黒褐色土 (2.5Y3/1) と K-Ah 粒の混合土 (4:6) 硬くしまっている。(床面) ⑨暗褐色土 (7.5Y3/4) K-Ah 粒をわずかに含む。⑩にぶい褐色 (7.5YR5/4)K-Ah 粒が焼土層となる⑬黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり。しまりがない。⑭暗灰黄色土 (2.5Y4/2)) K-Ah 粒を多く含む。⑮暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) K-Ah 粒をわずかに含む。⑯黒褐色土 (2.5Y3/1) ややしまりあり。K-Ah 粒を含む。炭化物をわずかに含む。⑱黒色土 (10YR2/1) しまりがなく、もろい。粘性がある。(柱穴)

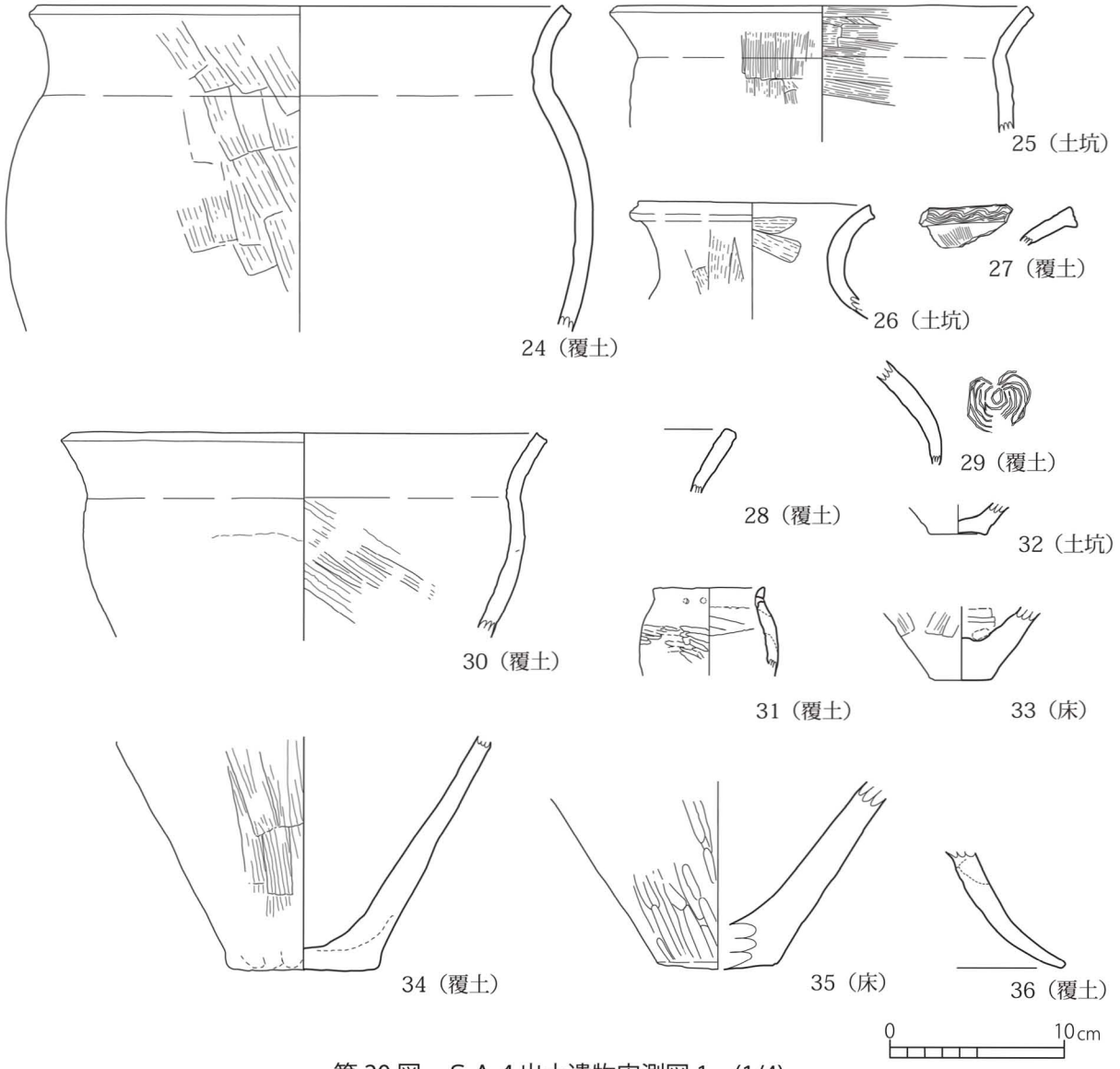
第 18 図　ＳＡ４実測図　(1/60)



第 19 図　ＳＡ４フローテーション区割図

第 3 表　ＳＡ４出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
7		不明種実		1	
10		不明種実		1	炭化物片 3
11		不明種実		1	炭化物片 6
14	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	炭化物片 5
15	Oryza sativa L.	イネ	果実	1	炭化物片 19
	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	
22	Oryza sativa L.	イネ	果実片	1	
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	3	
		不明種実		1	
33	Oryza sativa L.	イネ	果実片	1	炭化物片 3
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2	
	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	4	



第 20 図　ＳＡ４出土遺物実測図１　(1/4)

ＳＡ４（第18図～第21図）

【位置】 A-2区K8グリッドに位置する。

【規模】平面形は長方形の隅丸方形プランで、平面規模は4.7×5.3mを測る。壁の残存高は、約0.2mで断面逆台形を呈する。床面積は21.5㎡である。

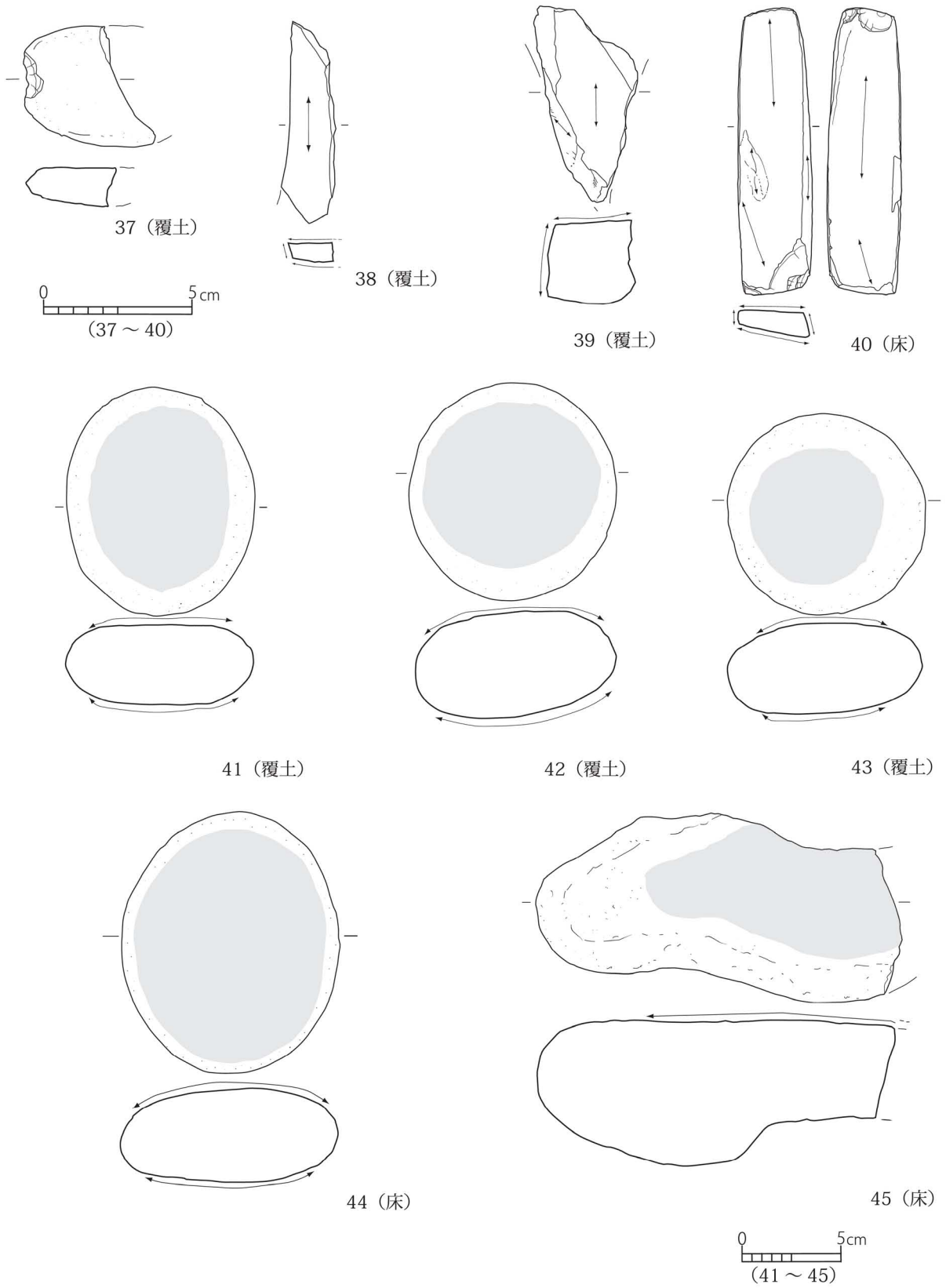
【柱穴】主柱穴は２本である。柱掘り方は0.2～0.3mの円形で、深さは床面から0.4mを測る。

【床面】床面は、全般的に硬化し、南東方向にわずかに低くなる。住居中央に焼土を含む土坑が検出された。

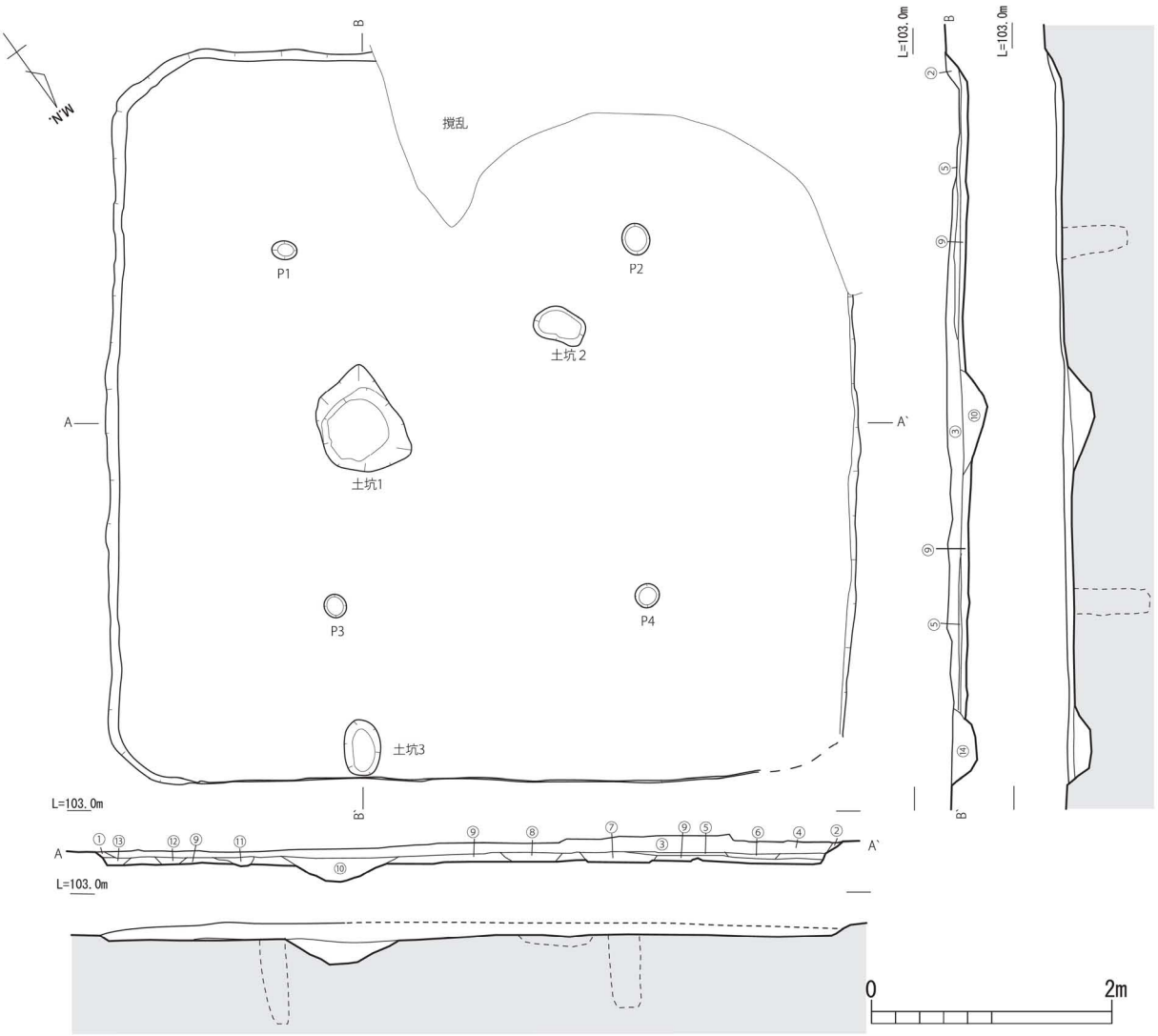
【住居内土坑】住居中央部に検出され、平面形は中央が狭まる瓢箪のような形状で2.0×0.3mを測る。南側部分からは焼けて赤化した礫が底面近くで検出され、北側の部分では底面付近に焼土層がみられ、壁面も被熱による赤変を受けていた。

【出土遺物】床面出土の遺物は少なく、掲載した分以外に数点の土器片があるのみである。砥石（38～40）と磨石（41～44）は住居の南端でまとまって出土した。埋土中からは、土器片や石器が多く出土し、そのうち14点を掲載した。27はおそらく壺の胴部片で外面に円を幾重に重ねたような線刻文が確認できる。

【フローテーション】１mメッシュを設定し（第19図）、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第3表のとおりである。



第 21 図　ＳＡ４出土遺物実測図２　(1/2,1/3)



①黒色土（10YR2/1）やや粘性あり②黒色土 (10YR2/1)K-Ah 粒を少し含む。③黒色土 (2.5Y2/1) 粘性あり④黒色土 (2.5Y2/1) やや粘性あり。K-Ah 粒をわずかに含む。⑤オリーブ黒色土 (5Y2/2) 粘性あり。しまりがない。K-Ah 粒をわずかに含む。⑥黒色土 (5Y2/1) 粘性あり。暗褐色土を少し含む。⑦黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり。わずかに K-Ah 粒、暗褐色土を含む。⑧黒色土 (10YR2/1)K-Ah ブロックを少し含む。しまり強。貼床。⑨黒色土 (10YR2/1)K-Ah ブロックを多く含む。しまり強。貼床。⑩黒色土 (7.5Y2/1) 粘性あり。下部に暗褐色ブロックを含む。⑪オリーブ黒黒色土 (7.5Y2/2) わずかに K-Ah 粒を含む。⑫黒色土 (2.5Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。⑬黒色土 (10YR2/1) やや粘性あり。⑭黒色土 (5Y2/1) しまりがなく、粘性があり。

第 22 図　ＳＡ５実測図　(1/60)

ＳＡ５(第22図～第25図)

【位置】 A-2区K9グリッドに位置する。

【規模】 ６×６ｍの隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1ｍである。南西隅を削平されている。

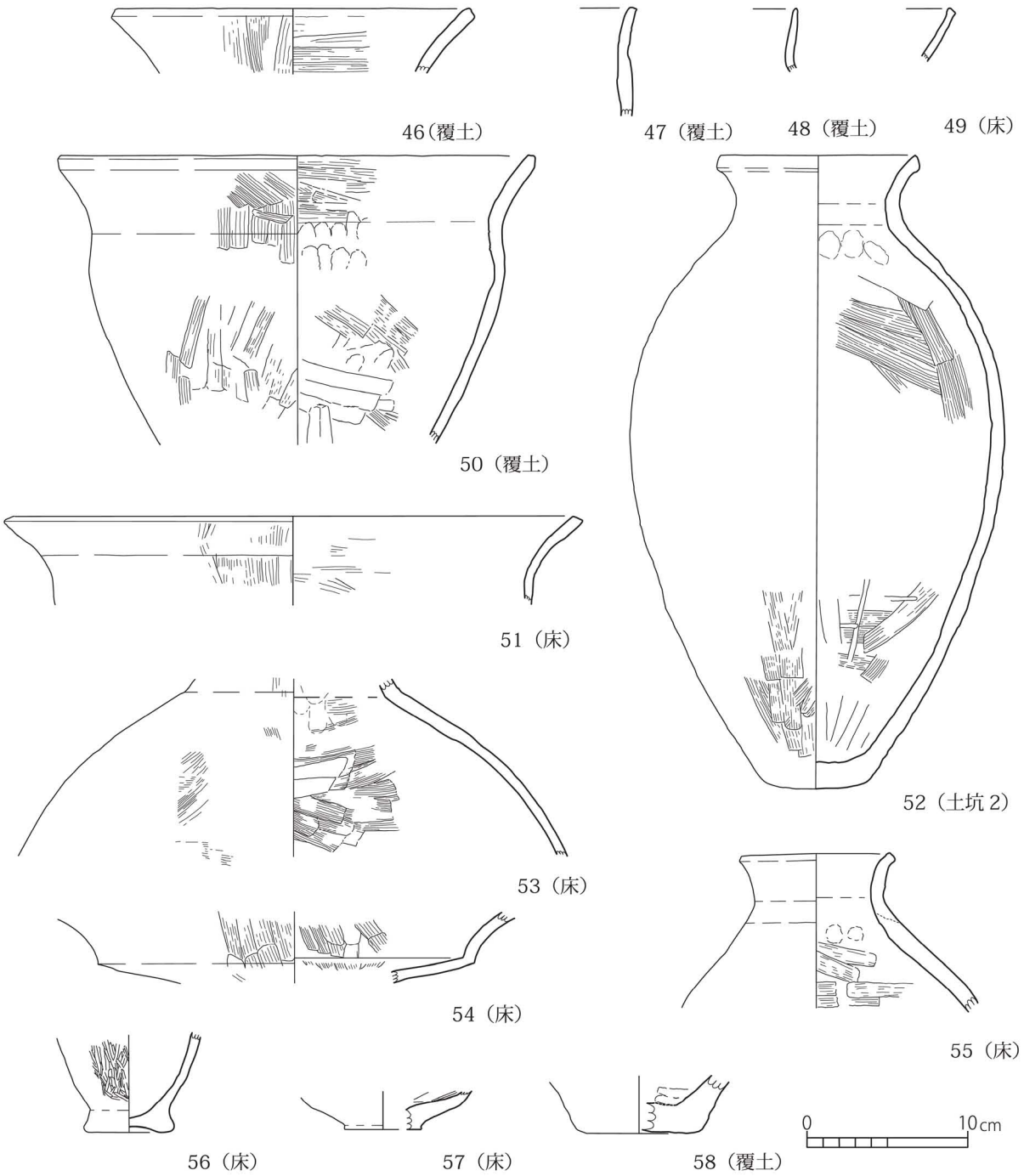
【柱穴】 主柱穴は４本である。柱掘り方は0.15～0.25ｍの円形で、深さは最深のもので床面から0.6ｍを測る。柱痕跡は認められない。

【床面】 床面は貼床に施され、全体的に硬化している。貼床はK-Ah粒を含む黒色土で堅くしまる。床面では土坑が３基検出された。

【住居内土坑】 住居中央に２基、南端に１基検出された。土坑１は、黒色土の埋土である。埋土中から磨製石鏃（59）が出土した。土坑２からは壺（52）が横に倒れた状態で出土した。埋土は黒褐色土でしまりのない土であった。

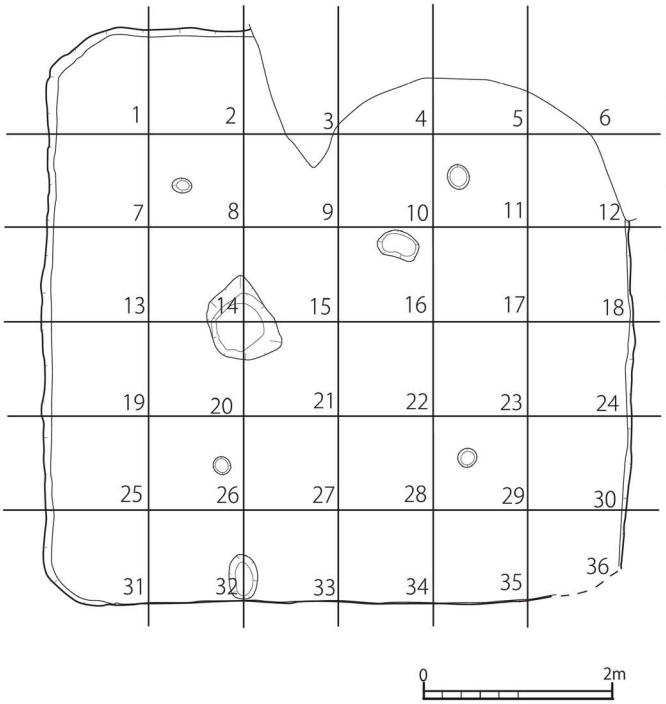
【出土遺物】 床面出土の遺物のうち15点を図化した。覆土中からは多くの土器片が出土した。図化できた5点を掲載した。

【フローテーション】 １ｍメッシュを設定し（第25図）、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第4表のとおりである。



第 23 図　ＳＡ５出土遺物実測図１　(1/4)

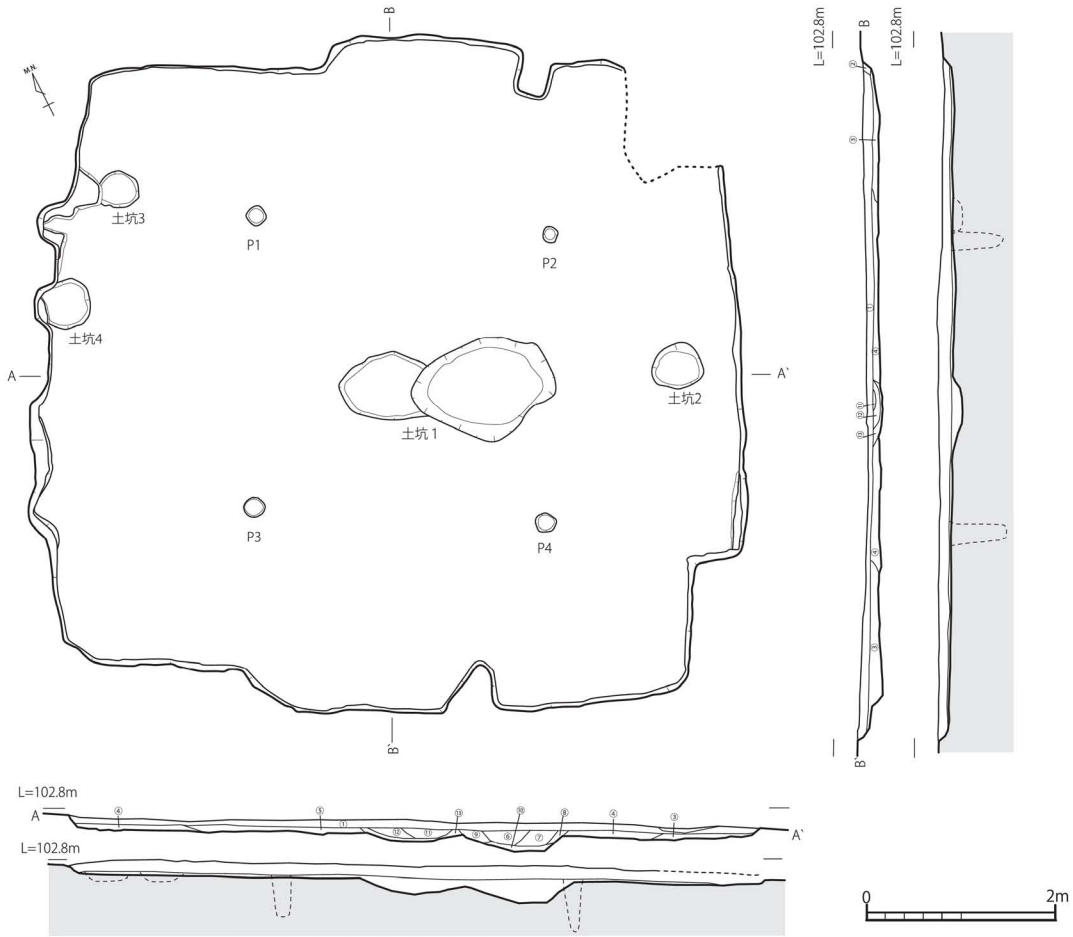
第 24 図　ＳＡ５出土遺物実測図２(1/2,1/3)



第 25 図　ＳＡ５フローテーション区割図

第４表　ＳＡ５出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
15	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	炭化物片 1
21	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	



①黒色土 (10YR2/1) やや粘性がある。K-Ah をわずかに含む。②黒褐色土 (2.5Y3/1) ③黒色土 (2.5Y2/1) と K-Ah の混合土。ややしまっている。（床面）④黒色土 (2.5YR2/1) と暗褐色土の混合土。(7:3) しまりが強い。(床面) ⑤黒色土 (10YR2/1) しまりが強い。暗褐色のブロックをわずかに含む。(床面) ⑥黒色土 (2.5Y2/1) やや粘性がある。⑦黒色土 (10YR1.7/1) 粘性がある。⑧黒色土 (5Y2/1) しまりがない。⑨黒色土 (10YR2/1) しまりがない。⑩黒褐色土 (7.5YR2/2) 焼土を含む。⑪明褐色土 (7.5YR5/6) K-Ah が焼土化している。⑫暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 黒色土と焼土化した K-Ah が混ざっている。⑬黒色土 (2.5Y2/1) サラサラしている。

第 26 図　ＳＡ７実測図　(1/80)

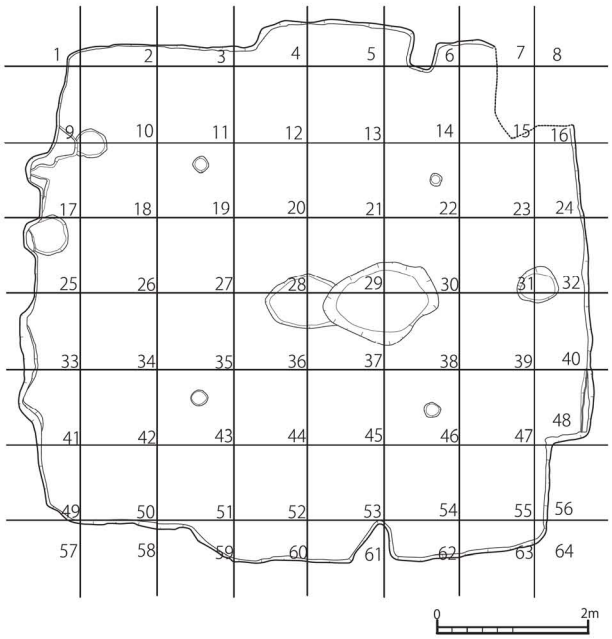
ＳＡ７（第26図～第32図）

【位置】A-2区L8・９グリッドに位置する。

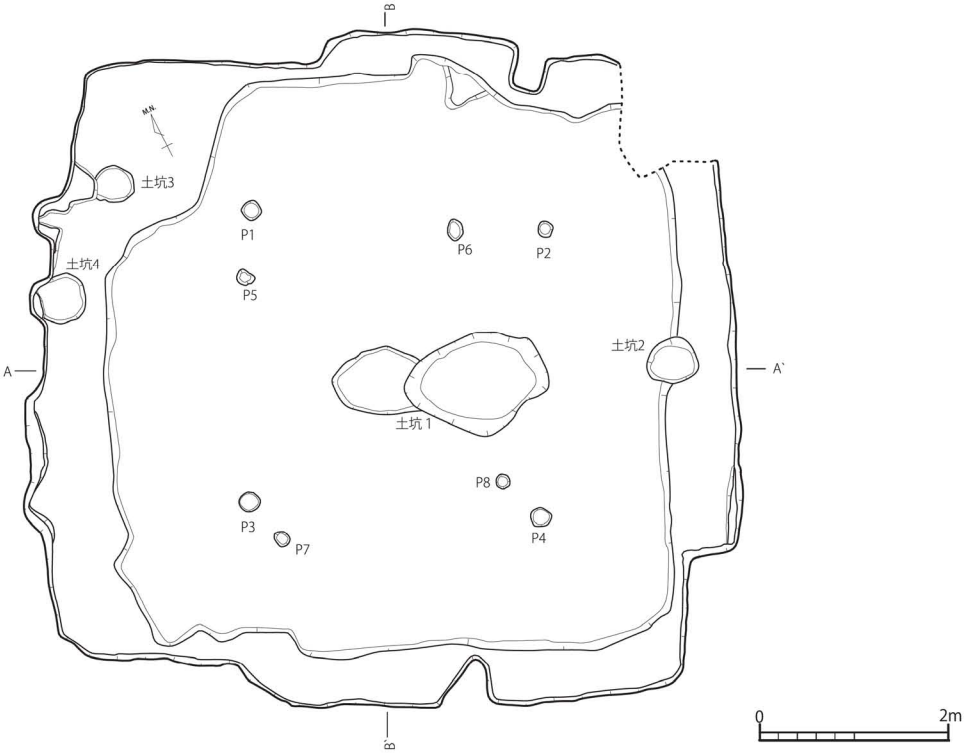
【規模】７×6.5ｍの不定形の住居である。北、南、東部分に0.2～0.3ｍの張り出しがあり、北、南部分の張り出しでは、ほぼ中央に0.3ｍほどの突出壁をもつ。北東部分は撹乱により削平されている。

【柱穴】主柱穴は４本である。柱掘り方は0.15～0.25ｍの円形で、深さは最深のもので床面から0.6ｍを測る。

【床面】床面は貼床が施されており、全体的に硬化している。張り出し部分の壁際ではやや高くなっていた。土坑は中央部に１基（土坑１）、その東側に1基（土坑2）、西側の壁際に2基（土坑３・４）検出された。



第 27 図　ＳＡ７フローテーション区割図



第28図　ＳＡ７貼床除去後実測図　(1/80)

【住居内土坑】土坑1は、西側は上部に焼土層がみられ、底面には黒色土が堆積する。東側はやや粘性のある黒色土が堆積し、下部に焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。

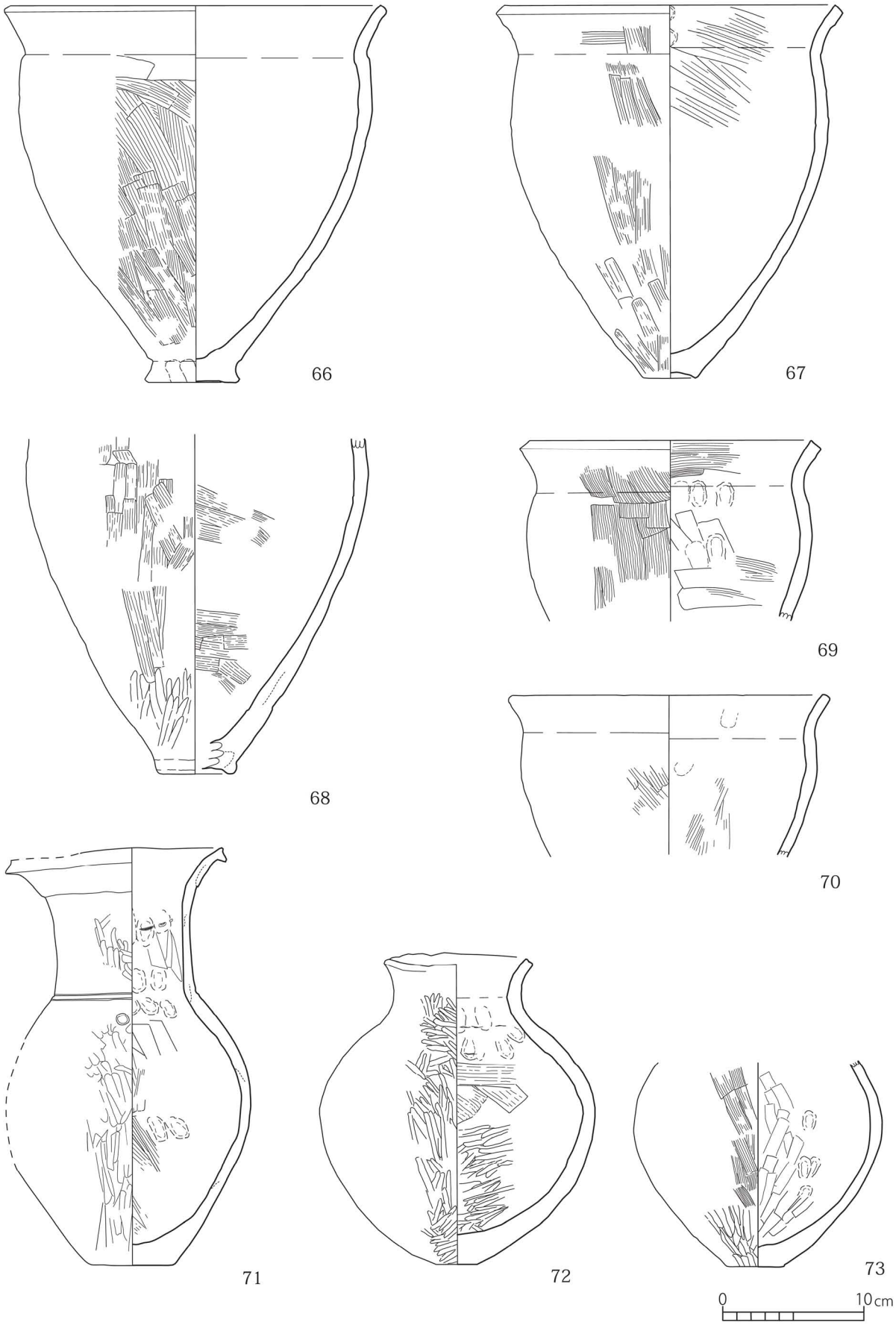
【出土遺物】床面からは甕、壺、高坏等多くの遺物が出土した。遺物は床全面で出土したが、北西～西側にかけてやや集中がみられた。71と83は南西端で出土し、83は器台で2/3程残存しており、立った状態で出土した。71は広口壺で口縁部から頸部が横に倒れた状態で83のすぐ横で出土した。

【フローテーション】１ｍメッシュを設定し（第27図）、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第5表のとおりである。

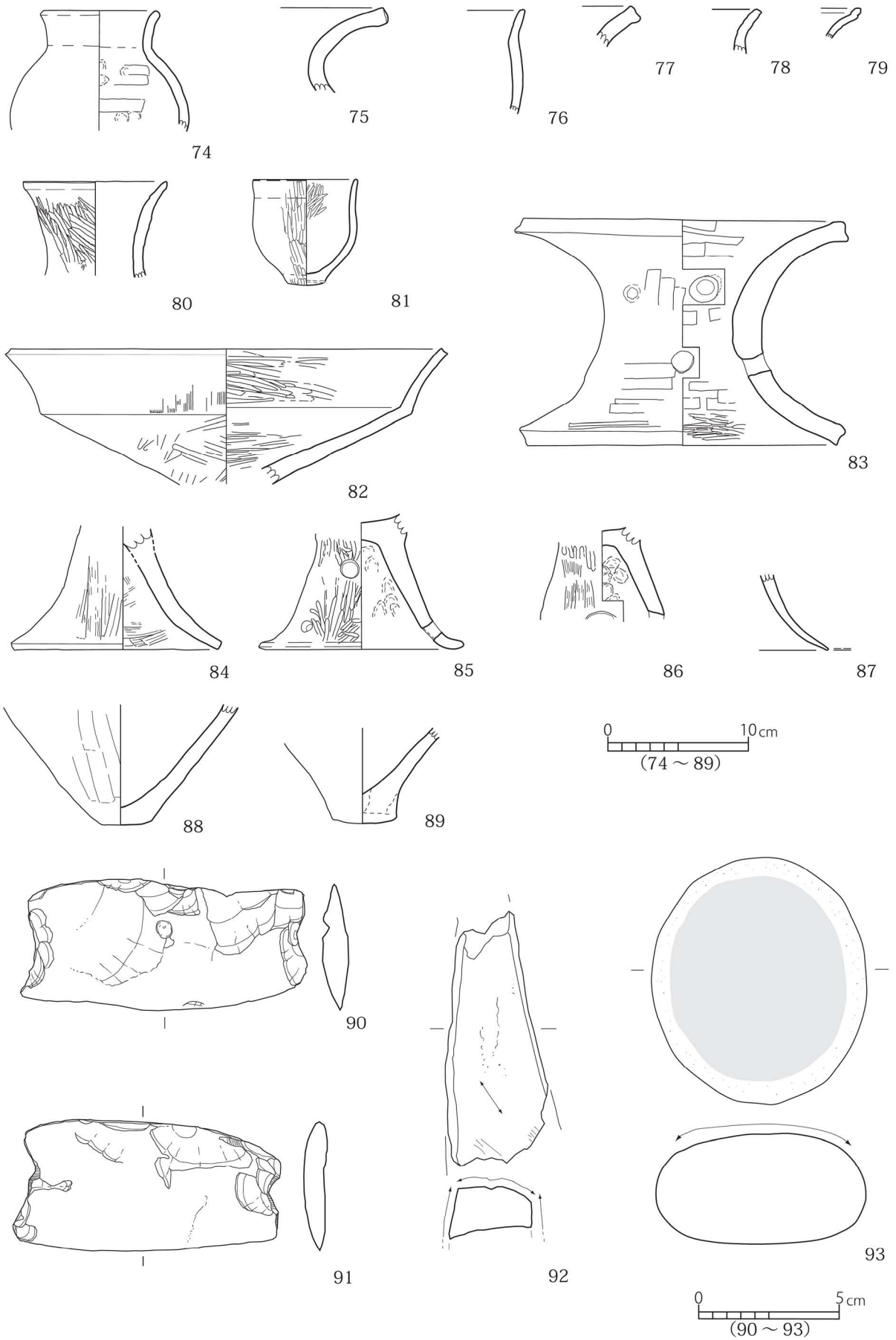
【貼床除去後の状況】周囲は浅く掘り下げ、薄く貼床を施している。それは張り出し部分にあたり、特に北端隅から西側にかけて広くなっている。中央部分は周囲より5～10ｃｍ深く平坦に掘り下げている。貼床除去後Ｐ５～Ｐ８を検出した。これらの柱穴は、検出面から0.2～0.3mを測る。

第５表　ＳＡ７出土種実同定表

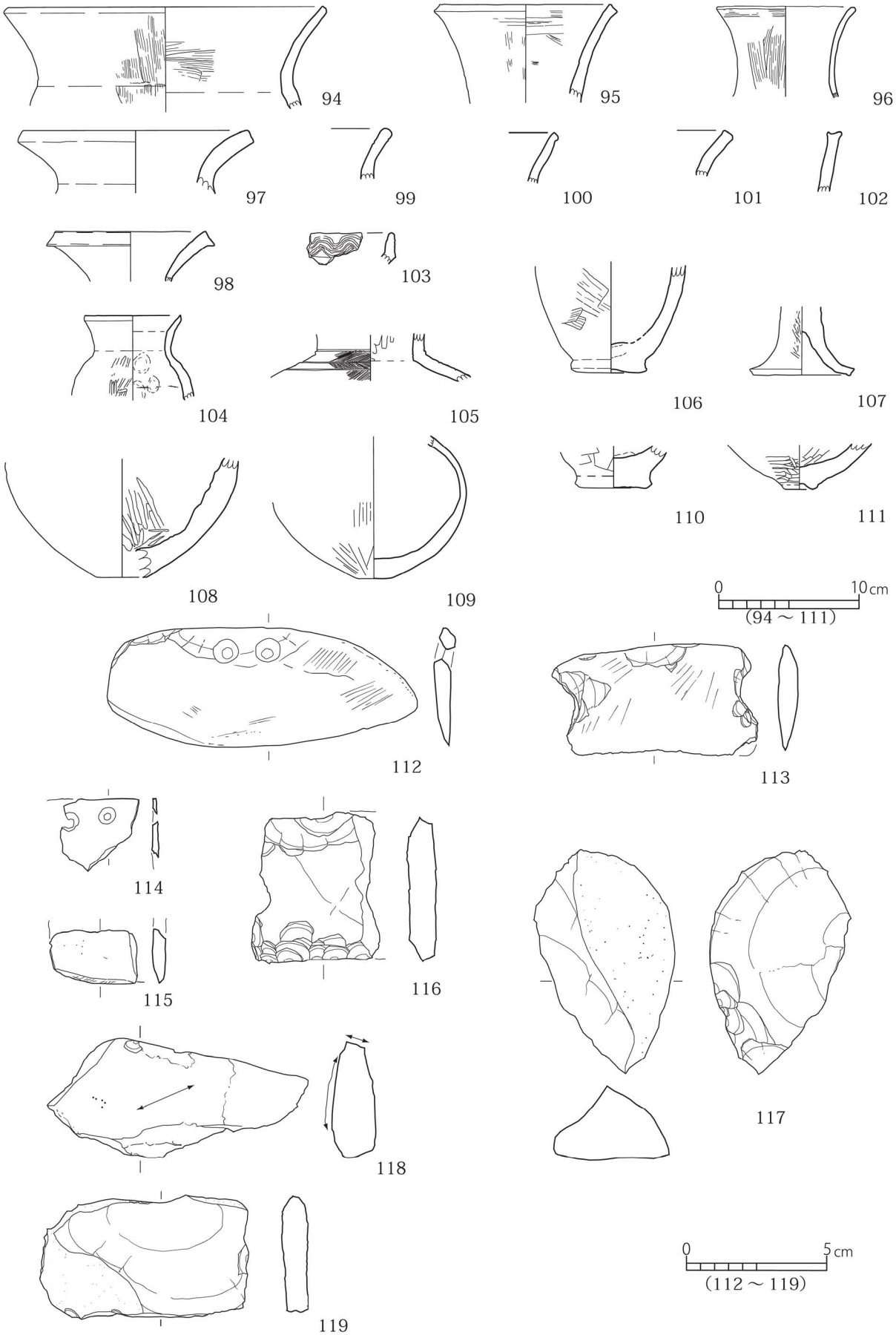
位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
13	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	炭化物片１
22		不明種実		1	炭化物片４
26	Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	1	
29	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	炭化物片１
52	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	3	炭化物片５
土坑1	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	3	炭化物片３
土坑2	Oryza sativa L.	イネ	果実	1	炭化物片１



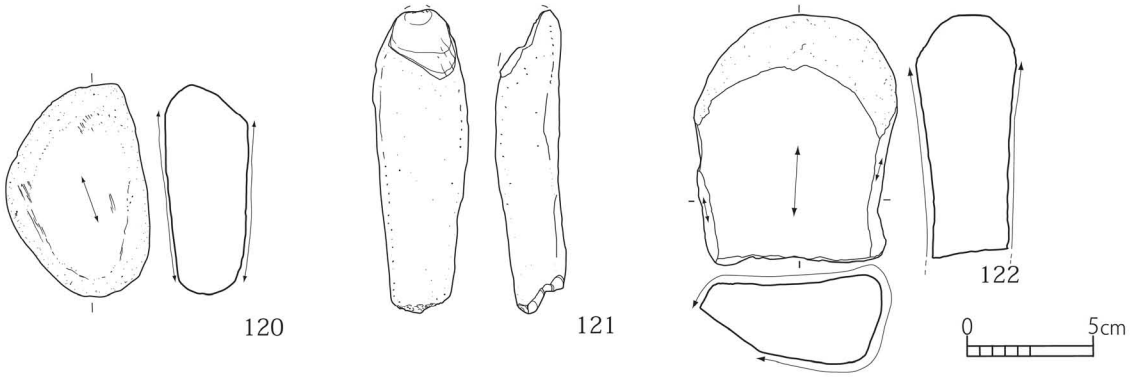
第 29 図　ＳＡ７床面出土遺物実測図１　(1/4)



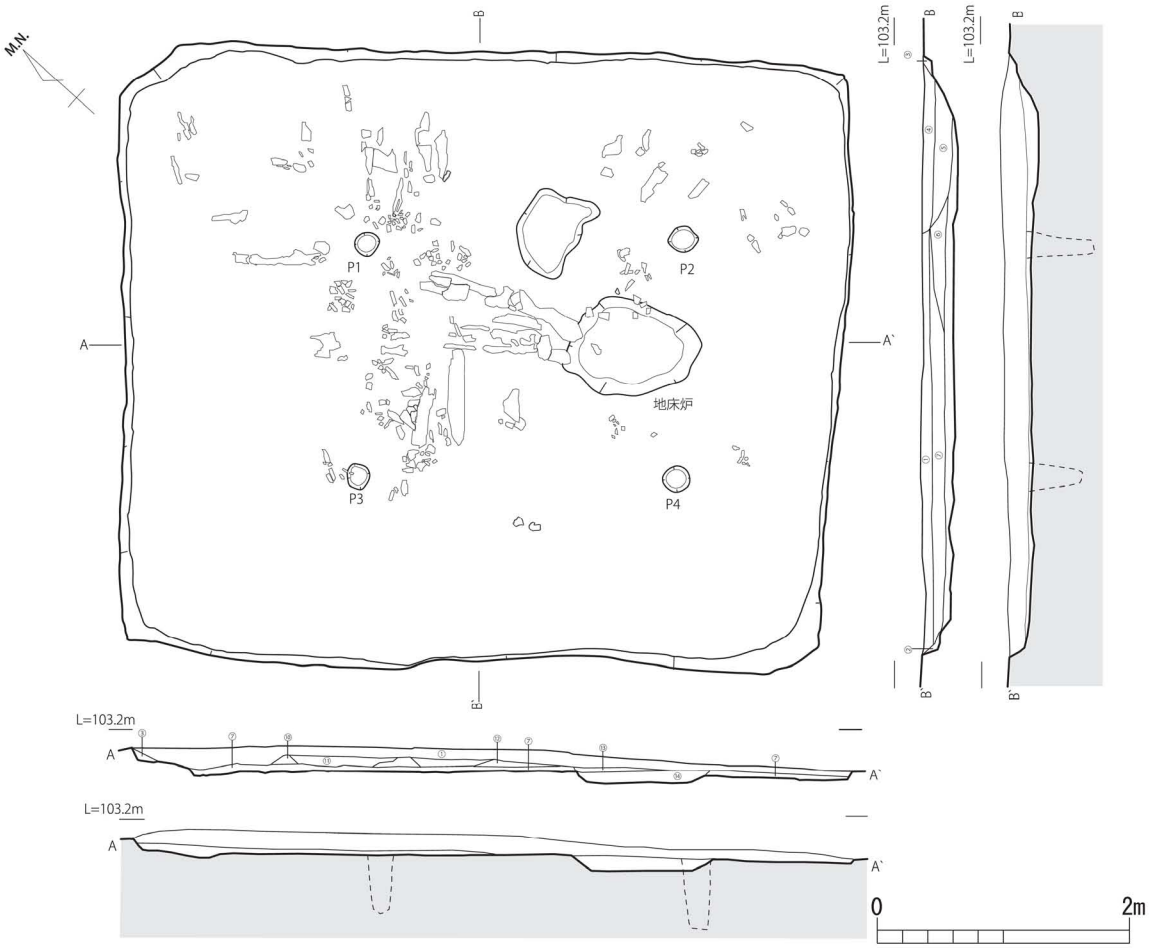
第 30 図　ＳＡ７床面出土遺物実測図２　(1/2,1/4)



第 31 図　ＳＡ７覆土出土遺物実測図１　(1/2,1/4)



第 32 図　ＳＡ７覆土出土遺物実測図２　(1/3)



①黒色土 (7.5Y2/1) 粒子細かく、やや粘性あり。K-Ah ブロックを少し含む。②黒褐色土 (2.5Y3/1)K-Ah 粒を含む。③黒色土 (2.5Y2/1) やや粘性あり。K-Ah 粒を少し含む。④黒色土 (10Y2/1) 粒子細かく、粘性あり。⑤黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。⑥黒色土 (10YR2/1) 粘性あり。炭化物を含む。⑦黒色土 (10Y1.7/1) 粘性あり。炭化物を多く含む。⑧黒色土 (7.5Y2/1)k-Ah 粒を含む。⑨黒色土 (10YR2/1) と K-Ah の混合土 (6:4) しまりが強い。⑩黒色土 (7.5Y2/1)K-Ah 粒を多く含み､焼土化している。炭化物を含む。⑪明赤褐色 (5YR5/8) 焼土化した K-Ah。黒色土をわずかに含む。⑫暗褐色土 (10YR3/3) 黒色土と K-Ah 粒が混じる。焼土層。炭化物を多く含む。⑬黒色土 (10YR2/1) 粘性あり。K-Ah 粒を含む。

第 33 図　ＳＡ８実測図　(1/60)

ＳＡ８（第33図～第36図）

【位置】 A-2区K8グリッドに位置する。

【規模】 5.3×4.5の隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1ｍである。

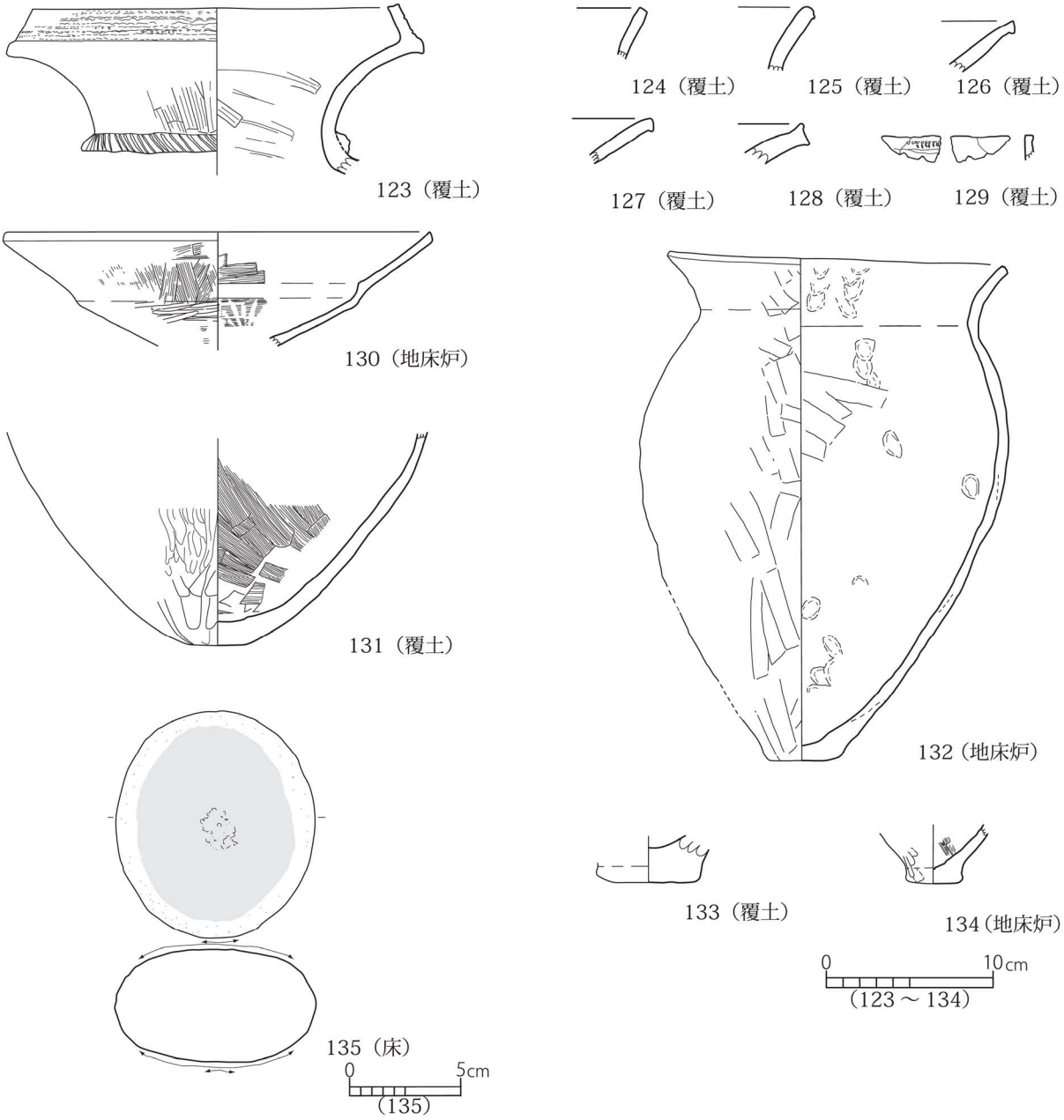
【柱穴】 主柱穴は4本である。柱掘り方は0.25～0.3ｍの円形で、深さは最深のもので床面から0.5ｍを測る。柱痕跡は認められない。

【覆土の状況・炭化材】 覆土は、上部は黒色土が堆積していた。床面の直上には、焼土化したK-Ahがドーナツ状にみられ、その中央部は炭化物を多く含んだ黒色土が堆積していた。焼土の下からは、多量の炭化材が検出された。炭化材のうち、放射状になっているものもあり、垂木と考えられる。

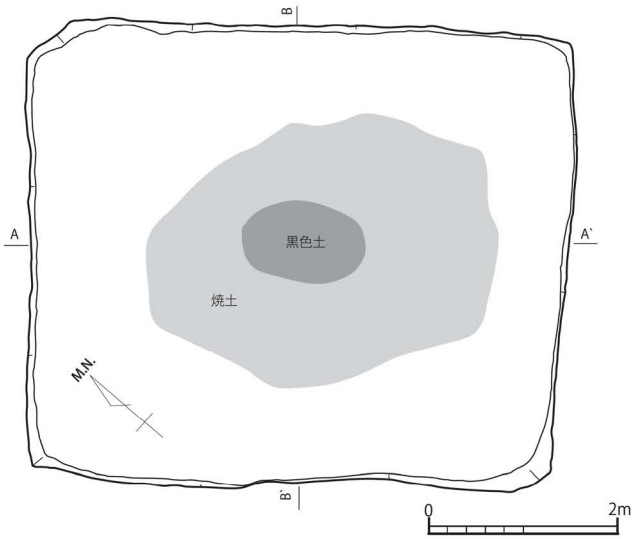
【床面】 k-Ah粒を含んだ黒褐色土の貼床が施される。中央部よりやや東側で地床炉が検出された。

【地床炉】 地床炉は、住居中央部分に検出された。平面形は、１×0.8ｍの楕円形で検出面からの深さ0.1ｍを測り、断面は皿状をなす。底面付近には焼土層が発達しており、壁面も部分的に被熱による赤変を受けていた。

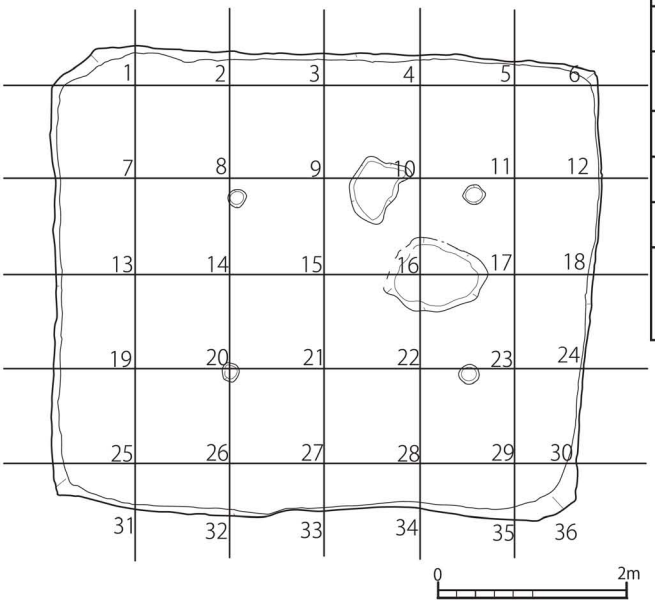
【出土遺物】 床面からは遺物は少なく、地床炉の覆土からの出土である。



第34図　ＳＡ８出土遺物実測図　(1/3,1/4)



第 35 図　ＳＡ８焼土検出状況図 (1/80)



第 36 図　ＳＡ８ フローテーション区割図

【フローテーション】 １ｍメッシュを設定し（第36図）、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第6表のとおりである。

第６表　ＳＡ８出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
3	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	
7	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	5	炭化物片 1
8	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	2	炭化物片 5
9	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	炭化物片 1
12	Prunus persica Batsch	モモ	核（破片）	1	炭化物片 2
19		不明種実	破片	1	炭化物片 4
27	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	炭化物片 6
SC2	Rubiaceae?	アカネ科？	種子	1	
土器123内		不明植物遺体		1	炭化物片 3

ＳＡ９(第37図～第39図)

【位置】 A-2区M8グリッドに位置する。北西部分と南東部分が攪乱を受け削平されている。

【規模】 4.2×4.3ｍの隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1ｍである。

【柱穴】 主柱穴は２本である。北側の柱穴は攪乱で半分削平されている。柱掘り方は0.2ｍの円形で、深さは0.5ｍを測る。柱痕跡は認められない。

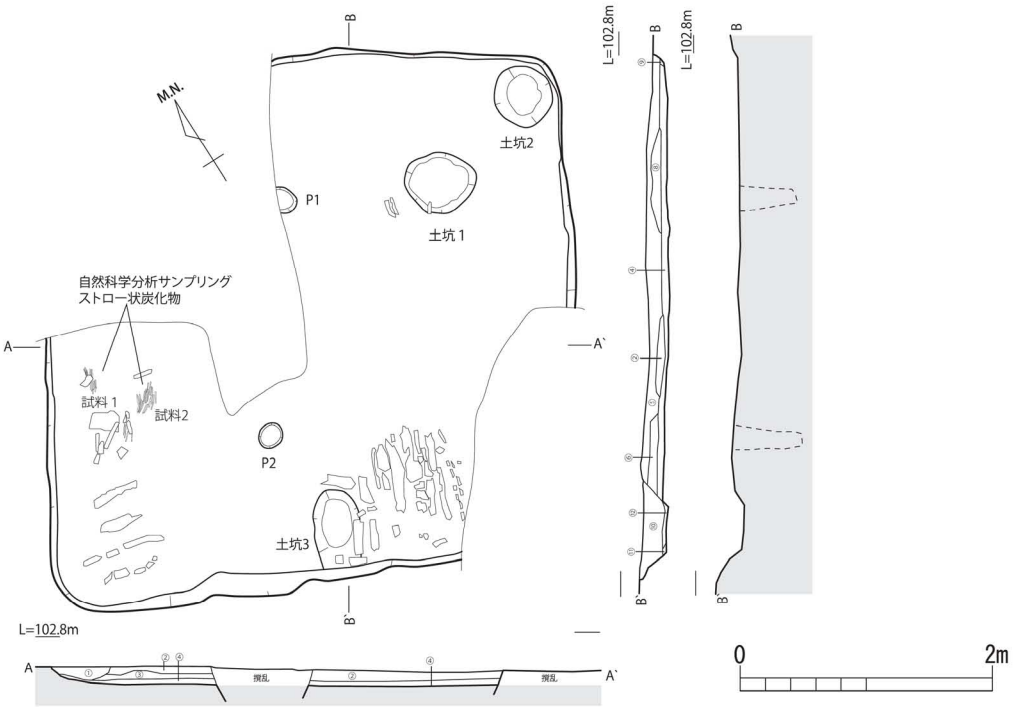
【覆土の状況・炭化材】 覆土は、上部はK-Ah粒を含んだ黒色土が堆積し、床面直上には、焼土化したK-Ah粒がみられた。焼土については、セクションベルトのみで確認したため、平面の状況は不明である。南西部分で多量の炭化材が検出された。多くの炭化材は住居の主軸方向に平行または直交していた。炭化材のなかにはストロー状の炭化物がみられた。この炭化物については、屋根材の可能性があり、どのようなものを使用したか推定するため、植物珪酸体分析及び樹種同定を(株)古環境研究所に分析委託した。詳細については第Ｖ章に記載する。

分析の結果、炭化物はメダケ属などのタケ亜科の茎部（葉鞘を含む）という結果が得られた。

【床面】 床面は貼床が施され、貼床はK-Ah粒と白色粒を含み、硬化していた。

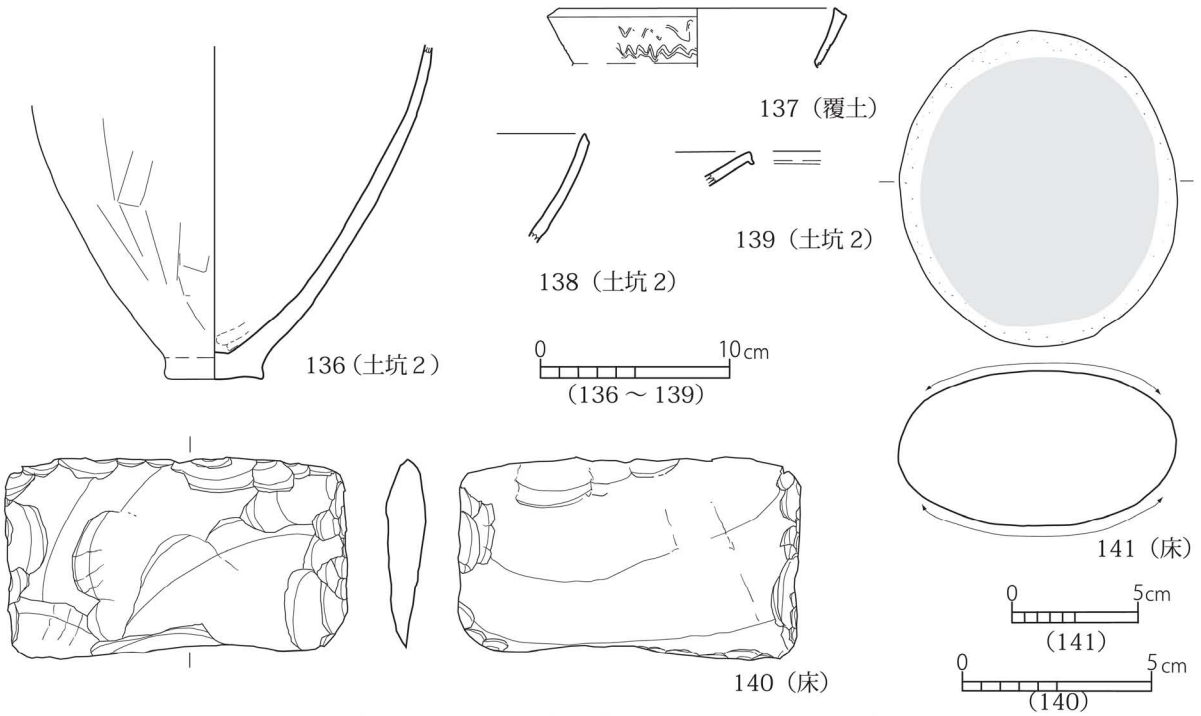
【住居内土坑】 土坑が3基検出された。いずれも埋土は黒色土でしまりがない。土坑２の埋土中からは136、138、139が出土している。

【出土遺物】 遺構から出土の遺物は、わずかであ



①黒褐色土 (10YR2/3) しまりがない。K-Ah 粒をまばらに含む。②黒色土 (10Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。③焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (8:2) 屋根土？④黒色土 (10YR2/1) 固くしまる。K-Ah 粒を含む。貼床。白色粒をまばらに含む。⑤黒色土 (5Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。⑥黒色土 5Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。やや粘性あり。⑦黒褐色土 (10YR3/2)K-Ah 粒を少し含む。⑧黒褐色土 (2.5Y3/1)K-Ah のブロックが混じる。しまりがない。⑨黒色土 (2.5Y2/1) 粘性あり。⑩褐色土 (10YR4/4)K-Ah 粒を多く含む。

第 37 図　ＳＡ９実測図 (1/60)



第 38 図　ＳＡ９出土遺物実測図 (1/2,1/3,1/4)

る。床面では、住居中央部で数点の土器片が、北東端で石庖丁の未製品（140）が出土した。136は土坑2及び床面から出土の甕の底部であり、この遺物はＳＡ８から出土した土器片と接合している。

【フローテーション】 １ｍメッシュを設定し（第39図）、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第7表のとおりである。

第７表　ＳＡ９出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
9	Corydalis	キケマン属	種子	10	昆虫１

ＳＡ10(第40図、第41図)

【位置】A-2区Ｍ９グリッドに位置する。北西部分が撹乱を受け削平されている。

【規模】4.2×4.0の隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1ｍである。

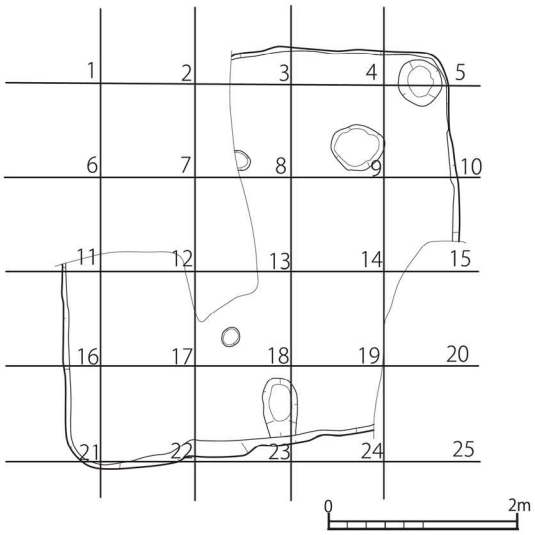
【柱穴】検出できた主柱穴は１本である。柱掘り方は0.2ｍの円形で、深さは0.6ｍを測る。検出された柱穴の位置から北側にもう1本の柱穴が推測され、2本柱であったと考えられる。

【覆土の状況・炭化材】上部はK-Ah粒を少し含んだ黒褐色土が堆積し、その下には焼土化したK-Ah粒がみられた。焼土化したK-Ahは住居の中央部にみられた。床直上には、しまりのない黒褐色土が堆積している。炭化材は焼土化したK-Ahの下から検出された。ＳＡ８やＳＡ９とは異なり、炭化材は床面から４～５ｃｍ浮いており、住居の主軸方向に直交及び平行する状態で検出された。

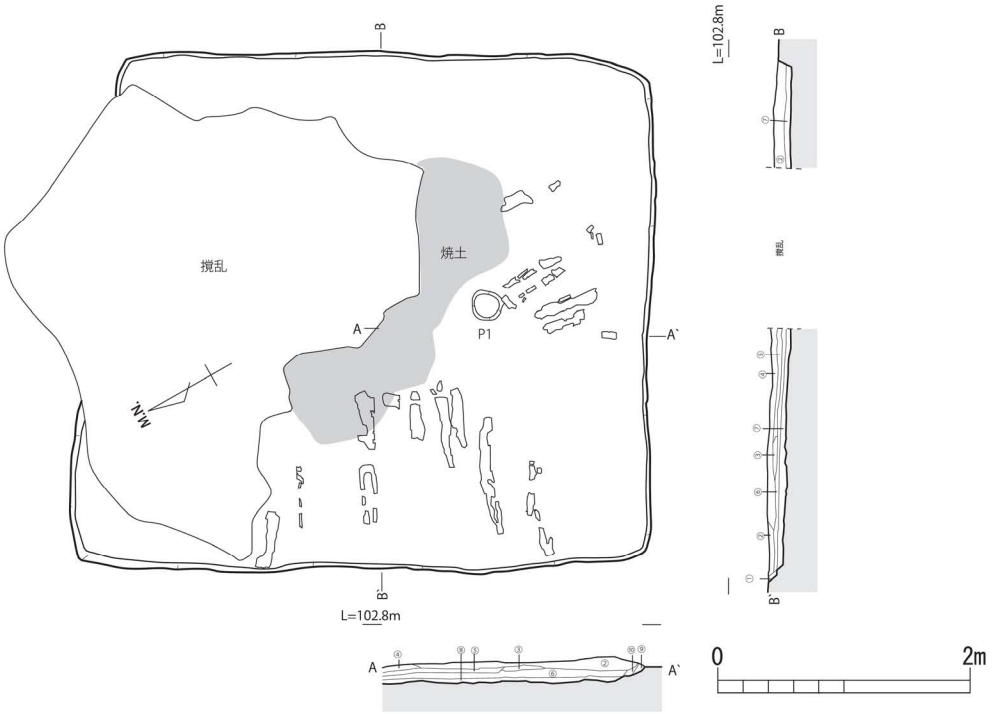
【床面】床面はK-Ah粒と暗褐色土を含んだ部分とK-Ah粒を含まず暗褐色土と黒色の部分があった。いずれもしまりが強く硬化している。

【出土遺物】床面から遺物の出土はなく、すべて覆土中からの出土である。遺物の出土した高さは炭化材と同レベルかそれより高い位置で出土している。

【フローテーション】他の住居同様、１ｍメッシュを設定し床面直上の土を採取し、水洗を実施した。しかし、炭化種子は確認されず、炭化物のみであった。

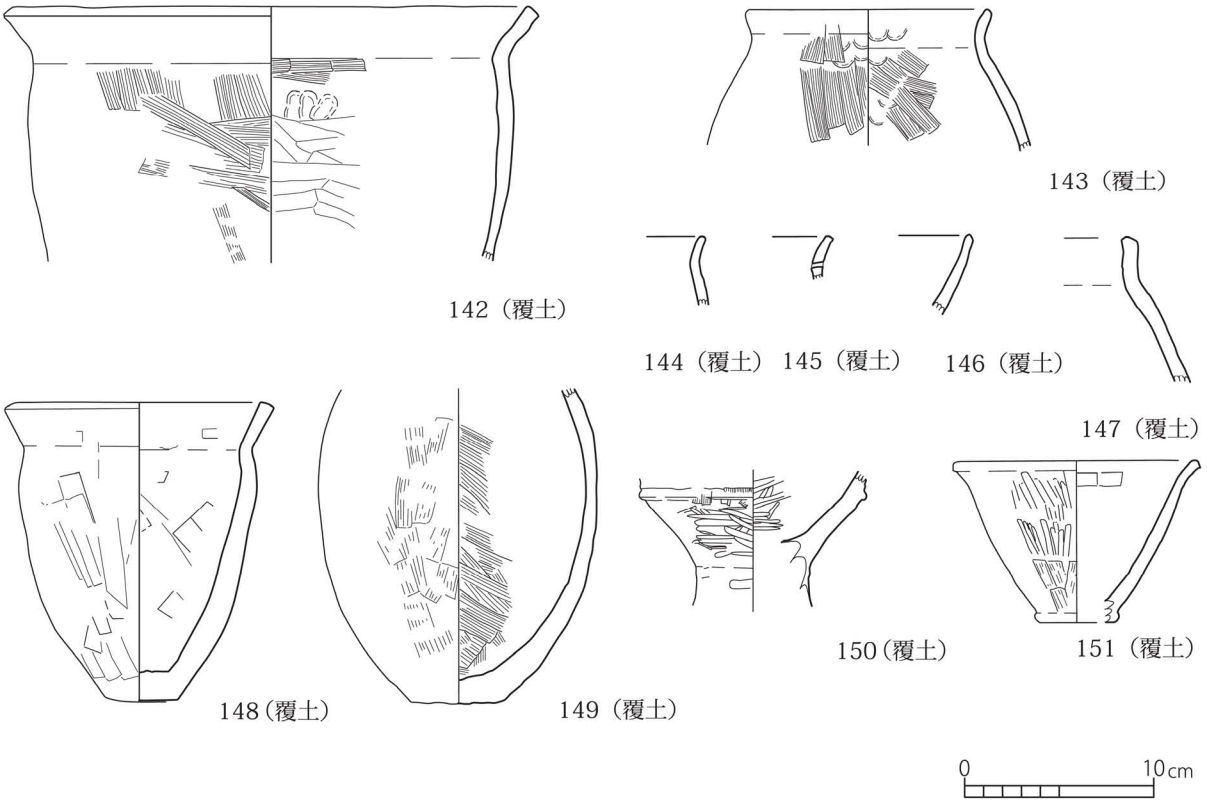


第39図　ＳＡ９フローテーション区割図

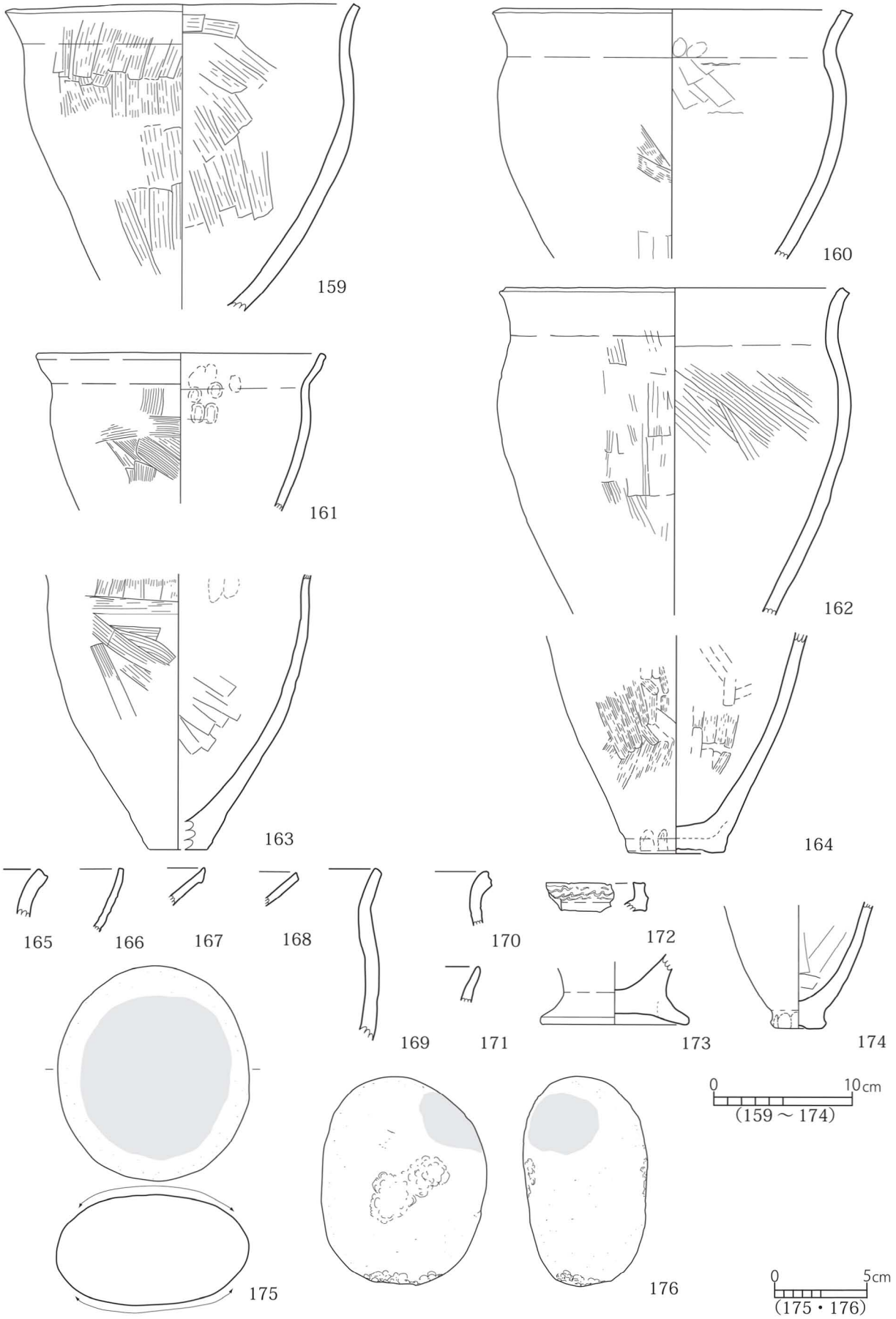


①黒褐色土 (10YR3/1)K-Ah 粒を少し含む。しまりがない。②黒色土 (7.5Y2/1) しまりがない。やや粘性あり。③焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (6:4) ややしまりあり。④焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (8:2) ややしまりあり。⑤焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (9:1) 炭化材が混じる。⑥黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりがなく、粒子が細かい。やや粘性あり。⑦黒褐色土 (2.5Y3/1)K-Ah 粒と暗褐色土を含む。固くしまる。貼床。⑧黒褐色土 (2.5Y3/1) 黒色土と暗褐色土を含む。K-Ah 粒を含まない。固くしまる。貼床。⑨黒褐色土 (10YR3/1) しまりがない。⑩黒褐色土 (10YR2/2) しまりがない。

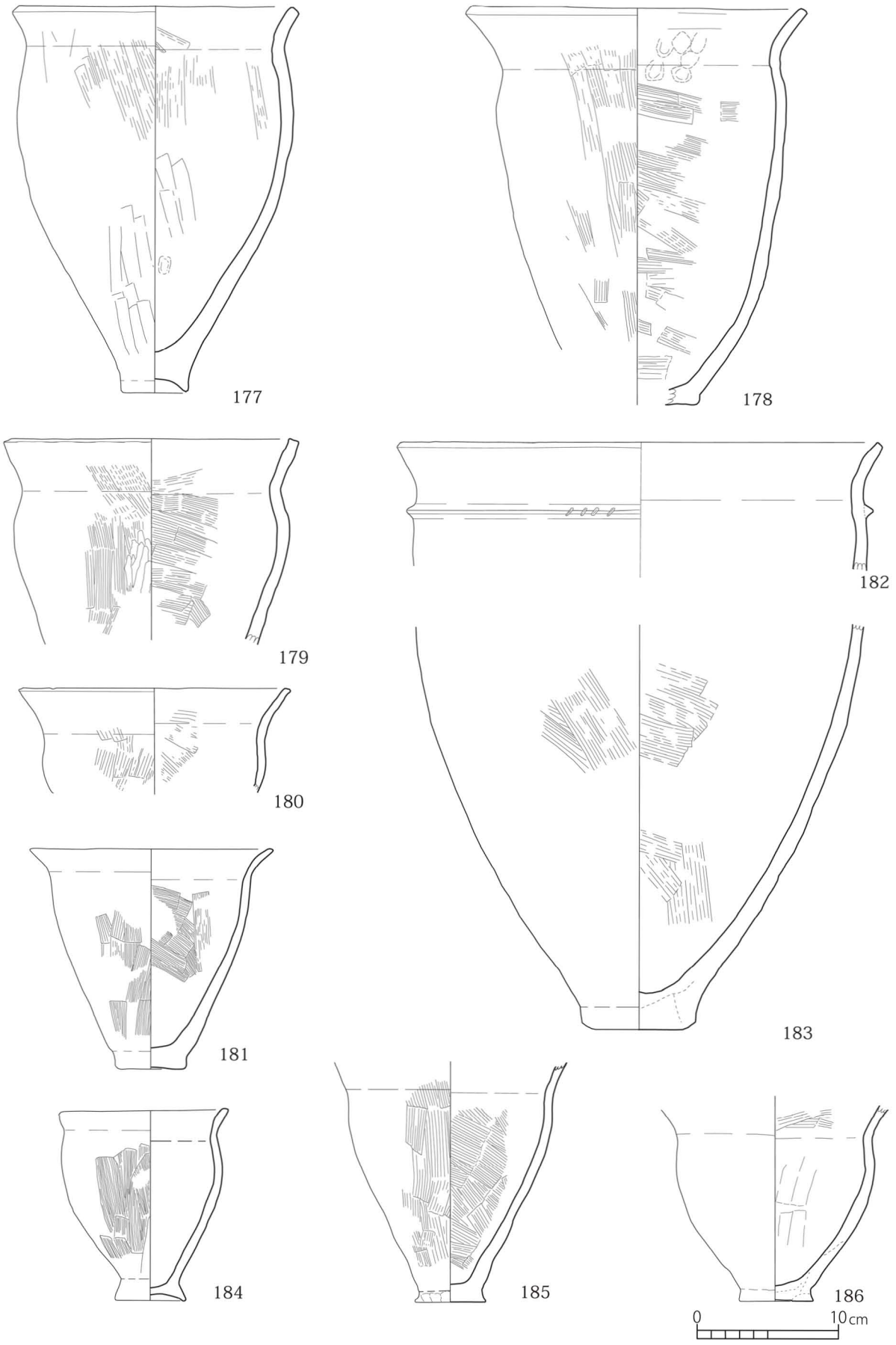
第 40 図　ＳＡ 10 実測図　(1/60)



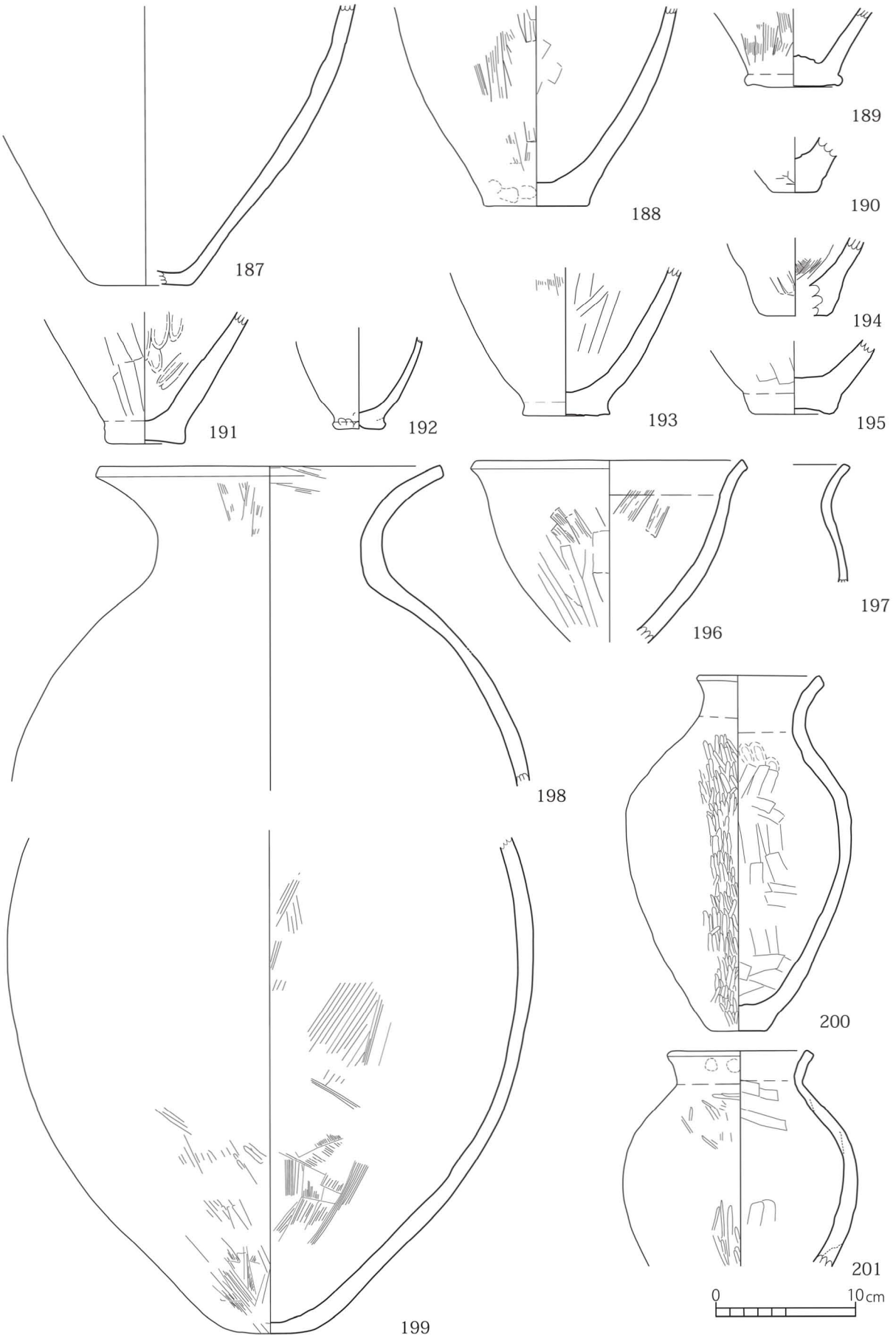
第 41 図　ＳＡ 10 出土遺物実測図　(1/4)



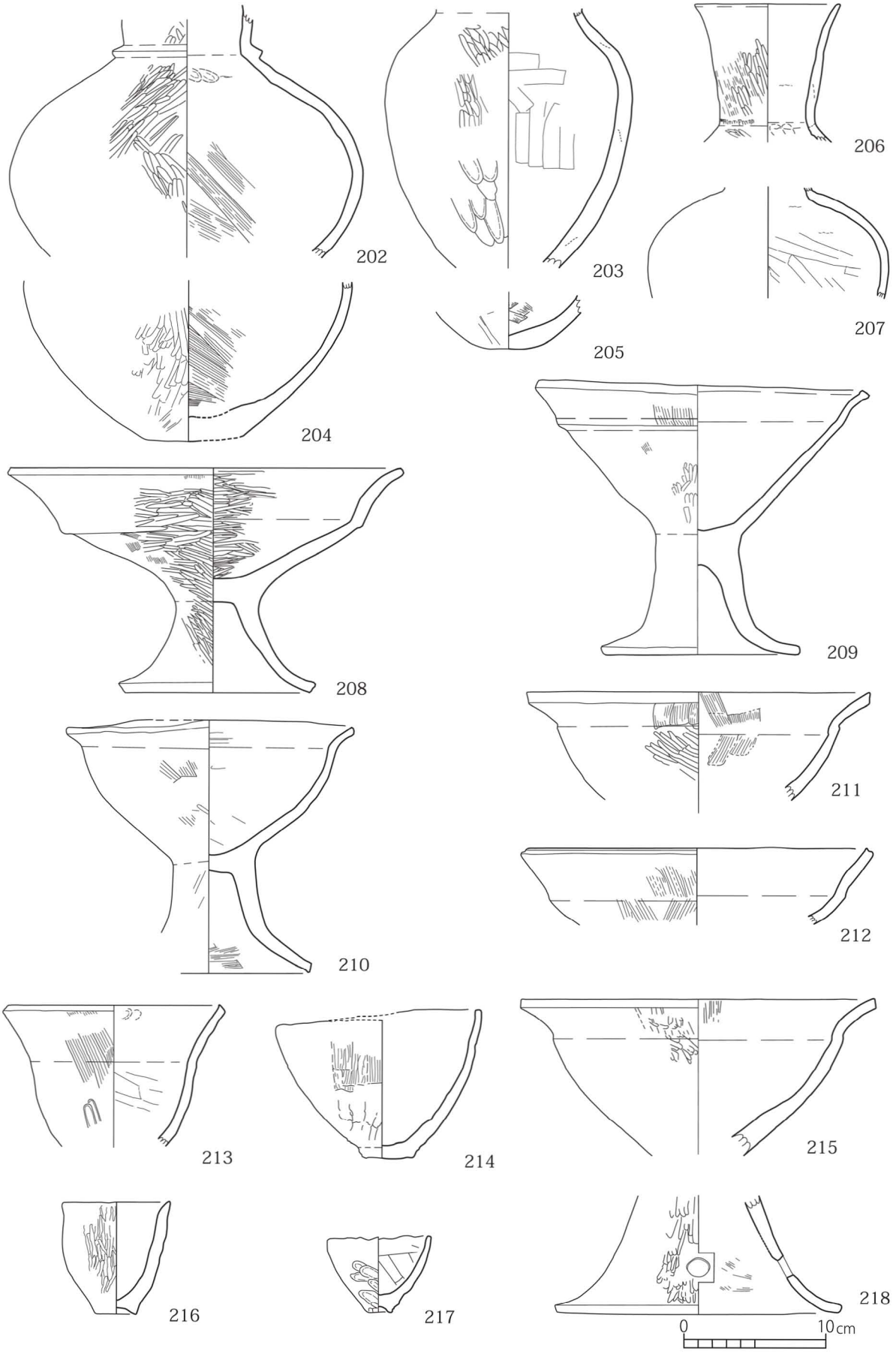
第 44 図　包含層出土遺物 実測図　(1/3,1/4)



第 45 図　撹乱土坑出土遺物実測図 1　(1/4)



第 46 図　撹乱土坑出土遺物実測図２　(1/4)



第 47 図　撹乱土坑出土遺物実測図３　(1/4)

第８表　弥生土器観察表１

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
16	SA3	覆土	鉢	口縁部				ナデ	工具ナデ	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	2mm 以下の乳白色、黄橙色粒を少し含む。	良好	外面にススが付着	
17	SA3	覆土	甕	底部			(6.5)	斜め方向の工具ナデ	横、斜め方向の工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/1)	4mm 以下の灰白色、灰黄色粒、2mm 以下の明褐灰色粒を多く含む。微細な透明光沢粒を含む。	良好	内外面風化気味。内面に炭化物付着	
19	SA2	覆土	高坏	口縁部				ミガキ	ミガキ	黒色 (N1.5/)	黒色 (N2/) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2mm 以下の灰白色粒を含む。	良好		
20	SA2	覆土	鉢	口縁部				ミガキ	丁寧なナデ	黒色 (N2/)	橙色 (5YR6/6)	2mm 以下の白色、褐色粒を少し含む。1mm 以下の黒色粒をごくわずかに含む。	良好		
21	SA2	覆土	甕	底部			(5.0)	斜め方向の工具ナデ	指ナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR6/6)	1mm 以下の茶褐色粒を少し含む。	良好		
22	SA2	土坑１	甕	底部			(2.7)	風化が著しく調整不明	ナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3) 黒色 (5Y2/1)	2mm 以下の灰白、乳白色粒を多く含む。	良好	内面黒変	
23	SA2	床	高坏	脚部			(13.4)	縦方向のミガキ	ナデ、指頭痕	橙色 (7.5YR7/6) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	橙色 (7.5YR6/6)	2mm 以下の黄灰、灰白粒、1mm 以下の褐色粒、白色光沢粒、無色透明光沢粒を含む。	良好		
24	SA4	覆土	甕	口縁部～胴部	(30.2)			縦方向のハケ目	横方向の工具ナデ	橙色 (10YR7/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	1 ～ 3mm の灰白色粒を多く、1 ～ 2mm のにぶい褐色粒を少し含む。	良好	外面にスス付着	SA7
25	SA4	土坑	甕	口縁部～胴部	(23.4)			口縁部横方向のナデ、縦方向のハケ目	横方向のハケ目、胴部ナデ	橙色 (5YR6/6) にぶい赤褐色 (5YR5/4)	橙色 (7.5YR6/6)	1mm 程の灰白色粒を多く、2mm 程のにぶい黄橙色粒を少し含む。	良好	外面スス付着	SA7
26	SA4	土坑	壺	口縁部～頸部	13.3			口唇部横方向の指ナデ、縦方向のハケ目	横方向のハケ目、頸部付近丁寧なナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 黒褐色 (2.5Y3/1)	灰黄色 (2.5Y7/2) 黒褐色 (2.5Y3/1) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 程の灰白色粒を多く、1mm 以下の乳白色、赤褐色粒を少し含む。	良好	外面一部黒変	
27	SA4	覆土	壺	口縁部				口縁端面に櫛描波状文、斜め方向のハケ目	横方向のナデ	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	1mm 以下の白色粒をごくわずかに含む。	良好	外面にスス付着	
28	SA4	覆土	甕	口縁部				口唇部横ナデ、縦方向のハケ目	横方向のハケ目	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	2mm 以下の灰白、にぶい橙色粒を少し含む。	良好		
29	SA4	覆土	壺	胴部				縦、斜め方向のハケ目、線刻	指ナデ	灰黄褐色 (10YR5/1)	明黄褐色 (10YR6/6)	4mm 以下の茶褐色粒、2mm 以下の白色粒を少し含む。	良好	外面に円弧の線刻	
30	SA4	覆土	甕	口縁部～胴部	(26.7)			横方向のナデ	斜め方向のハケ目	灰褐色 (5YR4/2)	灰褐色 (5YR4/2)	7mm 以下の灰白色粒を含む。	良好	外面にスス付着	
31	SA4	覆土	壺	口縁部～胴部	(6.3)			口縁部横方向のナデ、荒いミガキ	ナデ	明黄褐色 (10YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm 以下の乳白色、黄褐色、半透明粒を少し含む。	良好	頸部に穿孔	

第９表　弥生土器観察表２

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
32	SA4	床	壺	底部			(3.3)	ナデ、指ナデ	ナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	1 ～ 3mm の灰白色粒を多く含む。	良好		
33	SA4	床	甕	底部			3.6	縦方向のハケ目、ナデ	横方向のハケ目、指頭痕	明灰黄色 (2.5Y5/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 3mm の灰白色粒を多く、1 ～ 2mm のにぶい褐色粒を少し含む。1mm 程の乳白色粒を少し含む。	良好		
34	SA4	覆土	甕	胴部～底部			(8.0)	縦方向のハケ目、底部付近指押さえ	ナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (7.5YR7/6)	1 ～ 4mm の白色粒を多く、2 ～ 4mm の灰色粒を少し、2 ～ 3mm の褐色粒をわずかに含む。	良好	外面黒変	
35	SA4	床	甕	胴部～底部			(6.8)	縦方向のヘラケズリ	ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4) 黒色 (10Y2/1)	灰黄色 (2.5Y7/2) 灰 (5Y5/1)	2 ～ 3mm の浅黄橙、灰白色粒を多く含む。	良好	外面黒変、内面に炭化物付着	SA7 ＋撹乱２
36	SA4	覆土	高坏	脚部				縦方向のハケ目、裾部ハケ目のち横方向のナデ	ナデ、裾部横方向のナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1 ～ 2mm の黒色、褐色粒を多く、1mm 以下の褐色粒を少し、2mm 以下の灰色粒をわずかに含む。	良好		
46	SA5	覆土	甕	口縁部				縦方向のハケ目のちナデ	横方向のハケ目のちナデ	明赤褐色 （５ＹＲ 5/6）	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 4mm の褐色粒を多く、1 ～ 2mm 灰色粒を少し含む。	良好	外面一部黒変	
47	SA5	覆土	甕	口縁部				口縁部横方向のハケ目のちナデ、胴部斜め方向のハケ目のちナデ	口縁部横方向のハケ目のちナデ、胴部斜め方向のハケ目のちナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	灰黄褐色 (10YR5/2)	1 ～ 2mm の白色、褐色粒、1mm 以下の白色粒を多く含む。	良好	内面黒変	
48	SA5	覆土	壺	口縁部				丁寧なナデ、口縁端部横方向のナデ	縦方向のナデ	にぶい黄色 (2.5Y4/6)	黄灰色 (2.5Y1/4)	1mm 程の白色粒を少し含む。	良好		
49	SA5	床	鉢	口縁部				口唇部横方向のハケ目のち横方向のナデ、横方向のハケ目	斜め方向のハケ目のちナデ	にぶい橙色 (10YR6/4)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 2mm の黒色粒を少し、2mm 程の白色粒をわずかに含む。	良好		
50	SA5	覆土	甕	口縁部～胴部	(29.4)			口縁部横方向のナデ、頸部以下縦方向のハケ目	横方向のハケ目、指頭痕、胴部下半ハケ目のち工具ナデ	橙色 (7.5YR7/6) 黒色 (2.5Y2/1)	橙色 (7.5YR7/6)	0.5 ～ 2mm の乳白色粒を多く、1mm 程の灰色、褐色粒を少し含む。	良好	外面胴部下半にスス付着	
51	SA5	床	甕	口縁部	(34.8)			口唇部横方向のナデ、縦方向のハケ目のちナデ	横、斜め方向のハケ目	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1 ～ 3mm の灰色粒を多く、1 ～ 2mm の白色、黒色粒を少し、1mm 程の灰色透明粒をわずかに含む。	良好	内面一部黒変	
52	SA5	土坑２	壺	口縁部～底部	12.2	39.3	6.8	縦方向のハケ目、ナデ	縦、横方向のハケ目、工具ナデ	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	黒色 (2.5Y1/2)	1 ～ 2mm の乳白色粒を多く、1 ～ 2mm の灰白、褐色粒を少し含む。	良好		
53	SA5	床	壺	胴部				頸部縦方向のハケ目のちミガキ、胴部斜め方向のハケ目のちミガキ	横方向のハケ目、指頭痕	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1 ～ 3mm の黒色粒を多く、1 ～ 2mm の灰色半透明粒を少し、2 ～ 3mm の灰色粒をわずかに含む。	良好		
54	SA5	床	高坏	坏部				縦方向のハケ目	縦方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm 程の乳白、赤褐色粒を少し含む。	良好		
55	SA5	床	壺	口縁部～胴部	9.2			口縁部横方向のナデ、胴部風化のため一部ハケ目のちミガキ	口縁部ナデ、胴部横方向のハケ目、指頭痕	明黄褐色 (10YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm 程の灰白粒を多く、2mm 程の乳白色粒、1 ～ 5mm の褐色粒を少し含む。	良好		

第 10 表　弥生土器観察表 3

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
56	SA5	床	壺	胴部～底部			(4.8)	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 褐灰色 (10YR4/1)	2 ～ 4mm の白色粒、2mm 程の褐色粒を含む。	良好		SA7
57	SA5	床	壺	底部			(4.4)	丁寧なナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm 程の白色粒を含む。	良好		
58	SA5	覆土	甕	底部			(6.4)	ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	黒褐色 (7.5YR3/1)	1 ～ 3mm の白色粒、1 ～ 2mm の褐色粒を多く、3mm 以下の灰色粒を少し含む。	良好	外面黒変	
66	SA7	床	甕	口縁部～底部	(26.2)	(26.8)	(6.3)	縦、斜め方向のハケ目、口縁部ハケ目のちナデ	口縁部ハケ目のちナデ、丁寧なナデ	橙色 (5YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 2mm の浅黄橙色粒を多く、1mm の灰白色、褐色粒を少し含む。	良好	外面スス付着	
67	SA7	床	甕	口縁部～底部	(23.5)	26.4	4.0	縦方向のハケ目	斜め方向のハケ目、ナデ	黒褐色 (10YR2/3)	黒褐色 (10YR1/3)	1 ～ 2mm の灰白、褐色、赤褐色粒を多く含む。	良好	外面スス付着	
68	SA7	床	甕	胴部～底部			(5.0)	縦方向のハケ目、底部付近縦、横方向のミガキ	横方向のハケ目、部分的にハケ目のちナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 黒色 (2.5YR2/1)	1 ～ 2mm の灰白色粒を多く、1 ～ 2mm の褐色粒を少し含む。	良好	内外面黒変	SA4
69	SA7	床	甕	口縁部～底部	(20.0)			口縁部横方向のナデ、縦方向のハケ目	口縁部横方向のハケ目、工具ナデ、指頭痕	にぶい褐色 (7.5YR5/1)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	1 ～ 3mm の乳白色粒を含む。	良好	外面スス付着	
70	SA7	床	甕	口縁部～胴部	(21.6)			口縁部横ナデ、斜め方向のハケ目	縦方向のハケ目、指押さえ	黄橙色 (7.5YR7/8) 橙色 (5YR6/8)	橙色 (7.5YR6/8)	1 ～ 3mm の灰色、白色粒を多く、1 ～ 5mm の褐色粒を少し含む。	良好	外面黒変	
71	SA7	床	壺	口縁部～底部	14.8	29.6	5.9	頸部～底部ミガキ、肩部竹管文	頸部～胴部上半工具ナデ、指頭痕、胴部下半ハケ目、指頭痕	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1 ～ 2mm の黒色、灰色、白色粒を多く、1mm 以下の黒色透明粒、褐色粒をわずかに含む。	良好	籾圧痕有り	
72	SA7	床	壺	口縁部～底部	8.6	21.2	2.7	不定方向のミガキ	口縁部横方向のナデ、斜め方向のハケ目のちナデ、胴部下半ミガキ	浅黄橙色 (10YR8/6)	橙色 (5YR7/6)	1 ～ 3mm の白色粒を多く含む。1 ～ 2mm の褐色粒を含む。	良好	外面、底部付近黒斑、籾圧痕有り	
73	SA7	床	壺	胴部～底部			(2.4)	縦方向のハケ目、底部付近ケズリ	縦方向の工具ナデ、指頭痕	にぶい橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1 ～ 4mm の明褐色粒を多く含む。	良好		
74	SA7	床	壺	口縁部～胴部	(10.0)			口縁部横ナデ、胴部風化のため調整不明	工具ナデ、指押さえ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 4mm の灰白色粒、1mm 程の乳白色、にぶい黄橙色粒を多く、1mm 以下の無色透明粒を少し含む。	良好	内面黒変	
75	SA7	床	壺	口縁部				口唇部に円形浮文	横方向の工具ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	褐灰色 (10YR5/1)	1mm 程の灰白、褐色、乳白色粒を多く含む。	良好	内外面風化が著しい	
76	SA7	床	甕	口縁部				風化のため調整不明	縦方向のハケ目	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 3mm の白色粒を多く、2mm の褐色粒をわずかに含む。	良好	内外面風化している	
77	SA7	床	壺	口縁部				ナデ	ナデ	褐灰色 (10YR4/1)	明黄褐色 (10YR7/6)	1mm 程の灰白、褐色粒を多く含む。	良好	内面黒変	

第 11 表　弥生土器観察表 4

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
78	SA7	床	甕	口縁部				横、斜め方向のハケ目のちナデ	横方向のハケ目のちナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 2mm の白色粒を多く、1 ～ 2mm の灰色粒を少し含む。	良好		
79	SA7	覆土	高坏	口縁部				横方向のナデ、沈線	横方向のナデ	明黄褐色 (10YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1mm 以下の赤褐色、乳白色粒を少し含む。	良好		
80	SA7	床	壺	口縁部～頸部	(10.2)			口唇部横方向のナデ、横、斜め方向のナデのちミガキ	縦、横、斜め方向のナデ	橙色 (7.5YR6/6) 褐灰色 (10YR4/1)	褐灰色 (10YR4/1) にぶい橙色 (5YR6/4)	2mm 以下の淡黄色、浅黄色、灰白色、にぶい橙色粒、微細な無色透明粒を含む。	良好		SA4
81	SA7	床	小壺	口縁部～底部	7.5	7.5	2.7	縦方向のミガキ、底部に穿孔あり	縦方向のミガキ、ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	3mm 以下の褐灰色、2mm 以下の赤褐色、1mm 以下の灰白色粒を含む。	良好		
82	SA7	床	高坏	坏部	(30.6)			口縁部縦方向ハケ目のちナデ、ハケ目のちミガキ	口縁部横ナデ、ミガキ	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	1 ～ 3mm の灰色粒を多く、1 ～ 3mm の白色、黒色粒を少し、1 ～ 4mm の褐色粒をわずかに含む。	良好		
83	SA7	床	器台	受部～脚部	22.7	15.8	21.1	横ナデ、横方向の工具ナデ、穿孔あり	工具ナデ、裾部ミガキ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1 ～ 7mm の灰白色、1 ～ 2mm 乳白色粒を多く含む。	良好	外面一部黒班、上部穿孔は未貫通	
84	SA7	床	高坏	脚部			(14.4)	縦方向のハケ目のちナデ	横、斜め方向のハケ目のちナデ	明黄橙色 (10YR6/6) にぶい橙色 (10YR6/4)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 5mm の灰色、白色、1 ～ 2mm の黒色粒を多く、3mm の褐色粒をわずかに含む。	良好	外面一部黒班	
85	SA7	床	高坏	脚部			(14.6)	ミガキ	横ナデ、指押さえ	褐灰色 (10YR4/1)	褐灰色 (10YR4/1)	1mm 以下の灰白色、褐色粒を多く含む。	良好		
86	SA7	床	高坏	脚部				ミガキ、縦方向のハケ目	ナデ、指押さえ	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 程の乳白色、灰白、褐色粒を多く含む。	良好		
87	SA7	柱穴	高坏	脚部				縦方向の工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄色 (2.5Y6/2)	2mm 程の赤褐色、1 ～ 2mm の灰色粒を多く含む。	良好	内面黒変	
88	SA7	床	壺	胴部～底部			(3.0)	縦方向の工具ナデ	ナデ	橙色 (10YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 橙色 (10YR7/6)	1 ～ 3mm の明褐色粒を多く含む。	良好		
89	SA7	床	甕	底部			4.6	風化のため調整不明	工具ナデ	灰褐色 (7.5YR5/2)	黒褐色 (2.5YR3/1)	1 ～ 2mm の乳白色、褐色、灰白色粒を多く含む。	良好	外面黒班	
94	SA7	覆土	甕	口縁部	(22.4)			縦方向のハケ目のちナデ	横方向のハケ目のちナデ	にぶい橙色 (5YR5/4) 灰褐色 (5YR5/2)	明赤褐色 (5YR5/4)	1 ～ 3mm の乳白色、灰色粒を多く含む。1mm の黒色粒を多く、1mm の褐色粒をわずかに含む。	良好	外面黒班	
95	SA7	覆土	壺	口縁部～頸部	(12.2)			口縁部横方向のハケ目のちナデ、頸部縦方向のハケ目のちナデ	口縁部横方向のハケ目のちナデ、頸部横、斜め方向のハケ目のちナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1 ～ 3mm 灰色粒を多く、1 ～ 3mm 褐色、黒色粒を少し、1 ～ 3mm の白色粒をわずかに含む。	良好		
96	SA7	覆土	壺	口縁部～頸部	(9.8)			口縁部横方向のハケ目、縦方向のハケ目	ナデ	黄褐色 (10YR6/6)	にぶい褐色 (10YR6/4)	1 ～ 3mm の褐色粒を多く含む。	良好		

第 12 表　弥生土器観察表 5

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
97	SA7	覆土	壺	口縁部	(16.0)			横方向の工具ナデ	工具ナデ	灰褐色 (7.5YR5/2)	褐灰色 (10YR4/1)	1mm 以下の乳白色、褐色粒を多く含む。1mm 以下の半透明粒を少し含む。	良好		
98	SA7	覆土	壺	口縁部	(10.8)			横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	1mm 程の灰白、褐色粒を多く、2mm 程の灰白色粒を少し含む。	良好		
99	SA7	覆土	甕	口縁部				ナデ	ナデ、指押さえ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1mm 程の乳白色、灰白粒を多く含む。	良好		
100	SA7	覆土	甕	口縁部				ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	にぶい橙色 (10YR6/4)	にぶい橙色 (10YR7/3)	1 ～ 2mm の乳白色、灰色粒を多く、2 ～ 3mm の褐色、褐灰色粒を少し含む。	良好		
101	SA7	覆土	甕	口縁部				ナデ、指押さえ	縦方向のハケ目	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 2mm の灰白、褐色粒を少し含む。	良好		
102	SA7	覆土	壺	口縁部				口縁端部横方向のナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1mm 程の乳白、赤褐色粒を少し含む。	良好		
103	SA7	覆土	壺	口縁部				櫛描波状文、横ナデ	工具ナデ	褐灰色 (10YR4/1)	橙色 (7.5YR7/6)	1 ～ 3mm の灰色粒を少し含む。	良好		
104	SA7	覆土	壺	口縁部～胴部	(4.8)			口縁部横方向のナデ、胴部ミガキ	ナデ、指頭痕	黒 (2.5Y2/1)	黄灰色 (2.5Y4/1)	1 ～ 2mm の灰白、乳白、赤褐色粒を多く含む。	良好	内外面黒変	
105	SA7	覆土	壺	頸部				ミガキ、沈線	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	黄灰色 (2.5YR5/1)	1mm 程の灰白、浅黄色粒を多く含む。	良好		
106	SA7	覆土	壺	胴部～底部			(5.3)	縦、斜め方向のハケ目、底部付近指ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	にぶい黄橙色 (7.5YR7/3)	2mm 以下の橙色、1mm 以下の灰白粒を多く含む。	良好	外面一部黒変	SA4 ＋撹乱 2
107	SA7	覆土	高坏	脚部			(5.4)	ミガキ	ナデ	橙色 (5YR6/6)	黒褐色 (2.5Y3/2)	1 ～ 2mm の白色、明褐色粒を含む。	良好	外面黒斑	
108	SA7	覆土	壺	胴部～底部				風化のため調整不明	工具による粗いナデ	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 程の乳白、灰白、褐色粒を多く含む。	良好	外面一部黒変	
109	SA7	覆土	壺	胴部～底部			(2.4)	縦方向のハケ目のち ミガキ、底部付近ミガキ	ナデ	橙色 (5YR6/8) 明赤褐色 (2.5YR5/8)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1 ～ 3mm の黒色粒、1 ～ 2mm の灰色粒を多く、1mm の白色粒を少し含む。	良好	外面底部付近黒変	
110	SA7	覆土	甕	底部			(4.7)	工具ナデ	指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	暗褐色 (10YR3/4)	1 ～ 3mm の乳白色、褐色粒を多く含む。	良好		
111	SA7	覆土	壺	胴部～底部			(2.3)	横方向のミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい橙色 (5YR6/6)	1 ～ 3mm の灰白色粒を多く含む。1 ～ 2mm の明褐色粒を少し含む。	良好	籾圧痕有り、外面黒変	

第 13 表　弥生土器観察表 6

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
123	SA8	覆土	壺	口縁部～頸部	21.3			複合口縁部は櫛描波状文、頸部は縦方向のハケ目、斜位の刻目文の１条の貼付突帯	複合口縁部は横ナデ、横方向の工具ナデ	黄橙色 (7.5YR7/8)	橙色 (7.5YR7/8) 明黄橙色 (10YR7/6)	1 ～ 3mm の白色、灰色粒、1mm 以下の黒色粒を多く、1 ～ 2mm の褐色粒を少し含む。	良好	外面一部黒変	
124	SA8	覆土	甕	口縁部				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 以下の乳白色粒を含む。	良好		
125	SA8	覆土	甕	口縁部				ハケ目のちナデ	横方向のハケ目	黒褐色 (10YR3/1)	灰黄褐色 (10YR4/2)	2mm 以下の灰白、にぶい橙色粒を少し含む。	良好	外面スス付着	
126	SA8	覆土	高坏	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	灰白色 (2.5Y8/2)	1mm 以下の灰白色粒を含む。	良好		
127	SA8	覆土	高坏	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	灰白色 (10YR8/2)	1mm 程の赤褐色粒を含む。	良好		
128	SA8	覆土	壺	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	黄灰色 (2.5YR5/1)	黄灰色 (2.5YR5/1)	1mm 以下の乳白、赤褐色、灰白色粒を多く含む。	良好		
129	SA8	覆土	壺	口縁部				指突文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 以下の灰白色粒をわずかに含む。	良好		
130	SA8	床	高坏	坏部	(25.4)			上部縦、横方向のハケ目、下部はハケ目のちミガキ	上部横方向のハケ目、下部ハケ目のちナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1 ～ 3mm の乳白、褐色粒を含む。	良好	外面一部スス付着	
131	SA8	覆土	壺	胴部～底部			3.0	ハケ目のち縦方向のミガキ、底部付近ケズリ	斜め方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1mm 程の乳白、褐色粒を含む。	良好		
132	SA8	床、地床炉	甕	口縁部～底部	20.0	30.1	3.4	工具ナデ	工具ナデ、指頭痕	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1 ～ 3mm の灰色、赤褐色、乳白色粒を非常に多く含む。	良好	外面スス付着	
133	SA8	覆土	甕	底部				工具ナデ	ナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1 ～ 3mm の乳白、灰白色粒を多く含む。	良好	外面黒変	
134	SA8	地床炉	小甕	底部				指ナデ、ナデ	縦方向のハケ目	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	3mm 以下の乳白色、2mm 以下の灰色粒を含む。	良好		
136	SA9	土坑２	甕	胴部～底部			4.9	風化のためはっきりしないが、工具ナデ	胴部風化のため調整不明、底部付近ナデ、指押さえ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR6/6) 明黄褐色 (10YR7/6)	1 ～ 7mm の灰白色、1 ～ 2mm の灰色粒を多く、1 ～ 3mm 褐色、1mm 以下の黒色透明粒を少し含む。	良好		SA8
137	SA9	覆土	壺	口縁部	(14.5)			工具ナデ、櫛描波状文	風化のため調整不明	淡黄色 (2.5YR8/3)	淡黄色 (2.5YR8/3)	1mm 以下の乳白色粒を含む。	良好		
138	SA9	土坑２	鉢	口縁部				口唇部横ナデ、ミガキ	ミガキ	明黄褐色 (10YR7/6)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1mm 程の灰白、乳白色粒を少し含む。	良好		

第 14 表　弥生土器観察表 7

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
139	SA9	土坑 2	鉢	口縁部				口唇部横ナデ、ミガキ	横、斜め方向のハケ目	黒褐色 (10YR3/2)	灰黄褐色 (10YR4/2)	3mm 以下の灰白色粒を含む。1mm 程の半透明粒を少し含む。	良好		
142	SA10	覆土	甕	口縁部～胴部	(27.0)			口縁部横方向のナデ、頸部縦方向のハケ目、胴部横、斜め方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、頸部横方向のハケ目、指頭痕、胴部横方向の工具ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	3mm 以下の浅黄橙色、1mm 以下の褐灰色粒を含む。	良好		撹乱 1 ＋ 撹乱 2
143	SA10	覆土	壺	口縁部～底部	(12.6)			口縁部ナデ、斜め方向のハケ目、指押さえ	口縁部ナデ、斜め方向のハケ目、指押さえ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm 以下の灰白、淡黄、褐色粒を含む。	良好		
144	SA10	覆土	甕	口縁部				工具ナデ、ナデ	口縁部横方向の工具ナデ、ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2.5mm 以下の赤褐色、1mm 以下の乳白色粒を含む。	良好		
145	SA10	覆土	壺	口縁部				ナデ、穿孔あり	ナデ	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	1mm 以下の褐色、褐灰色、乳白色、微細な黒色粒を少し含む。	良好		
146	SA10	覆土	壺	頸部				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	3mm 以下のにぶい黄橙、1mm 以下の灰白色、灰黄褐色粒を含む。	良好		
147	SA10	覆土	壺	口縁部～底部				口唇部横方向のナデ、工具ナデ、縦方向のハケ目	工具ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1mm 程の乳白色、褐色、灰白色粒を多く含む。	良好		
148	SA10	覆土	甕	口縁部～底部	14.2	15.8	3.8	口縁部ナデ、工具ナデ	口縁部ナデ、工具ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR6/6)	2mm 以下のにぶい橙、微細な赤褐色粒を含む。	良好	外面黒変	
149	SA10	覆土	壺	胴部～底部			(4.8)	縦方向のハケ目	胴部斜め方向のハケ目、胴部付近不定方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 3mm の乳白色粒を多く、1 ～ 2mm の灰色粒を少し含む。	良好		
150	SA10	覆土	高坏	坏部				縦、横方向の丁寧なミガキ、縦方向のハケ目	縦、横方向の丁寧なミガキ	橙色 (7.5YR7/6)	黒褐色 (2.5Y3/1)	1 ～ 2mm の乳白色、褐色、灰白色粒を多く含む。	良好		
151	SA10	覆土	鉢	口縁部～底部	(12.3)	8.6	(4.0)	ミガキ、底部付近縦方向のハケ目	口縁部工具ナデ、胴部風化のため調整不明	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1 ～ 3mm の乳白色、灰色粒を含む。1mm 程の褐色粒を少し含む。	良好		
152	SC1	覆土	甕	口縁部～胴部	22.6			口縁部横方向のナデ、胴部横、斜め方向のハケ目	口縁部横方向のハケ目、胴部ハケ目のちナデ	にぶい橙色 (5YR6/4)	橙色 (2.5YR6/6)	3mm 以下のにぶい黄橙、黒色、1mm 以下の灰白色粒を含む。	良好		
153	SC1	覆土	甕	口縁部～胴部				口縁部横方向のナデ、頸部に刻目のある突帯、胴部縦方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、横方向のハケ目	灰黄色 (2.5Y7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1 ～ 5mm の灰白、1 ～ 2mm 褐色、乳白色粒を多く含む。	良好		
154	SC1	覆土	壺	口縁部				口唇部横方向のハケ目、櫛描波状文	横方向のナデ	黒褐色 (2.5Y3/1)	黒褐色 (2.5Y3/1)	1mm 以下の乳白、灰白色粒を含む。	良好		
155	SC1	覆土	甕	口縁部～底部	(20.4)	20.4	(3.0)	部分的にハケ目	指押さえ、ナデ	黄褐色 (10YR6/6)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	1 ～ 2mm の明灰色粒を多く含む。1 ～ 3mm 灰白色粒を少し含む。	良好		

第 15 表　弥生土器観察表８

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
156	SC1	覆土	甕	胴部～底部			(7.3)	縦方向のハケ目、底部指押さえ	風化しているが、おそらくナデ	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/6)	2mm 以下の褐灰、灰白、1mm 以下の乳白色粒を含む。	良好		
157	SC1	覆土	高坏	脚部			(4.6)	指押さえ	指押さえ	黄灰色 (2.5YR4/1)	黄灰色 (2.5YR4/1)	1 ～ 2mm の乳白色粒を少し含む。	良好		
158	SC1	覆土	甕	底部			(6.2)	ナデ、底部指押さえ	ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 程の乳白色、灰白色、半透明粒を少し含む。	良好		
159	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	25.6			縦方向のハケ目	縦、横方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1 ～ 2mm の乳白色、灰白、褐色粒を多く含む。	良好	内外面風化している。	
160	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	(24.6)			口縁部横方向のナデ、胴部横、斜め方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、頸部工具ナデ、指頭痕、胴部ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	2mm 以下の橙、乳白色、褐色粒を多く含む。	良好	外面にスス付着	
161	包含層	Ⅱ層	甕	頸部～底部			(4.1)	頸部縦方向のハケ目、胴部斜め方向のハケ目、底部付近風化のため調整不明	頸部指頭痕、胴部上部丁寧なナデ、下部工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 2mm の乳白、褐色、灰白色粒を多く含む。	良好		
162	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	(24.4)			口縁部横方向のナデ、縦方向のハケ目のちナデ	口縁部横方向のナデ、斜め方向のハケ目のちナデ、下半ナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR(6/8) にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1 ～ 3mm の白色粒を多く、2 ～ 3mm の灰色、灰色半透明粒を少し含む。	良好	外面スス付着、黒変	
163	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	(20.2)			口縁部横方向のナデ、縦、横方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、指頭痕、胴部丁寧なナデ	橙色 (7.5YR6/6)	明褐色 (7.5YR5/8)	1mm の乳白色粒を含む。	良好		
164	包含層	Ⅱ層	甕	胴部～底部			(7.0)	縦、斜め方向のハケ目、底部付近指押さえ	縦、横方向のハケ目	にぶい褐色 (7.5YR5/4) 黒褐色 (7.5YR3/1)	黒褐色 (7.5YR3/1)	1 ～ 2mm の灰白粒を多く、2mm 程の灰色粒を少し含む。	良好	内面黒変	
165	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部				横ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm 以下の乳白色、灰白、灰色粒を多く含む。2mm 程の無色半透明粒を少し含む。	良好		
166	包含層	Ⅱ層	鉢	口縁部				工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	3mm 以下の灰白、褐色粒を含む。	良好		
167	包含層	Ⅱ層	高坏	口縁部				縦方向のハケ目	横方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1mm 以下の乳白色、灰白、褐色粒を含む。	良好		
168	包含層	Ⅱ層	高坏	口縁部				口唇部横方向のナデ、ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm 以下の乳白色、灰白色粒を少し含む。	良好		
169	包含層	Ⅱ層	甕	口縁部～胴部				口唇部横方向のナデ、ナデ	横、斜め方向のハケ目	橙色 (7.5YR6/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	1 ～ 2mm の乳白色、灰白色粒を多く含む。	良好	外面にスス付着	
170	包含層	Ⅱ層	壺	口縁部				風化のため調整不明	ナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	浅黄色 (2.5Y8/3)	2mm 以下の灰色、褐色、乳白色粒を多く含む。	良好		

第 16 表　弥生土器観察表９

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
171	包含層	Ⅱ層	壺	口縁部				ハケ目	ハケ目	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	1mm 以下の灰白色粒を含む。	良好		
172	包含層	Ⅱ層	壺	口縁部				櫛描波状文、ナデ	横ナデ	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	2mm 以下の灰白、微細な灰白色粒をわずかに含む。	良好		
173	包含層	Ⅱ層	甕	底部			(10.7)	ナデ	ナデ	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	3mm 以下の褐灰、灰白色粒を多く含む。	良好		
174	包含層	Ⅱ層	甕	胴部～底部			(3.4)	ナデ、底部指押さえ	縦、横方向の工具ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR6/6)	1mm 程の褐色、乳白色粒を多く含む。	良好	外面一部黒変	
177	撹乱 1		甕	口縁部～底部	19.3	27.3	4.8	口縁部横方向のナデ、胴部上半縦方向のハケ目、下半工具ナデ、底部横方向のナデ	口縁部横方向のナデ、胴部上半縦方向のハケ目、下半工具ナデ、底部ナデ	橙色 (5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 2mm の灰白、乳白色粒を多く含む。	良好	外面口縁部付近にスス付着	撹乱 2
178	撹乱 2		甕	口縁部～底部	23.2	28.0		口縁部横方向のナデ、胴部縦方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、指頭痕、胴部横方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1 ～ 3mm の灰白、灰色、褐色粒を多く含む。	良好		
179	撹乱 3		甕	口縁部～胴部	(20.8)			口縁部横方向のナデ、胴部縦、斜め方向のハケ目、工具ナデ	口縁部横方向のナデ、胴部斜め方向のハケ目	明黄橙色 (10YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1 ～ 2mm の白色、褐色、灰色透明粒を含む。	良好	外面スス付着、黒変	
180	撹乱 1		甕	口縁部～胴部	(18.6)			口縁部横方向のナデ、ハケ目のちナデ	口縁部横方向のナデ、ハケ目のちナデ	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 橙色 (5YR6/6)	1 ～ 4mm の白色、1 ～ 2mm の灰色透明粒を多く含む。	良好		
181	撹乱 1		甕	口縁部～底部	(16.6)	15.6	(4.6)	口縁部ナデ、胴部縦方向のハケ目	口縁部ナデ、胴部斜め方向のハケ目、底部ナデ	黄橙色 (10YR5/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	2mm 以下の灰白、褐色粒を多く含む。	良好		
182	撹乱 2		甕	口縁部～胴部	(33.4)			刻目突帯	風化のため調整不明	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄色 (2.5Y7/4)	1 ～ 2mm の淡黄色、1 ～ 5mm の褐色粒を多く含む。	良好	内外面風化している。	
183	撹乱 3		甕	胴部～底部			6.8	斜め方向のハケ目	縦、斜め方向のハケ目	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄色 (2.5Y7/4)	1 ～ 3mm の明灰色、淡黄橙粒を多く含む。	良好	内外面風化している。	
184	撹乱 1		甕	口縁部～底部	11.6	13.6	4.8	口縁部横方向のナデ、縦方向のハケ目、底部横方向のナデ	風化のため調整不明	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	2mm の乳白色、1 ～ 2mm の褐色粒を多く含む。	良好		
185	撹乱 1		甕	頸部～底部			(5.0)	頸部ナデ、胴部縦方向のハケ目、底部ナデ、指押さえ	頸部ナデ、胴部斜め方向のハケ目、底部ナデ	明赤褐色 （5YR5/6）	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 3mm の灰白、浅黄粒を多く含む。1 ～ 2mm の灰色透明粒を少し含む。	良好		
186	撹乱 2		甕	頸部～底部			5.2	ナデ	頸部横方向のハケ目、ナデ、胴部工具ナデ	橙色 (5YR6/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	1 ～ 2mm の白色、灰色粒を多く含む。	良好	頸部付近スス付着	
187	撹乱 2		甕	胴部～底部			(6.2)	風化しているが、ミガキか	風化しているが、ハケ目か	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	4mm 以下の灰白、2mm 以下の黒褐色粒を含む。	良好	内外面風化している。	

第 17 表　弥生土器観察表 10

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
188	撹乱 1		甕	胴部～底部			(7.2)	縦方向のハケ目、底部指押さえ	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 4mm の灰色、1 ～ 2mm 黒色、白色粒を含む。1 ～ 2mm 赤褐色粒を少し含む。1mm 以下の黒色光沢粒を少し含む。	良好	内面黒変	
189	撹乱 3		甕	胴部～底部			(6.6)	縦方向のハケ目、底部横方向のナデ	ナデ、底部指押さえ	黄灰色 (2.5Y4/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm 程の乳白色、灰白、赤褐色粒を多く含む。	良好		
190	撹乱		甕	底部			3.3	工具ナデ	ナデ	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	2mm 以下の灰白、にぶい褐色粒を含む。	良好		
191	撹乱 3		甕	胴部～底部			5.6	縦方向の工具ナデ、底部横方向のナデ	指ナデ、底部ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm 以下の乳白色、褐色、灰白粒を多く含む。	良好		
192	撹乱		甕	胴部～底部			3.3	ナデ	ナデ	黒褐色 (10YR3/2)	黒褐色 (10YR3/1)	2mm 以下の浅黄色、1mm 以下のにぶい橙色粒を多く含む。	良好		
193	撹乱 3		甕	胴部～底部			(6.0)	縦方向のハケ目、底部ナデ	工具ナデ	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1 ～ 2mm の乳白色、褐色、灰色半透明粒を多く含む。	良好	外面風化している。	
194	撹乱 3		甕	底部			(4.6)	指ナデ、底部ナデ	不定方向のハケ目	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1 ～ 2mm の灰白、褐色粒を多く含む。	良好		
196	撹乱 2		甕	口縁部～胴部	(19.0)			口縁部横方向のナデ、胴部縦方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、胴部斜め方向のハケ目	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	橙色 (7.5YR6/6)	1mm 程の灰白、乳白色、褐色粒を多く含む。	良好		
197	撹乱		甕	口縁部～胴部				口縁部部斜め方向の工具ナデ、胴部ナデ	ナデ	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	4mm 以下の灰白、2mm 以下のにぶい褐色粒を含む。	良好	外面スス付着	
198	撹乱 3		壺	口縁部～胴部	(24.4)			風化しているが、ハケ目か	風化しているが、ハケ目か	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	1 ～ 4mm の褐色、灰色粒を多く、1mm 程の白色粒を少し含む。	良好	内外面風化している。	
199	撹乱 3		壺	胴部～底部			(6.6)	風化しているが、ハケ目のちミガキか	縦方向のハケ目	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	灰黄色 (2.5Y7/2)	2mm 以下の灰白、褐灰、灰褐色粒を多く含む。	良好	内外面風化している。	
200	撹乱 1		壺	口縁部～底部	8.5	25.5	3.8	口縁部横方向のナデ、胴部縦方向のハケ目のちミガキ	口縁部横方向のナデ、頸部指頭痕、胴部工具ナデ、底部ナデ	褐色 (5YR6/6)	明褐色 (7.5YR5/6)	1 ～ 3mm の白色粒を多く含む。1mm 以下の無色透明粒を少し含む。	良好	外面黒変	
201	撹乱 3		壺	口縁部～胴部	(9.8)			風化しているが、ミガキか	工具ナデ	にぶい黄橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (7.5YR7/3)	1 ～ 3mm の灰白、褐色粒を多く含む。	良好	外面風化している。	
202	撹乱 2		壺	頸部～胴部				ミガキ、屈曲部に突帯	頸部ナデ、指頭痕、胴部斜め方向のハケ目	橙色 (7.5YR6/6)	褐灰色 (10YR4/1)	1 ～ 3mm の褐色、黒色粒を含む。1 ～ 2mm の白色粒を少し含む。	良好		撹乱 3
203	撹乱 3		壺	胴部				口縁部指頭痕、胴部風化しているがミガキか	工具ナデ	橙色 (2.5YR6/8)	橙色 (7.5YR7/6)	3mm 以下の灰白、黒褐色、橙色粒を多く含む。	良好	外面風化している。	

第 18 表　弥生土器観察表 11

図面番号	出土位置	出土地点	器種	部位	法量（ｃｍ）			手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	接合関係
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
204	撹乱 2		壺	胴部～底部			(6.3)	ミガキ	斜め方向のハケ目	橙色 (5YR6/6)	黄灰色 (2.5YR5/1)	1 ～ 2mm の黒色、1 ～ 3mm の灰色、褐色粒を含む。	良好		撹乱 3
205	撹乱 1		壺	胴部～底部			(2.9)	工具ナデ	ハケ目	黒褐色 (2.5Y3/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2mm 以下の灰白、褐灰色 ,1mm 以下のにぶい黄橙色、微細な黒色光沢粒を含む。	良好		
206	撹乱 2		壺	口縁部～頸部	10.2			口縁部横方向のナデ、頸部縦方向のハケ目のちミガキ	横方向のナデ、指頭痕	明赤褐色 (5YR5/8)	明黄褐色 (10YR7/6)	1mm 以下の白色、1 ～ 2mm の灰色半透明粒を多く含む。	良好		
207	位置不明		壺	頸部～胴部				ナデ	胴部上部ナデ、下部工具ナデ	淡黄色 (2.5Y8/3)	灰白色 (2.5Y8/2)	1 ～ 3mm の褐色、灰白、灰色粒を多く含む。	良好		
208	撹乱 1		高坏	口縁部～底部	27.5	15.8	12.0	ハケ目のちミガキ、裾部ナデ	坏部ミガキ、脚部横方向のナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	3 ～ 4mm の灰白、乳白色粒を含む。	良好		撹乱 2
209	撹乱 2		高坏	口縁部～底部	22.7	18.9	(13.7)	坏部上部ハケ目のちナデ、下部ハケ目のちミガキ、脚部調整不明	風化しているが、ミガキと思われる。脚部ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (5YR7/8)	1 ～ 4mm の浅黄色粒を多く含む。	良好	内外面風化している。	
210	撹乱 2		高坏	口縁部～裾部	20.0	17.9		風化しているが口縁部ナデ、坏部ハケ目、ミガキ、脚部ミガキ、裾部ナデか	風化しているがミガキ、脚部ナデ、裾部ハケ目か	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	2mm 以下の灰白、褐灰色粒を含む。	良好	内外面風化している。	
211	撹乱 1		高坏	坏部	(24.2)			上部縦方向のハケ目、下部ミガキ	縦方向のハケ目	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1 ～ 2mm の浅黄色、明灰色粒を含む。	良好	風化している。	撹乱 2
212	撹乱 2		高坏	坏部	(23.8)			口縁部ナデ、坏部縦方向のハケ目	口縁部横方向のナデ、坏部丁寧なナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	明黄褐色 (10YR6/6)	1mm の褐色、1 ～ 2mm 白色半透明粒を含む。	良好		
213	撹乱		鉢	口縁部～胴部	(14.8)			口縁部斜め方向のハケ目のちナデ、胴部上部縦方向のハケ目、下部指ナデ	口縁部ナデ、指頭痕、胴部工具ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (10YR6/3)	2mm 以下の灰白、乳白色、1mm 以下の黒色光沢粒を多く含む。	良好		
214	撹乱 1		鉢	口縁部～底部	14.3	10.1	3.5	口縁部横方向のナデ、縦方向のハケ目、底部付近工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	橙色 (7.5YR7/6)	1 ～ 3mm の白色粒を多く含む。2 ～ 3mm の褐色粒を少し含む。	良好	外面口縁部付近スス付着	
215	撹乱 2		鉢	口縁部～胴部	(24.6)			口唇部横方向のナデ、坏部ハケ目のちミガキ	口縁部縦方向のハケ目	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (5YR6/8)	1 ～ 2mm の黒色、1 ～ 3mm の褐色粒を多く含む。1 ～ 3mm の褐色、灰色、白色粒を少し含む。	良好	内外面風化している。	撹乱 3
216	撹乱 1		壺	口縁部～底部	7.6	7.9	2.8	口縁部横方向のナデ、胴部ミガキ、底部ナデ	ナデ	明褐色 (7.5YR5/6)	褐色 (7.5YR4/6)	1mm 以下の褐色乳、白色、黒色粒を含む。	良好	外面底部付近黒斑あり	
217	撹乱 2		手捏土器	口縁部～底部	7.1	5.3	1.9	指ナデ	工具ナデ	黄褐色 (10YR5/6)	明褐色 (7.5YR5/6)	1mm 以下の浅黄色、明灰色粒を多く含む。	良好	底部付近スス付着	
218	撹乱 2		高坏	脚部			(19.8)	ミガキ、裾部横方向のナデ	斜め、横方向のハケ目のちナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	1 ～ 3mm の灰色、褐色粒を多く含む。1 ～ 2mm の黒色粒を少し含む。	良好		

第 19 表　弥生時代石器計測表

図面番号	器種	出土位置	出土地点	石材	最大長（ｃｍ）	最大幅（ｃｍ）	最大厚（ｃｍ）	重量（ｇ）	備考
18	石庖丁	SA1	覆土	ホルンフェルス	4.8	8.1	0.9	61.9	
37	石錘	SA4	覆土	ホルンフェルス	4.1	4.5	1.3	26.5	
38	砥石	SA4	覆土	シルト岩	6.8	1.8	0.7	12.0	
39	砥石	SA4	覆土	シルト岩	6.6	2.4	2.8	69.3	
40	砥石	SA4	床	シルト岩	14.5	3.8	1.4	122.3	
41	磨石	SA4	覆土	尾鈴山酸性岩類	11.5	9.5	4.0	720.6	
42	磨石	SA4	覆土	尾鈴山酸性岩類	11.1	10.4	5.4	926.2	
43	磨石	SA4	覆土	尾鈴山酸性岩類	10.2	9.9	4.6	709.7	
44	磨石	SA4	床	尾鈴山酸性岩類	13.3	11.0	4.8	970.3	
45	台石	SA4	床	尾鈴山酸性岩類	9.6	18.5	7.4	1561.8	
59	磨製石鏃	SA5	土坑 1	ホルンフェルス	4.8	2.7	0.3	5.4	
60	石庖丁未製品	SA5	床	ホルンフェルス	5.0	10.5	0.9	89.2	
61	砥石	SA5	床	シルト岩	7.6	3.3	1.4	42.5	
62	砥石	SA5	床	粘板岩	7.2	3.3	2.9	127.3	
63	砥石	SA5	床	シルト岩	9.1	4.4	1.1	70.1	
64	砥石	SA5	床	シルト岩	10.7	3.9	2.9	158.4	
65	磨石	SA5	床	尾鈴山酸性岩類	11.6	10.4	5.6	1042.0	
90	石庖丁	SA7	床	ホルンフェルス	4.6	10.2	1.0	52.7	
91	石庖丁	SA7	床	ホルンフェルス	4.7	9.5	1.0	56.4	
92	砥石	SA7	土坑 1	粘板岩	6.1	2.5	1.3	17.5	
93	磨石	SA7	床	砂岩	5.9	5.1	2.6	117.2	
112	石庖丁	SA7	覆土	ホルンフェルス	4.3	11.1	0.7	43.0	
113	石庖丁	SA7	覆土	ホルンフェルス	4.0	7.3	0.7	34.0	
114	石庖丁	SA7	覆土	ホルンフェルス	2.6	2.8	0.3	2.2	
115	石庖丁	SA7	覆土	ホルンフェルス	1.9	3.1	0.4	4.6	
116	石庖丁未製品	SA7	覆土	ホルンフェルス	5.4	4.6	0.9	30.2	
117	二次加工剥片	SA7	覆土	尾鈴山酸性岩類	8.0	5.1	2.7	92.7	
118	砥石	SA7	覆土	シルト岩	9.3	4.1	1.6	64.3	
119	剥片	SA7	覆土	ホルンフェルス	4.9	8.3	1.0	57.0	
120	砥石	SA7	覆土	緑色砂岩	8.5	6.7	3.3	230.3	
121	敲石	SA7	覆土	砂岩	12.1	3.8	2.8	177.7	
122	砥石	SA7	覆土	砂岩	11.1	9.0	4.5	598.3	
135	磨石	SA8	床	尾鈴山酸性岩類	11.5	10.1	5.7	992.5	
140	石庖丁未製品	SA9	床	ホルンフェルス	5.4	9.1	1.1	74.2	
141	磨石	SA9	床	尾鈴山酸性岩類	12.5	11.0	6.1	1212.6	
175	磨石	包含層	Ⅱ層	尾鈴山酸性岩類	11.6	10.4	6.0	1072.9	
176	敲石	包含層	Ⅱ層	ホルンフェルス	12.8	10.1	7.6	1428.7	

第６節　時期不明の遺構

A-1 区、Ｂ区のⅢ層上面で溝状遺構が 14 条検出された。A-1 区で７条、Ｂ区で７条検出している。

（１）A-1区溝状遺構（第48図・第49図）

A-1 区で検出された溝状遺構は、東西方向が４条、南北方向に３条あり、そのうち幾筋かは切り合いの関係にある。ＳＥ１は幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.3 mであり、ＳＥ３は幅 0.3 ～ 0.5、深さ 0.4 mを測る。ＳＥ２、ＳＥ４～ＳＥ７は、幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.3 mである。埋土は黒色土を主体とした埋土で、K-Ah や橙色砂粒を含んでいる。埋土中から遺物の出土はなく、時期については不明である。切り合い関係は、ＳＥ１がＳＥ４を切っている。ＳＥ２～ＳＥ４については、ＳＥ３がＳＥ２の上になるように切っており、ＳＥ２は、ＳＥ４に切られている。ＳＥ６はＳＥ７を切っている。

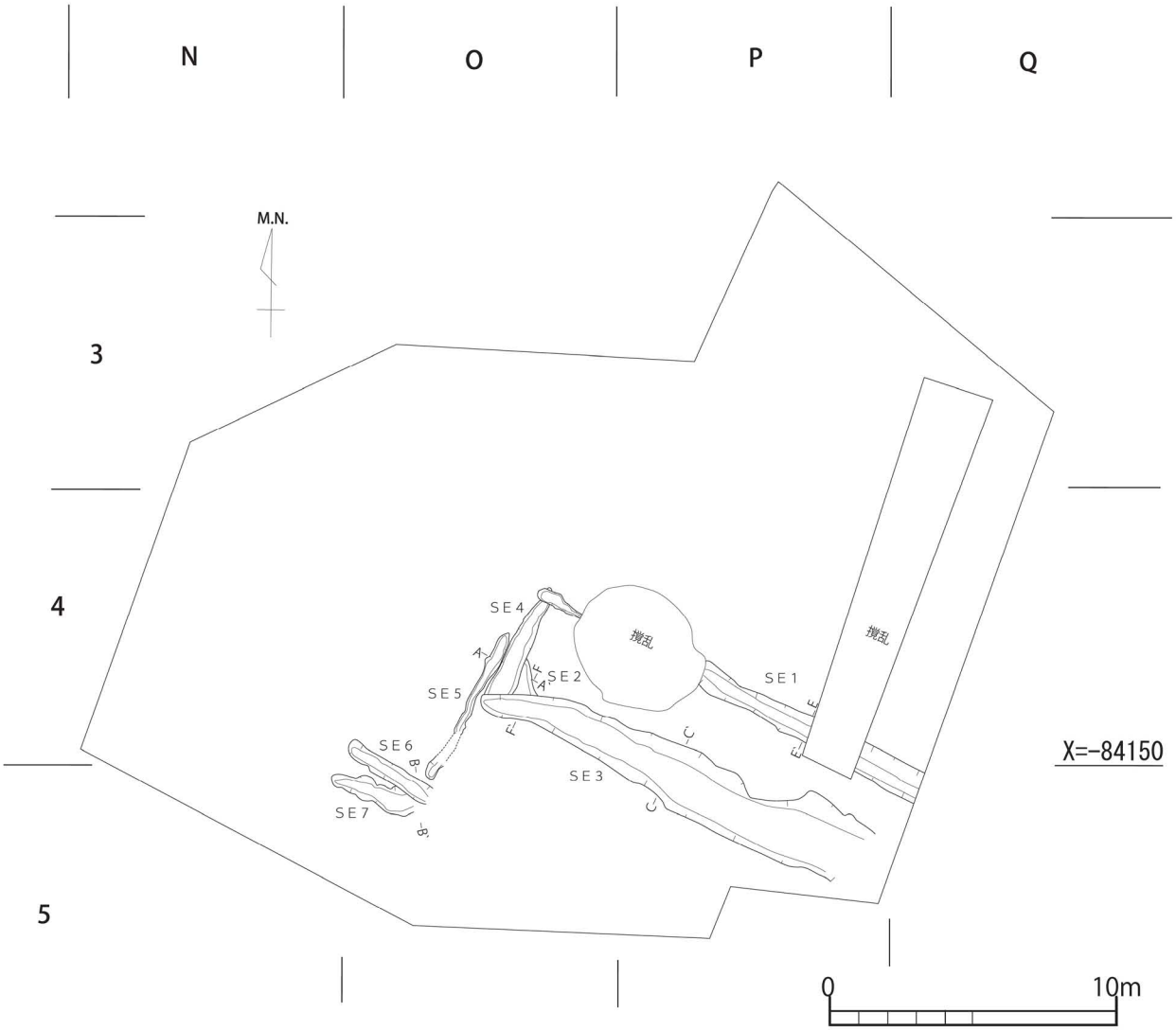
以上のことから、A-1 区で検出された溝状遺構の先後関係は、古いほうからＳＥ２、ＳＥ４となり、ＳＥ１とＳＥ３については、ＳＥ２・４より新しくなる。またＳＥ１～４とＳＥ５～７の関係は切り合い関係がなく不明である。

（２）Ｂ区溝状遺構（第50図・第51図）

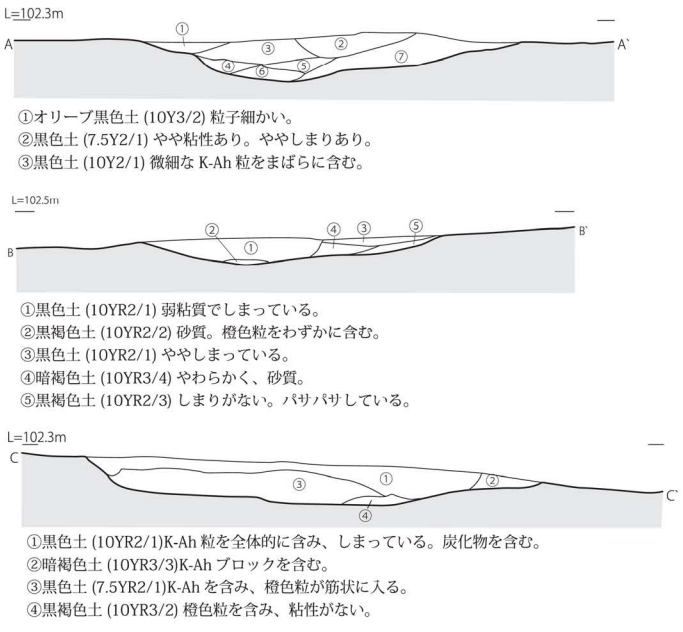
東西方向に５条、南北方向に２条の溝状遺構が検出され、ＳＥ８は幅 1.5 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mを測り、他は幅１m程度、深さ 0.2 m程である。黒色土を主体とした埋土でわずかに K-Ah 粒を含む。遺物は、ＳＥ８で陶磁器が１点、土器片が数点出土しており、ＳＥ 13・14 では弥生土器片がわずかに出土しているのみである。出土した弥生土器片はいずれも小片でかつ摩滅しており、図化できるものではなかった。また溝の埋没時期を特定できるものもなく、唯一ＳＥ８から出土した陶磁器片は近代のものである。

溝状遺構の切り合い関係は、ＳＥ８はＳＥ９・10･14を切っており、ＳＥ 12･13に切られている。またＳＥ 12・13 は東側で１条となり、ＳＥ 11 に切られている。

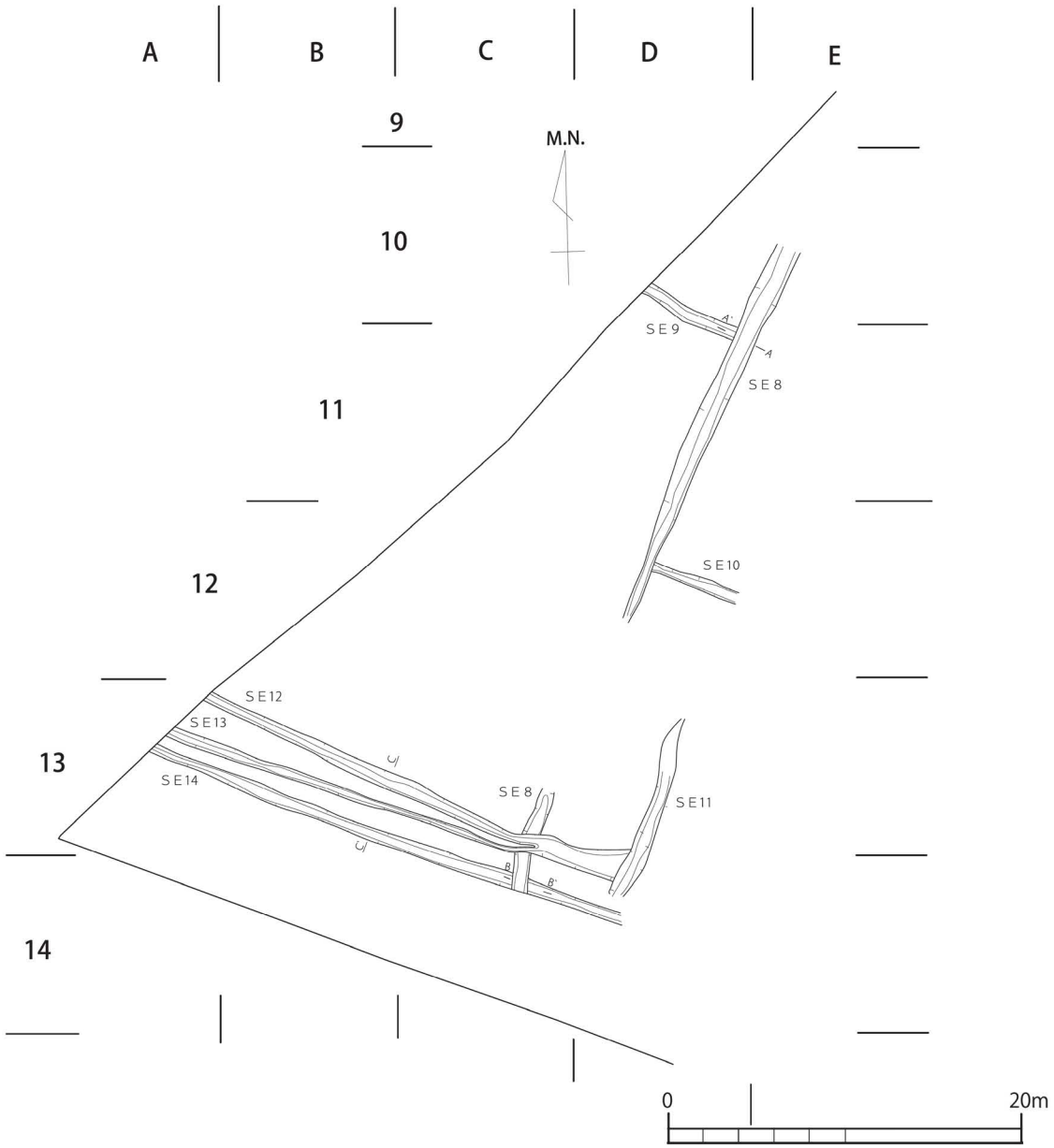
時期については、出土した弥生土器片はいずれも小片であり摩耗していることから、後世の混入と考えられ、さらに出土した遺物も少ないことから時期は不明である。



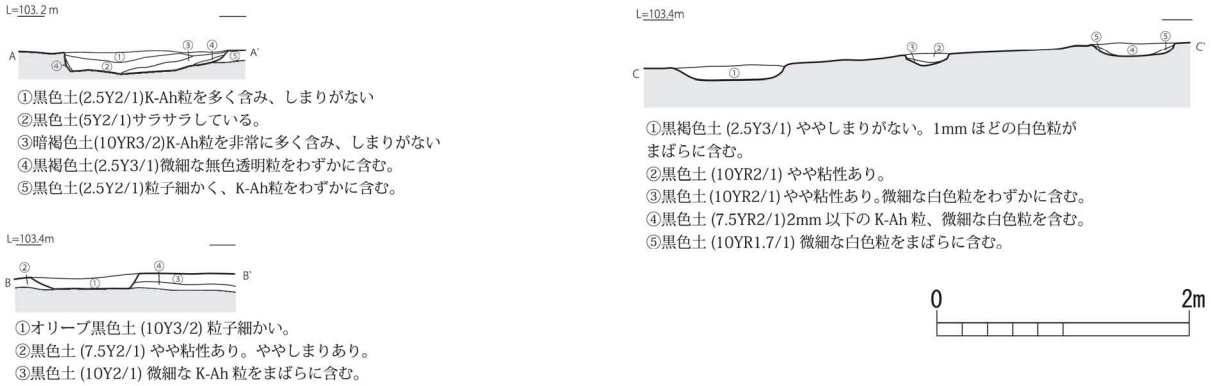
第 48 図　A-1 区 SE1 ～ 7 分布図　(1/250)



第 49 図　A-1 区ＳＥ１～７土層断面図 (1/60)



第 50 図　B 区 SE8 ～ 14 分布図　(1/400)



第 51 図　B 区 SE8 ～ 14 土層断面図 (1/60)

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　目的

本遺跡では縄文時代草創期の集石遺構１基と弥生時代の竪穴住居跡９軒が検出された。集石遺構からは遺物の出土はなく、周辺で同層位から出土した土器から時期を推定している。そのため遺構内から検出した炭化物を放射性炭素年代測定することによって、科学的データを得ることができる。

また、弥生時代の竪穴住居跡では、３軒の焼失住居が検出され、多くの炭化材が検出された。その中で屋根材に使用された茅と推測されるストロー状の炭化物があり、その種類を特定するために、樹種同定及び植物珪酸体分析を行った。さらにフローテーションで得られた炭化種子の種実同定を実施した。これらのことにより住居の屋根材や食糧事情に迫ることができる。

以上のような理由から自然科学分析を株式会社古環境研究所に業務委託した。

第２節　放射性炭素年代測定

（１）試料と方法

①ＳＩ１埋土中炭化物

前処理：酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄

測定法：AMS

②ＳＩ１外側検出の炭化物

前処理：酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄

測定法：AMS

③ＳＡ４-15　　炭化種実（イネ）

前処理：酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄

測定法：AMS

④ＳＡ７-26　　炭化種実（イチイガシ）

前処理：酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄

測定法：AMS

（２）測定結果

①ＳＩ１埋土中炭化物

^{14}C年代（年BP）　11,430±60

δ^{13}C（‰）　-27.1

補正^{14}C年代（年BP）　11,400 ± 60

暦年代（西暦）

交点：cal BC 11,460

１σ：cal BC 11,820-11,740、11,530-11,210

２σ：cal BC 11,840-11,720、11,500-11,200

（１σ:68％確率，２σ:95％確率）

②ＳＩ１外側検出の炭化物

^{14}C年代（年BP）　11,320±60

δ^{13}C（‰）　-25.8

補正^{14}C年代（年BP）　11,310 ± 60

暦年代（西暦）

交点：cal BC 11,230

１σ：cal BC 11,500-11,200

２σ：cal BC 11,810-11,750、11,520-11,180

BC 11,140-11,080

（１σ:68％確率，２σ:95％確率）

③ＳＡ４-15　　炭化種実（イネ）

^{14}C年代（年BP）　1960±40

δ^{13}C（‰）　-23.2

補正^{14}C年代（年BP）　1990 ± 40

暦年代（西暦）

交点：cal AD 20

１σ：cal AD 40-60

２σ：cal BC 30- AD 90

（１σ:68％確率，２σ:95％確率）

④ＳＡ７-26　　炭化種実（イチイガシ）

^{14}C年代（年BP）　1950±40

δ^{13}C（‰）　-25.9

補正^{14}C年代（年BP）　1940±40

暦年代（西暦）

交点：cal AD 70

１σ：cal AD 30-100

２σ：cal BC 30- AD 130

（１σ:68％確率，２σ:95％確率）

（２）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（３）デルタδ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（4）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

（5）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。INTCAL98では、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1シグマσ（68％確率）と2σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

第3節　樹種同定

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試料

試料は、縄文時代草創期の集石遺構（ＳＩ１）から採取された炭化材２点である。これらは、年代測定に用いられたものと同一試料である。なお、参考試料として弥生時代後期の住居跡（ＳＡ９）から採取された炭化材についても観察を行った。

（3）方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

①コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがある。北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15ｍ、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

②広葉樹　broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く広範囲の観察が困難なことから、広葉樹の同定にとどめた。

③タケ亜科　Bambusoideae　イネ科

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

（5）所見

分析の結果、縄文時代草創期の集石遺構（ＳＩ１）から採取された炭化材は、いずれもコナラ属コナラ節と同定された。コナラ属コナラ節には、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。なお、コナラ節の種実（ドングリ）は、水さらしや加熱処理などのアク抜きをしないと食用にならない。弥生時代後期の住居跡（ＳＡ９）から採取された炭化材は、広葉樹およびタケ亜科と同定された。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

第４節　植物珪酸体分析（灰像分析）

（1）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

（2）試料

試料は、弥生時代後期の住居跡（ＳＡ９）から採取された試料１と試料２の炭化材である。これらは、屋根材などの建築部材の一部と考えられる。

（3）分析法

電気炉灰化法（550℃・６時間）によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100～400倍の倍率で行った。なお、灰化物の内部を調べるために、灰像組織の一部を破壊して観察を行った。

（4）分析結果

灰像分析の結果、イネ科植物の茎部や葉鞘に由来する組織片が確認された。茎部や葉鞘に由来する植物珪酸体や灰像組織の研究は、これまであまり行われていないことから確実な同定は困難であるが、ここで検出されたものはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などのタケ亜科の茎部に類似している。また、メダケ属（メダケ節やネザサ節）の機動細胞に由来する植物珪酸体も多く観察された。これらは、試料となった炭化材に付着していたものと考えられる。

（5）考察

弥生時代後期の住居跡（ＳＡ９）から採取された炭化材は、メダケ属などのタケ亜科の茎部（葉鞘を含む）と考えられ、タケ亜科の茎（幹）が屋根材などの建築部材として利用されていたと推定される。なお、前述（第３節）のように、試料１には広葉樹の炭化材も含まれている。

第５節　炭化種実同定

（1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

（2）試料

試料は、弥生時代後期の住居跡（ＳＡ４、ＳＡ５、ＳＡ７、ＳＡ８、ＳＡ９）から分別採取された計117ケースである。

（3）方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（4）結果

分類群

分析の結果、樹木２、草本４の計６分類群が同定された。学名、和名および粒数を第Ⅳ章表３～７に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

イチイガシ　Quercus gilva Blume　子葉（炭化）ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

モモ　Prunus persica Batsch核（破片）バラ科

黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L.　果実　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。基部に針状の付属物を持つ。黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

アカネ科？　Rubiaceae？　種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。ここでは炭化の度合いが著しく、表面模様が観察できないことからアカネ科？とした。

キケマン属　Corydalis　種子　ケシ科

黒色の円形でやや扁平を呈す。へそ部分はやや凹み、仮種皮が残る。

不明種実

種実ではあるが炭化の度合いが著しく、表面模様が観察できないことから、不明種実とした。

不明植物遺体

種実の形態を示さず、炭化して表面模様が観察できないことから、不明植物遺体とした。

（5）種実群集の特徴

ＳＡ４

イネ３、カヤツリグサ科４、アカネ科？６、不明種実４が同定された。

ＳＡ５

アカネ科？２が同定された。

ＳＡ７

イチイガシ１、イネ１、アカネ科？８、不明種実１が同定された。

ＳＡ８

モモ１、アカネ科？ 11、不明種実１が同定された。

ＳＡ９

キケマン属 10、昆虫１が同定された。

（６）考察

弥生時代後期の竪穴住居跡（ＳＡ４、ＳＡ５、ＳＡ７、ＳＡ８、ＳＡ９）から分別採取された炭化種実では、イネ４、モモ１、イチイガシ１、キケマン属 10、カヤツリグサ科４、アカネ科？ 27 が同定された。栽培植物であるイネ、モモは共に大陸から伝来し、弥生時代以降多くの遺跡から出土する。有用植物であるイチイガシは、西南日本の照葉樹林を構成する主要高木で、果実はカシ類の中で渋抜きなしに食べられる唯一の種類である。キケマン属は人里植物ないし畑作雑草であり、多少薬用等有用に利用できるが、明らかではない。

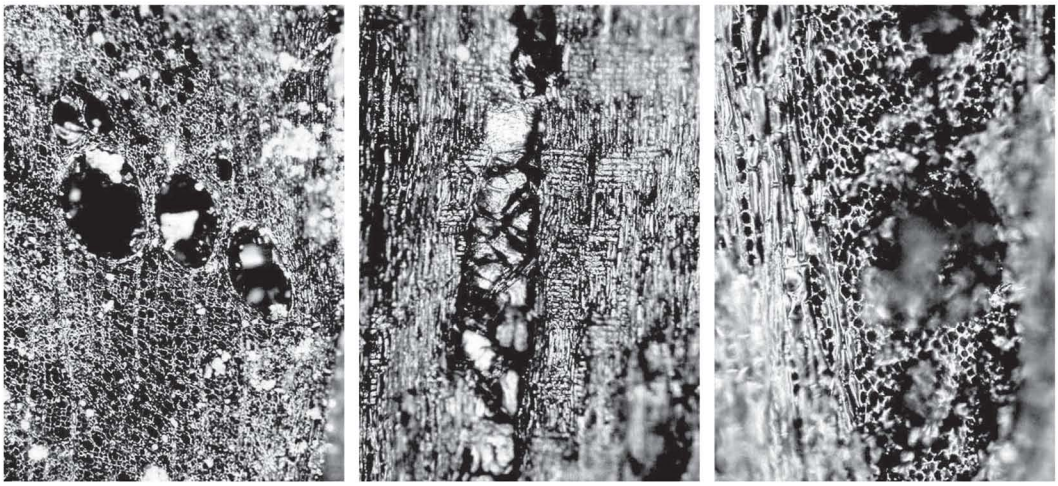
文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No.409，ニューサイエンス社，p.15-19.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ｉ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p. 2-14.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

八幡第２遺跡の炭化材

横断面 ▬▬▬▬ : 0.4mm　放射断面▬▬▬▬ : 0.4mm　接線断面▬▬▬▬ : 0.2mm

１. SI-1　試料１　埋土中　コナラ属コナラ節



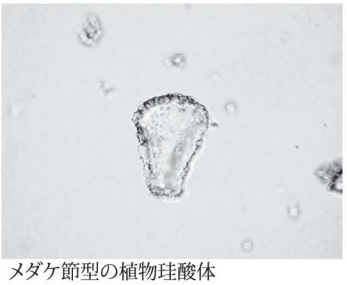
横断面 ▬▬▬▬ : 0.4mm　放射断面▬▬▬▬ : 0.4mm　接線断面▬▬▬▬ : 0.2mm

２. SI-1　試料２　集石外側　コナラ属コナラ節

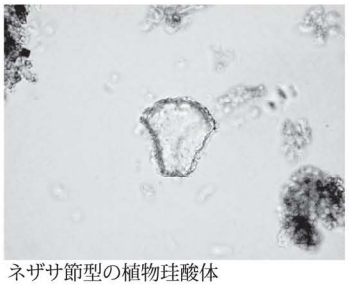
横断面 ▬▬▬▬ : 0.4mm　放射断面▬▬▬▬ : 0.4mm　接線断面▬▬▬▬ : 0.2mm

３. SA-9　試料１　№２　タケ亜科

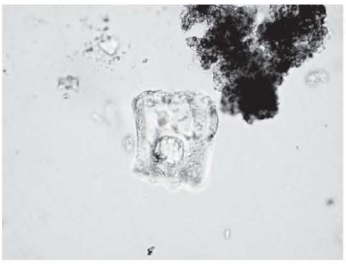
植物珪酸体および灰像の顕微鏡写真



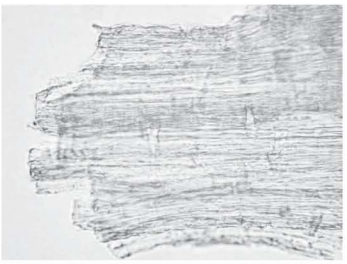
メダケ節型の植物珪酸体
SA９ 試料１



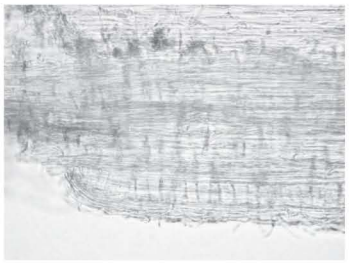
ネザサ節型の植物珪酸体
SA９ 試料１



ネザサ節型の植物珪酸体
SA９ 試料2



タケ亜科の茎部とみられる灰像組織
SA９ 試料１



タケ亜科の茎部とみられる灰像組織
SA９ 試料１

タケ亜科の茎部とみられる灰像組織
SA９ 試料２

50μm

八幡第２遺跡の炭化種実

1 イチイガシ子葉

1.0mm

2 モモ核片

5.0mm

3 イネ果実

1.0mm

4 イネ果実

1.0mm

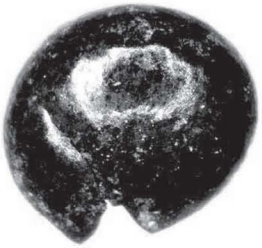
5 カヤツリグサ科果実

0.1mm

6 カヤツリグサ科果実

7 アカネ科?種子

1.0mm



8 キケマン属種子

1.0mm

第Ⅵ章　まとめ

本遺跡では、縄文時代草創期と弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。本章では、各時期における遺構・遺物について若干の言及を加えることでまとめとしたい。

第１節　縄文時代草創期

縄文時代草創期の遺構は集石遺構１基のみで、遺物の出土も少量であった。出土した隆帯文土器は、隆帯の形態・隆帯の貼り付け方・隆帯上に爪形文を施す特徴から宮崎市塚原遺跡[1]出土のものに類似しており、近接した時期が想定される。

礫と礫の間や周辺で確認された炭化物を加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、遺構内の炭化物は、11,400 ± 60 年 BP（１σの暦年代で BC11,820 ～ 11,740，11,530 ～ 11,210 年）、周辺の炭化物では 11,310 ± 60 年 BP(同 BC11,500 ～ 11,200 年）の年代値が得られた。

第２節　弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡９軒、土坑１基検出され、竪穴住居跡を中心に弥生時代後期の土器が多く出土している。その土器について、分類を行い、整理したいと思う。宮崎県の土師器の編年として松永幸寿氏の論考[2]があり、ここでは松永氏の論考を参考に、編年の基準となっている甕について分類し、その位置付けを行う。分類は、口縁部から胴部にかけて残存している 19 個体を対象とした。撹乱土坑から出土した 182、183 は大型甕になると思われるが分類対象から外した。分類基準は胴部形態・口唇部形態によって以下のように分けられる。

Ａ１類（24・30・66・69・70・152・160・186）

胴部形態は球胴を呈するものである。口唇部は横ナデによって面取りされ面をもつ。口縁部は直線的に外側にのびる。しかし、24 のみは口縁部があまり外側に開かず上位付近でわずかに外反し、口縁部形態に違いがみられる。

Ｂ1類（67・132・161～164・177・179・184）

胴部形態は卵形を呈する。口唇部は面取りをし、直線的に外側にのびる口縁部をもつ。

Ｃ1類（142・148・178）

胴部形態は長胴を呈する。胴部が直線的になるため他に比べ頸部の屈曲は緩くなる。口唇部は面取りをし、直線的に外側にのびる口縁部をもつ。

Ａ２類（50・181）

胴部形態は球胴を呈する。やや長い口縁部をもち、口唇部の面取りが甘く丸くなる。

以上、口縁部形態・口唇部形態から出土した甕は４類型に抽出することができた。

今回分類の対象とした甕は、おおむね中型甕の範疇に入るが、小型甕もみられる。

今回分類した甕の大半が口唇部を面取りする１類に当てはまる。口縁部が外方に開き、口唇部を横ナデによって面をつくるものは、都農町新別府下原遺跡の１号周溝状遺構[3]や高鍋町大戸ノ口第２遺跡の 13 号竪穴住居[4]から出土のものにみられる。

今回検出された９軒の竪穴住居跡の時期について、まずそのなかで一番多くの遺物が出土したＳＡ７の時期を松永氏の編年[5]をもとにみていきたい。松永氏は宮崎を県北山間部、県北平野部、宮崎平野北部、宮崎平野南部を大淀川流域と清武川流域と５つに細分し、在地系中型甕を底部形態に着目し編年している。その中型甕を軸に他の器種を編年上に位置づけている。当遺跡は宮崎平野部北部にあたり、宮崎平野部北部の編年（以下松永編年①）を使用し、補足的に県北平野部（以下松永編年②）・宮崎平野南部大淀川流域（以下松永編年③）の編年を参考にしたい。

ＳＡ７からは甕、壺、高坏、器台が出土している。甕は前述したように口縁部形態は１類となる。底部をみると上げ底になるものや端部がわずかに張り出し平底のものがある。このような特徴をもつものは松永編年①の２期が想定される。67 は日向市百町原遺跡の周溝状遺構[6]出土の甕に類似しており、松永編年②の２期～３期にあたる。甕以外の器種をみていくと、82 の高坏は新別府下原遺跡の２号

土壙[7]出土のものに類似し、松永編年①の２期にあたる。器台は宮崎平野部北部に良好な資料がないので宮崎平野南部大淀川流域から２期が想定される。以上のことからＳＡ７は松永編年①や③で２期に相当することから松永編年の２期と考えられ、弥生時代後期後葉となる。

次にそのほかの竪穴住居跡をみていくと、ＳＡ１～ＳＡ３は出土した土器は少なく、時期比定は困難であるが、ＳＡ２の上げ底の甕（22）からＳＡ７と同時期と考えられる。ＳＡ３は平底の甕（17）からＳＡ７よりは若干新しいと考えられる。

そしてＳＡ４は33や35の甕の底部径がＳＡ７出土の甕より小さくなっており、大戸ノ口第２遺跡13号竪穴住居[8]出土の甕が推測されることから松永編年①の３期に相当すると考えられる。ＳＡ５は床面では良好な資料がなく、床面出土の高坏（54）や覆土出土の甕（50）の口唇部の特徴から、松永編年①の３期～４期が推測される。ＳＡ８は地床炉出土の甕（132）や高坏（130）の特徴から松永編年①の３期～４期の時期に相当すると考えられる。

ＳＡ９については出土した土器も少なく推測の域を超えないが、ＳＡ８と接合関係にあり、近い時期が想定される。ＳＡ10は出土した土器は松永編年①の３期～４期の時期に相当する。出土した土器は全て覆土中であることから、住居の時期は同時期かそれ以前の時期に属すると推測される。

以上、出土した土器から竪穴住居跡の時期をみてきた。竪穴住居跡の変遷は、ＳＡ７・ＳＡ２が同時期に存在し、弥生時代後期後葉の時期に当たる。ＳＡ３がそれに続き、ＳＡ４が庄内式併行期の前半となる。ＳＡ５・ＳＡ８～ＳＡ１０は庄内式併行期にあたると推測される。また、フローテーションで確認された炭化種実のうちＳＡ４のイネとＳＡ７のイチイガシを放射性炭素年代測定した。その結果、イネは1960±40年BP（暦年代１σ：cal AD 40-60 ２σ：cal BC 30- AD 90）、イチイガシは1950±40年BP（暦年代１σ：cal AD 30-100 ２σ：cal BC 30- AD 130）という年代値が得られた。二つの種実はほぼ同時期の年代値が得られ、わずかにイネが古くなる。この結果は、土器から推測したことと若干の相違があるが、ＳＡ４で床面から良好な資料が出土していないことを考慮すれば、ＳＡ４とＳＡ７はほぼ同時期に存在していた可能性がある。

またＳＡ５・ＳＡ７では外来系土器が出土している。ＳＡ５の土坑２から出土した52は長胴の壺である。大分県鹿道原遺跡の24号竪穴住居[9]で出土している二重口縁壺や甕に類似している。鹿道原遺跡は大野川中流域に位置する遺跡で、52はその影響を受けているものだと考えられる。県内では、高千穂町岩戸五ヶ村遺跡[10]で大野川上・中流域の影響を受けた胴部に工字突帯のある甕や安国寺式二重口縁壺の出土が認められる。

そしてＳＡ７で出土した71は、平底の長頸壺で、口縁部に粘土を貼り付けている。このような特徴をもつものは高知の弥生時代中期後半～後期の土器にみられ、高知県田村遺跡群Ⅱの222号竪穴住居跡や117号土坑[11]から出土した長頸壺に類似している。県内では、瀬戸内地方の弥生時代中期後半～後期前半で象徴的な文様になる凹線文土器が新富町新田原遺跡[12]や鬼付女西遺跡[13]など51遺跡で出土している。南九州と瀬戸内系との交流については石川悦雄氏[14]や田崎博之氏[15]や梅木謙一氏[16]の論考があり、梅木氏は県内出土の凹線文土器の搬入品の多くは伊予地方からのものであるとしている。また鬼付女西遺跡[17]では凹線文土器とともに高知の土佐型甕が出土している。これらの凹線文土器や土佐型甕は後期初頭のものであり、ＳＡ７で高知の長頸壺と類似した土器が出土したことは、後期後半期の四国地域との交流関係を知る上で良好な資料となる。

【註】

（１）宮崎県埋蔵文化財センター　2001「松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第44集

（２）松永幸寿　2004　「日向における古式土師器の成立と展開－宮崎平野を中心として－」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（ｃ）（１））

（３）都農町教育委員会　1990「新別府下原遺跡」『都農町文化財報告書』第3集

（４）高鍋町教育委員会　1991「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集

（５）註２と同じ

（６）日向市教育委員会　1994「百町原遺跡」『県営圃場整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

（７）註３と同じ

（８）註４と同じ

（９）千歳村教育委員会　2001「鹿道原遺跡」『千歳村文化財調査報告書』第Ⅶ集

（10）高千穂町教育委員会　2000「岩戸五ヶ村遺跡」『高千穂町文化財調査報告書』第12集

（11）（財）高知県埋蔵文化財団埋蔵文化財センター　2004「田村遺跡群Ⅱ」『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第85集

（12）新富町教育委員会　1986「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集

（13）宮崎県教育委員会　1989「鬼付女西遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第32集

（14）石川悦雄　1984「日向における外来系土器の伝播とその地域性（１）－瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」『宮崎県総合博物館研究紀要』第九輯　宮崎県総合博物館

（15）田崎博之　1998「九州系の土器からみた凹線文系土器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成７年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書

（16）梅木謙一　2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（ｃ）（１））

（17）註12と同じ

Ａ－２区・Ｂ区調査区全景

縄文時代調査区（Ｂ区）

図版２

縄文時代草創期調査区

自然流路検出状況

ＳＩ１検出状況

ＳＩ１半截状況

赤化礫の集まり１

赤化礫の集まり１半截状況

赤化礫の集まり２・３検出状況

隆帯文土器出土状況